
流騎将伝～序章・黄天の鷹～

政久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流騎将伝〜序章・黄天の鷹〜

【Nコード】

N7784R

【作者名】

政久

【あらすじ】

目が覚めると森だった！？

若干歴史オタクな主人公が跳ばされたのは、後漢末期の中国。俗に言う三国志の世界だった。

その後、主人公は大陸一の歌い手を目指する3姉妹と出会ったのだ
が……あれ？この人達って男じゃないの！？

なんやかんやありつつも、3姉妹と共に歩き、3姉妹のために戦う主人公。

そして、そんな主人公の下に集まる個性的？な者達。

この話は、そんな主人公達の戦いの物語である。

注意事項 本作品はオリキャラのオンパレードとなっております
作者は文才に乏しいです 北郷君は桃香さんの所にお世話になっているようです 原作キャラ皆様の出番が少なめになることが予想されます 主人公はチートではありません（最強クラスにはなってもらう予定） オリジナルストーリーという名のねつ造要素が多分に含まれています 作者はギャグが下手です シリアル…じゃなかった。シリアスな文章になりがちです 作者は原作未プレイです
本作品をお読みになる際は、上記のことに気を付けてお読み下さい

生まれ落ちた雛鳥

「???」うつ、ここはいつたい……」

半開きの目に眩しい陽の光が染みた。

上半身を起こして辺りを見回すと、辺り一帯は木々が乱立する深緑の森林地帯だった。

上を見上げれば、青々と葉が茂った枝の間から木洩れ日が洩れ、どこからか鳥の囀りも聞こえている。

ここでふと『何故俺はこんな所にいるのだろう』という疑問が湧いた。

俺は確か…そう、帰宅するために住宅街を歩いていたはずだ。そしてその途中で後頭部に衝撃が走って……駄目だ、そこから先が思い出せない。おそらくそこで意識を失ったのだろう。

…まあ百歩譲ってそこまでは良いとしよう。

俺は何故こんな所で寝ていたんだ？

普通目覚めるなら病院だろ？…もしかして犯罪に巻き込まれて口封じのために拉致られて、死んだと思われて捨てられたとか！？

こうしちゃいられない、急いで家族に連絡を取らなくては！

慌ててポケットから携帯を取り出したが、画面を見てみるとそこには『圏外』の二文字が躍っていた…

???「……………ホントどうしようか…」

…完全に気が滅入った。

…そう言えば、まだ名乗っていませんでしたね。

気を取り直して、俺の名前は 有馬 慶鷹「アリマ ヨシタカ」
と言います。

趣味は、読書とゲームと釣りと野球。

運動神経は中の上ぐらい、頭の方は中の中の中。文系科目に強く

て数学がからつきしな至って平凡な高校生です。

歴史大好き人間で暇さえあれば、『信の野』『や』『三志』、
『太立伝』とかやってます。

…と、自己紹介はここまでにしておいて、とりあえず歩くことに
しましょう。

しばらく歩くと、どこからか水の流れる音が聞こえて来た。

慶鷹「…水だ！喉が渴いてたからちょうど良かった。
…でも飲めるのか？」

そんなことを考えながら茂みを掻き分けて進み、川のほとりに着いたのだが…

慶鷹「なっ、なっ、何なんだよコレ！！」

そこで俺は衝撃的な光景を見る事となった…

その川のほとりには、数人のかつて人だったモノが転がっていた。

首が無いモノ、腕が無いモノ、心臓を一突きされているモノ……

慶鷹「うつ…おえええ…」

ただ俺には刺激的すぎて、その有り様を見ただけで嘔吐してしまった。

しばらく吐いた後なんとか吐き気を抑えた俺は、川の水で口を濯いでから死体を調べ始めた。

まず目に入っ たのは死体の服装だつた。

それは、色々な布地をつなぎ合わせた継ぎ接ぎだらけの、現代日本では有り得ないようなみすばらしくボロボロの簡素な服装だつた。

次に、不謹慎であるとは思うが死体の持ち物や、その周辺に落ちている物を探ってみた。

その結果、見つかったのは刃が折れている両刃の剣が三本と全て漢字で書かれた本が一冊、木製の水筒等の日用品、そして貨幣らしき物が少しだけ見つかった。

この中から使えそうな日用品と貨幣らしき物を懷に収めて、今後どうするかを俺は考えた。

まず、あの死体は確実に他人の手によって殺されたものだ。

使用された凶器は、傷を見る限り剣や槍の様な刃物で斬られたり刺されたものと推測出来た。

次に死体の服装について疑問が残った。

現代の日本では見ることもない、如何にも昔の農民が着ているような服。

そして、これまた現代では滅多にお目にかかることの無い真剣：それも刀ではなく両刃の剣。少なくとも戦国時代のものよりもずっと昔の剣だ。

慶鷹「ホントどうなってるんだよ…」

本当に分けが分からない。様々な感情や思考が頭の中で混ざり合
ってショート寸前だ。

『とりあえずここから離れたい』

そう思って、そこから逃げるように森の中へと舞い戻った。

（1時間後）

あの場所から逃げるように離れた俺は、運良く人が使っている形
跡のある道に出ることが出来、棒占いという原始的かつ安易な方法
で進む方角を決めたのだが……

…進んだ先の目の前で美少女3人が中年男5人に囲まれているという、非常に不味い場面に出会ってしまいました。
ホントに今日はとんでもない厄日だ…

だがしかし、幸運なことに中年男共の目には美少女3人しか映っていない模様。

これはチャンス！ここでやらなきゃ漢が廃るってものだ。

だが相手は大の大人。更に質が悪いことに全員が武装している。

さて、どうしたものでしょうかね…

く???Sideく

中年妻「ヘッヘッヘッ…俺たちや運が良い。こんな上玉な嬢ちゃん達、そうそういないぜ」

中年式「まったくだな。さて、どう料理してやるのかな?」

私は各地を旅して歌でお金を稼いでいる旅の芸人姉妹。

次の街を目指して旅を続けていたのだけど、その道中で山賊に襲われてしまい、とうとう追い詰められてしまった。

「???」地和ちゃん、人和ちゃん…私達このまま死んじゃうのかな…」

弱気な言葉を吐くのは私達3姉妹の長女・天和姉さん。

「???」ちよつと姉さん!? 何弱気なこと言ってるのよ! おっさん達、私達に手を出したらただじゃおかないんだからね!」

天和姉さんとは逆に、強気な口調でまくし立てるのは私達3姉妹の次女・地和姉さん。

中年参「面白いこと言っじゃないか嬢ちゃん。そんな細い身体で、

しかも丸腰で俺達に勝てると思ってるのか？」

地和「……………くッ！」

姉さんは強気ではあるけど、はつきり言って私達に抵抗出来るだけの力はない。

『ホントにここで終わってしまうの？』

そう考えると無性に目の前の男達が恐ろしく思えた。

中年壱「へへッ…んじゃ、いただくとしますかねえ。嬢ちゃん達、覚悟するんだな」

中年四「まずは……………へへっ、その一番大人しい嬢ちゃんからだ！

！
」

天和「人和ちゃん！！」

地和「人和！！」

姉さん達が名前を呼ぶ。気付いた時にはすでに男の手が目前に迫っていた。

人和「っ…嫌ッ！！」

私は恐怖のあまり目を瞑った。しかし、同時に『ヒュン』という風切り音が聞こえ、男の手が私に届くことは無かった。そして、そのかわりに『ごはっ！？』という呻きが聞こえ、恐る恐る目を開けると、さっき目の前にいた男がうつ伏せに倒れていた…

（慶鷹Side）

慶鷹（なんとか第一段階は上手くクリアできましたね）

俺は心の中で安堵の溜め息を漏らした。

俺は今にも眼鏡を掛けた女の子に手を出しそうだった中年親父に、そこら辺にあった手ごろな大きさの石を投げつけ気絶させた。

人を傷付けるのは怖いが、目の前で人が傷付けられるのを見て見ぬ振りをするのはもっと嫌だ。俺の良心がそう叫ぶ。

そんな思いの下、行動に移したわけだが…残りの4人に居場所が

バレてしまった。

…まあ、ここまでは予想出来たことだ。

中年伍「ちいっ！このクソガキが！ぶっ殺してやる！」

中年「…というか、変態そつでハゲなおっさんが1人、剣を抜いて向かって来る。

慶鷹「誰がクソガキですか。この変態ハゲ！」

俺は反射的にそう叫ぶと、二発目の石つぶてをどこかで見たことがある芸人によく似た変態ハゲを十分に引きつけてから投擲した。

変態ハゲ「うばああっ!!」

投擲された石は見事にハゲの顔面に直撃。こちらに走って来ていた反動もあり、直撃一発で天に召されたようだ（気絶的な意味で）。それと気持ち悪かった。

中年壱「くそっ!! 相手はガキ1人だ! 3人で一斉に攻撃すんだよ!」

俺のようなガキ1人に手こずっていることに苛立ってか、1人の合図を皮切りに残り3人が一斉に掛かって来た。

慶鷹（…さて、では第二段階の実行に移るとしましょうかね）

そう言って、俺は即席ではあるが事前に準備しておいた”ある物

” を手に取り…

慶鷹「沈め！！」

『ブォーン！！』

それを振り回した。

『ドカツ！！ベキッ！！グシャッ！！』

中年壱「がつ！？」

中年弐「ごふう！？」

中年参「ぐはあ！！」

上手い具合に3人まとめて昇天させられたようだ（やっぱり気絶的な意味で）。

慶鷹「…ふう、一件落着…ですね」

俺は5人が気絶しているのを確認した後、女の子達の所へ向かった。

慶鷹「あの、大丈夫ですか？」

とりあえず声をかけてみる。

ピンクの髪「ふ、ふええ〜ん！助かったよお〜！」

水色の髪「お兄さんやるわね！カッコイイー！」

紫色の髪「あ、ありがとう…助かったわ」

3人とも無事なようだった。とりあえず一安心。

慶鷹「目の前で人が傷付くを見て見ぬ振りをするのは嫌ですからね。とにかく3人が無事なようめで良かった」

水色の髪「ところでお兄さん。さっき石が自然と動いたように見えたアレって何なの？」

水色の髪の子がそう尋ねてきた。おそらく最後に3人まとめてぶ

っ飛ばしたヤツのことだろう。

慶鷹「簡単な事。近くにあった石を糸の片方の端に結んで振り回しただけだ」

要は簡易製のモーニングスターみたいな物を力任せに振り回したのだ。我ながらあの短時間で良くできたものだと思う。結果的にも全員気絶させることが出来たし。

水色の髪「ふーん…ま、ありがとねお兄さん。
…そう言えば名前言ってなかったわね。
私は”張宝”よ。ヨッロシクうゝ！」

ピンクの髪「私は”張角”だよ」

紫色の髪「さつきはありがとう。私は”張梁”よ」

慶鷹「……はっ？」

一瞬、刻^{とき}が止まったような気がした。

慶鷹「…もっかい言ってもらえないか？よく聞き取れなくて…」

ピンクの髪「ちゃんと聞いてね。私は”張角”だよ」

水色の髪「私は”張宝”よ！」

紫色の髪「張梁”よ」

聞き間違いではなかったようだ。

慶鷹（張角・張宝・張梁って言ったら、後漢末期にあった黄巾の乱の指導者だろ！？何かの間違いじゃないのか？

…でも今までの状況から判断するに、ここは少なくとも日本じゃない……だとすると、俗に言うタイムスリップでもしたのか！？
…あれ？でも張角達って男じゃ……）

こんな具合に延々と続く思考の海に沈んでいると…

張宝「ちよつと！さっきから何ブツブツ言ってるのよ！」

慶鷹「うおっ！？」

『ドシン…！』

慶鷹「っつゝ！」

考えに耽るあまり、声をかけられたことに驚き尻餅をついてしまった。

…恥ずかしい…

まあ、今はそんなことは置いて、俺の疑問を手早く晴らすとしよう。

慶鷹「ちょっといいですか？」

張角「ん？どうしたの？」

ほんわかオーラを放つ張角が応えてくれた。

…って話が反れるところだった。

慶鷹「今この国を治めているのって漢王朝でしたっけ？」

張角「そっだよ？」

…うん、まあ予想通りなのだが…

やっぱり信じられない。

それでも、そうでなければ辻褄が合わない事が今までにあったのも事実だ。

慶鷹「あとここって何処か分かります?」

張梁「…あなた旅人かしら? 変な服着てるし、少ないとは言え荷物も持っているし」

ここは話を合わせた方が都合が良さそうだ。

慶鷹「…まあそんなところだ。この国の遙か東にある倭の国から来た者さ。各地を旅してたんだが、途中で道に迷ってしまっただけ…」

張角「ほえ…外国の旅人さんだったんだ…」

…彼女を見ているとなんか和む。

張宝「なるほど。だからそんな変な服着てるのね！」

変な服…と言ってもYシャツに学生ズボンだが。

…この時代では十分変か…

慶鷹「分かってもらえたようだな。で、ここは？」

張梁「ここは汝南から南西に10里の所にある森よ。私達はこれから讓陽へ向かおうと思っていたの」

慶鷹「そして、その途中で襲われた、と…」

張梁「ええ、その通りよ…」

女の子達…張3姉妹の事情は分かった。そして、ここが日本ではないことと二千年近く過去だということも判明した。

…厄日以外の何でもないじゃないか。

慶鷹「ホント、これからどうしよう…」

今の俺は、まさしく”天涯孤独”だった。

…ところが…

張梁「…よければなんだけど…私達と一緒に来ないかしら?」

張月「…え？」

…神は俺を見捨ててはいなかったようで、突然降りかかった事態に絶望しかけていた俺に、思いも寄らない救いの手が差し伸べられたのだった。

慶鷹「…迷惑じゃないのか？」

張梁「あなたが居てくれた方が色々と助かるわ。それに、助けてもらったお礼がしたいのよ」

右も左も分からない俺には大変ありがたい提案だった。

慶鷹「お礼はともかく、そちらが良いのなら是非とも」

張梁「交渉成立ね。じゃあよろしく。えっと…名前聞いてなかったわね」

慶鷹「有馬 慶鷹だ」

張宝「変な名前ね。姓が有で名が馬、字が慶鷹？」

慶鷹「いや、姓が有馬で名が慶鷹だ。字はないよ」

張梁「そう言えばこの国の人ではなかったわね。ならそれも頷けるわ。でも、それだと不便じゃないかしら？」

張梁の言うことにも一理ある。この世界を動く以上、名前はこちらの基準に合わせた方が何かと都合が良いだろう。

慶鷹「それも一理あるな……じゃあ、ここで会ったのも何かの縁、名前をつけてくれないか？自分でつけるのは恥ずかしいんだ。」

張梁「あなた…慶鷹はそれで良いの？」

慶鷹「構わない」

張梁「そう…姉さん達、何かある？」

張宝「うゝん…難しいわね」

張角「…思い付いた！」張月「なんてどうかな？」

慶鷹「どうして」張月「なんだ？」

張角「」張月」の」張」は私達から、
」月」は…お月様が綺麗だな
ゝって思ったから何となく」

慶鷹「月？てか何となくって…」

そう言った張角の指に釣られて空を見上げた俺は、その景色に心を奪われた。

いつの間にか夜の帳が降りていて、そこには満天の星空が広がり、満月が俺達を照らしていた。

『悪くない』

率直にそう思えた。

張梁「まったく姉さんは…」「いや、それでいい」…えっ？」

慶鷹「気に入ったよ。ありがとう張角、良い名だ」

張角「気に入ってくれて良かったよ」

張梁「…慶鷹が気に入ったなら文句はないわ」

張宝「ちいも異議ないし！」

慶鷹「では改めて、これからは張月 慶鷹「ケイヨウ」と名乗らせてもらおう」

張角「堅苦しい喋り方は止めてよ…そうだ！一緒に旅するんだから真名も教えてあげるね！私は”天和”だよ」

張宝「私は”地和”よ！改めてよろしくー！」

張梁「私は”人和”よ」

張月「ありがとう。ところで……………」
「真名”って…何？」

その後、人和こと張梁に”真名”について教えてもらった。

とりあえず、許可無く呼んだら『切り捨て御免問答無用！』という、大変神聖な名前であることは理解出来た。

張梁「…で、慶鷹。あなた、真名はどうするの?」

張月「…実は、真名についてはもう考えてあるんだ」

張宝「なにになに? 早く教えなさい!」

地和に急かされながら…

張月「”燕”…にしようと思っている」

…俺の真名を発表した。

張梁「…何か理由でもあるの？」

張月「まあ…ね」

…俺は自分の名前が好きじゃなかった。まあ、別に大した理由ではない。

名付けた親を嫌っていたわけじゃない。ただ単に攻撃的なイメージを持つ”鷹”よりも、自由に世界中の空を渡り続ける”燕”の方が好きただけだったのだが…

張角「うん！良いと思うよ」

張宝「かつこいいじゃない！私も賛成！」

張梁「慶鷹が自分で決めたことに口出しはしないわ」

…予想以上に好評だった。だからなんだというわけではないが…

張月「じゃ、俺の真名は”燕”だ。これからはそう呼んでくれ」

張角「分かったよ」

張宝「これからよろしく！燕兄さん」

張梁「よろしくね」

張月「3人とも、よろしく頼む！」

こうして、俺の長く険しくどこかおかしい三国志の旅は幕を上げたのだった。

くおまけく

張月「…ところで3人とも。かれこれ数時間放置してたのに、未だに目覚めないこの変態どもをどうする?」

張角「うゝん…放っておいていいんじゃないかな?」

張梁「甘いわね、天和姉さん」

張宝「そうよ！こんなヤツら、ギッタギタにしばき倒して…」

張梁「身ぐるみを剥いで持ち物も頂戴して、この先の街で売り払って私達の路銀にするのよ！」

張月「…結構えげつない事するんだな。まあ、だからと言って別に反対はしないが」

翌朝、4人がいた場所には顔が原型を留めていない程腫れ上がり、丸裸すっぽんぽんのハゲた変態が5人木に吊され、太陽光をそのツルツルに刈り上げられた頭で反射していたらしい…

生まれ落ちた雛鳥（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想、お待ちしております。

武者修行の日々（前書き）

第二話です。早速オリキャラが登場しております。

武者修行の日々

俺が張三姉妹と共に旅をするようになって、早5ヶ月程が過ぎた。

日々の食費や宿代、路銀を稼ぐために、俺も様々な仕事アルバイトをこなしてきたが、最初の頃は宿に帰った時にはクタクタで、翌日には筋肉痛なんてことはザラにあった。自身の力不足を痛感した日々だったと思う。

そこで、俺は山賊達の荷物を売り払って得たお金で長刀を買い、毎晩それを振ることにした。

最初は100回足らずで疲れていたのだが、少しずつ1日に振る回数は増えていき、今では500回は軽く振るえるようになった。

また長刀を振るだけでなく、腕立て等の筋トレに、余裕があれば早朝にランニングも行った。

その甲斐あってか、今では毎日の仕事を余裕を持って行えるまでに体力がついた。

そして、現代とはかけ離れたこの生活に、ようやく馴染めたと思えるようになったある日のこと…

張月「武道大会？」

張梁「そうよ。この街で5日後に武道大会が開かれるの。規模は小さいけど、入賞者には賞金も出るって話よ。腕試しもかねてどうかしら？燕兄さん」

俺は突然、武道大会に出てみないか？と人和に誘われた。

ちなみに、あれから俺のことを天和は”燕ちゃん”、地和と人和は”燕兄さん”と呼ぶようになった。

張月「俺なんかが出ても、入賞は望めないんじゃないか？」

確かに体力がついたとは言え、長刀を振り始めてまだ5ヶ月ではない。入賞など夢のまた夢…そう思って聞き返したところ…

張梁「だから」腕試し」なんじゃない。兄さん毎晩長刀振ってるで
しょ？結果がどうなるのであれ、自分の力を試すにはもってこいだ
と思うわ。それに、仮に入賞出来れば万々歳（路銀の足しになる）
じゃない」

張月「…それもそうだな」

…至極もつともである。

…と言うわけで、俺の武道大会への参加は決まったのだった。

〈5日後〉

時間はあっという間に過ぎて、大会当日となった。

天和達の厚意に甘え、大会までは長刀を振ることに集中し、昨日は休養に徹した。

武道大会の会場には40人程の参加者が集まっていた。

全員が如何にも武闘派な雰囲気や体つきで、こんな連中相手に細身な俺の武が通用するのか不安になった。

兵士「これより、武道大会を行います！」

『ドォーン…ドォーン…ドォーン…』

銅鑼の音が、武道大会の始まりを告げた。

大会は一試合を1対1で行うトーナメント制。相手を気絶させるか『参った』と言わせる、審判が勝負ありと判断した時点で勝利となり、八位以上になると賞金が出る。

…まあ入賞など不可能だろうが、やるからには全力でやるとしよう。

兵士「一回戦第一試合は驚拳選手対闇壁選手です。両名は闘技場にながって下さい」

俺の番号は三十七。番号を見る限り、俺の出番は当分なさそうだ。
参加者達の戦い方を見て学ぶとしますか。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

兵士「続いて、一回戦第十九試合。張月選手対 選手の試合を行
います。両者は闘技場へ上がって下さい」

試合は進み、いつの間にか俺の番になっていた。参加者の観察に夢中で気が付かなかった。

急いで闘技場へ上がった。今まで自分自身が混ざっていた観客席が、まったく別の”何か”に思えた。

眼前の対戦相手を確認する。

髭の生えた厳つい顔

筋骨隆々な巨体

手に握られた大斧

見た感じ、如何にも武闘派な大男だった。

おっさん「おい小僧！お前が俺の相手か？」

張月「…闘技場に上がってるんだから当たり前でしょう?。」

おっさん「お前みたいな小僧が相手だと? ハハハハ! お前みたいな
ひょろい奴はこの大斧の一撃でへし折れちまうぜ! ここは小僧が遊
びで来る所じゃねえんだ。とっととお家に帰んな!。」

…完全にイラッときた。 ふふふ…そこまで言うのならこっちもやり
返させてもらおうじゃないか…

…おでね!

張月「…そんなに棄権して欲しいとは…よっぽど自分に自信が無いんですね…ハッ！もしかしてその筋肉は張りぼてですか！？その大斧も実は斬れないただの棒とか！？」

おっさん「…なんだとお…？」

みるみる顔が真っ赤に沸騰していくおっさん。思ったよりも簡単にこちらの口車に乗ってくれたようだ。

おっさん「こんのクソガキがああああ！！！！！」

案の定、挑発に乗って真っ直ぐに突っ込んで来るオッサン。そのままの勢いで大斧が俺目掛けて振り下ろされる。

張月（あの程度の挑発に引っ掛かるとは…ホント馬鹿ですね。攻撃が大振り過ぎて俺でも楽に避けれる）

俺は大斧の一撃を横に動いて回避し、すれ違いざまにオッサンの脇腹を長刀の柄で突いた。

しかし流石は筋骨隆々の大男。ダメージはあったようだが、これぐらいで倒れはしなかった。

『ここで止まったら勝てなくなる』

そう思った俺は、手を休めることなく長刀を振り続けた。

張月「ふっ！やっ！たあああ！！」

『キーン！ガキイ！』

おっさん「くっ…うお！？」

『ドサッ！』

『ヒュン！』

遂に耐えきれなくなり、バランスを崩して倒れたオッサンに、俺は長刀を突きつけた。

審判「勝負あり！勝者 張月選手！」

観客『うおおおおお！！！』

こうして、俺は初陣をなんとか勝利で飾ったのだった。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

その後も、試合は流れるように進んでいった。

俺は苦戦しつつも、一戦一戦をしぶとく勝ち上がっていき…

張月「はああああ！」

『ドスッ！！』

相手選手「がつ！」

審判「勝負あり！」

… たった今、準々決勝への切符を手にした。

そしてこの瞬間、俺の八位以上入賞…まさかの賞金獲得が決まったのだった。

時は更に進んで準々決勝。

ベスト8となると、『もう楽には勝ち進めないだろう』と
思っていたのだが…

張月「ふっ!!」

『ガキイイン!!』

相手選手「くっ…ま、参った！」

審判「勝者 張月選手！」

…なんだかんだで思っていたよりもあっさりとベスト4に進んでしまったのだった。

-
-
-
-

-
-
-

-
-
-

-
-

-

そして迎えた準決勝：

相手は赤い髪を後ろで束ねた、所謂ポニーテールの女性だった。

赤髪「お手柔らかに頼むぞ、少年」

張月「こちらこそよろしくお願いします」

お互いにしっかりと握手を交わす。

…ここまで彼女の試合全てを見たが、俺のような未熟者でも分かる。この人の実力は、今までの奴らでは比べものにならないぐらい桁外れだ。

事実、ここまでの彼女は相手の攻撃を一度もくらわなかったばかりか、相手に攻める暇すら与えない熾烈な攻撃でここまで勝ち進んでいた。

まさしく烈火の如き槍さばきだった。おそらくこの国全体で見ても上位、下手すればトップクラスに位置するのではないだろうか？

…そして、この考えは当たっていたようだ。

兵士「それでは準決勝第貳試合、張月選手 対 太史慈選手の試合を行います！両名は闘技場へ上がって下さい！」

闘技場へ上がって、再び彼女と相對して俺は完全に悟った。

『今の俺では万が一にも勝てる相手ではない』

流石は呉の名将・太史慈と言ったところか。全く隙が見えず、どこから切りかかっていいのか分からない。

だが、これはあくまで”腕試し”だ。今、自分の出しうる力を十

二分に出せばそれでいい。何せ、ここまで来れたこと自体が奇跡に近いのだから。

兵士「試合始めー!!」

『ドォーン!!』

聞き慣れてしまった銅鑼の爆音とともに、準決勝は幕を上げた。

太史慈「いくぞ少年!!」

開始とほぼ同時にそう言って、太史慈は正面から突きを放つてくる。

今までの相手の突きより遥かに速い。だが、まだ辛うじて見切れる範囲だ。

『キン！キン！』

張月「くっ！」

俺は攻撃を受け流し続けることで精一杯だった。

太史慈「どうした少年！守ってばかりでは戦に勝てないぞ？」

張月「受けることで精一杯なんですよ……」

太史慈「戦いの最中に相手に自分の状態を教えるのは愚の骨頂だぞ、少年！」

張月「……ごもつとも」

『キーン！ガキーン！ヒュン！』

張月（……！空振ってバランスが崩れている……今がチャンスだ！）

太史慈が空振り、重心が前に来ているのを見て、俺は勝負に出た。

…しかし…

張月「ハアアッ！！」

『ガキイイツ！！』

張月「なっ！？」

全身全霊を賭けた渾身の一撃は、思いの他あっさりと止められてしまった。

太史慈「相手の隙を見抜けるだけの眼は持っているか……だが少年、相手の”実”と”嘘”を見抜ければ、戦場で生き残ることは出来ないぞ」

張月「くっ！」

太史慈「だが、今の一撃は速さのある良い一撃だった。私が反応するより若干速かったよ」

張月「ぐあっ!?!」

『ガキイン!!!』

次の瞬間、俺の長刀は後方に吹き飛ばされ、目の前には槍が突き付けられていた。

張月「ここまで……ですね。降参です……」

兵士「勝負あり！勝者 太史慈選手！！」

『ドサッ……』

試合終了の宣告が響き渡ると同時に、俺は後ろに大の字で倒れ込んだ。

元々腕試し感覚で出場していたとは言え、いざ負けるとなると悔しさが滲み出した。

張月「……あゝ……悔しいなあ……」

そんな俺に近づいて来る影が1つ…

太史慈「だが、太刀筋はなかなか良かったぞ、少年」

…対戦相手の太史慈だった。

張月「…ありがとうございます。こちらも色々勉強になりました」

太史慈「いや、こちらもなかなかやるので驚いたよ。そして楽しかった。鍛錬を怠らなければ少年は強くなれる。私が保証しよう」

そう言うと、彼女は俺に笑いかけた。

張月「ははは…ありがとうございます。決勝、頑張ってくださいね」

太史慈「うむ！強くなった時にまた闘おう！楽しみにしているぞ、少年！」

張月「ええ！」

…俺に1つの目標が出来た瞬間だった。

-
-
-
-

-
-
-

-
-
-

-
-

-

その後、30分の休憩を挟んで三位決定戦に出たのだが、疲れが溜まっていたのかあと一歩及ばず敗れてしまい、武道大会は四位入賞という、初出場としては上々の成績で幕を閉じた。

ちなみに、決勝では太史慈が圧倒的な力量を見せ、相手選手を10秒足らずで滅多打ちにして地に沈めていた。

…俺と闘った時、手加減してたんですね…

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

張梁「惜しかったわね、燕兄さん」

張角「でもでも、かつこよかったよ」

張宝「うんうん、あまつさえ入賞なんてしちゃうんだから！」

宿に戻った俺は、三姉妹から労いと祝福の言葉を受けた。

張月「ははっ…見られてたのか」

自分の闘いが見られていて、身内や親しい者から賞賛を受けるのは、どうにもこっばずかしい。

張梁「兄さん、出てみて何か収穫はあった？」

張月「ああ！出てみて正解だった。ありがとう人和」

張梁「ふふ…それなら良かったわ」

張月「…ところで、そっちの稼ぎの方はどうだった？」

張角「そうだった！れんほーちゃん！」

張梁「はいはい。これが今日の稼ぎよ」

そう言っ て人和がひっくり返した袋の中からは…

張月「うおっ！？凄い量じゃないか！」

今までにないぐらいの貨幣がジャラジャラと出てきた。

張梁「今日は武道大会で人が集まっていたこともあってか、かなり盛

況だったの」

張宝「ちいのおかげね！兄さんも見事賞金獲得したことだし、今日はお祝いも兼ねてパーッといくわよ！」

張梁「何言ってるのよ地和姉さん。兄さんの賞金は今後のためにも「うん、賛成！今日はパーッとこっちにお〜！」…天和姉さんまで…

…ハア、分かったわ。せつかくだし、今日は朝まで騒ぎましょう」

張角「やった〜！ちーほーちゃん、れんほーちゃん、燕ちゃん！買い物に行くよ〜！」

宝・梁・月「おー！！！」

…その日、ある宿の一室は朝まで灯りが消えることはなかった。

あまりに騒ぎ過ぎて、宿の店主から大目玉をくらい、翌朝宿泊客から冷たい視線を戴く羽目になったのは余談である。

アレはキツかった…

武者修行の日々（後書き）

政久「どうも、作者です。この度はこのような駄作を読んでくださりありがとうございます。」

今回は、この後書きを利用して主人公紹介を行いたいと思います。

主人公のパラメーターに関しては現時点のものであり、今後成長していく予定です。

今後も数話毎に、後書きで成長した能力値の紹介をしていくつもりです。

能力値は『信の野』や『三志』風に表記しています。

～主人公紹介～

・本名 有馬 慶鷹【アリマ ヨシタカ】

・改名後

姓 張【チヨウ】

名 月【ゲツ】

字 慶鷹【ケイヨウ】

真名 燕【エン】

・性別 男

備考	・現在の能力値				・兵科適性	・趣味			
	読書	ゲーム	釣り	野球		政治	知謀	武力	統率
	C	C	D	C		61	70	63	55
	水軍	弓兵	戟兵	剣兵					
	計略	兵器	騎兵	槍兵					
	C	B	D	D					

本作品の主人公。よく分からないうちに過去？にタイムスリップ？し、張三姉妹と出会い共に旅をするようになる

髪は漆黒で顔は優男系。歴史関係の書物を読み漁っていたり、歴史シミュレーションのゲームをやり込んでいたりするため、歴史に関してはかなり知識を持っている

動物が好きで、トクに鳥や猫が好き

現在の武器は長刀

太平要術の書（前書き）

時間が空いてしまいました。申し訳ないです。

とりあえず第3話です。

太平要術の書

武道大会から3ヶ月、俺がタイムスリップ？してから8ヶ月が経過した。随分と時が経つのが早く感じる。

武道大会の日以来、俺は『打倒！太史慈！』を目標によりいつそ
う武芸に励むようになった。

さらにそれだけでなく、未来に起こるであろう事態に対処する力を習得するため、稼ぎの一部から割り振られる小遣いを貯め、その
お金で兵法書等の書物を買って漁っては読書に励んだ。

最初こそ字が読めなくて困ったりしたが、人和や地和の助けを借りながら、字を覚えることと同時に内容を理解することも行った。

勿論昼間は稼ぎを得るために働いているので、それらのことをするのは必然的に夜、並びに早朝だった。

…とまあ、これがここ3ヶ月間の俺の生活だ。

そして俺達4人は今、白馬「ハクバ」という場所で活動をしているのだが…4人揃って『現実の壁』とでもいうべき大問題にぶち当たっていた。

その内容というのが…

張月「…今日の稼ぎもこれだけ…か」

張梁「不味いわね…このままじゃ旅費はおろか、宿代と食費すら賄えないわ…」

張角「れんほーちゃん、燕ちゃん…どうするの?」

…収入の低下による深刻な資金不足である。

張梁「どうするも何も…ほぼ手詰まりね。稼ぎが増えない限り、身体を売るしかなくなるわ…」

張月「金を借りようにも、俺達が担保に出来る物なんか無いし…」

張梁「全員のお小遣いを回収しても、根本的な解決にはならないし…」

月・梁『ハア…どうしたものか（かしら）…』

俺と人和は、ほとんど同時に溜め息をつく。

俺達の資金管理を担当している人和がここまで辟易しているのだから、今陥っている資金不足は相当なものだろう。

張月「…とりあえず、俺は読み終わった書物売って来る。小遣いの回収と合わせてしばらくは凌げるはずだ。3人に身体を売るよう

な真似はして欲しくないからな……」

それだけ言つと、俺は席を立つた。

張梁「……ごめんなさい兄さん……」

張月「何言ってるんだ人和。困った時は助け合つのが仲間つてもんだろ？」

張角「んゝ……でも、燕ちゃんって仲間って言うより、姉弟って感じだよな」

……言われてみれば確かに。天和が決めたとは言え、姓は”張”だし、旅先で何回か姉弟に間違われたこともあった。

張月「はは…確かにそうかもな。じゃあ行ってくるよ。」

…ところで、ずっと気になってたんだが地和はどうしたんだ？」

いつもなら一緒にいるはずの地和が見当たらないことが疑問だったので、軽く尋ねてみたところ…

張梁「地和姉さんは散歩よ。帰る途中に『ちょっとぶらついて来ると言って、どこか行っちゃったわ』」

張月「それは散歩と言った方がいいのか？もう少しで日も暮れるし、暗くなる前に帰って来れば良いんだが…」

…って、こんなことしたら店が閉まっちゃう！じゃ、行ってくる！」

時間が押していることもあって、俺は話を切り上げると扉を開けて、数束の竹管を抱えて飛び出して行った。

店主「ありがとうございます！」

張月「ふいふ…何とか間に合ったか。書物の方もそれなりの額で売れたし、これではらくは大丈夫だな」

道中急いだこともあって、俺は何とか閉店前に書物を売り払うことに成功した。

日はついさっき山の向こう側へ隠れてしまい、白馬の街は暗闇が染み渡りつつあった。

張月「さてと…用も済んだし、後は帰るだけ…って、あれは…地和か？」

来た道を戻ろうとしていた俺が、偶然視界に捉えたのは、人和曰わく散歩に出ていた地和だった。

遠目に見えたただけなのだがその表情は固く、どこで手に入れたのかは分からないが、その手には分厚い書物が抱えられていた。

その様子が気になった俺は、地和に声をかけた。

張月「地和！」

張宝「え！？…って、兄さんじゃない。どうしたのよ」

張月「それはこっちの台詞だ。わけの分からない事言っていなくな
ったって聞いたから心配したぞ」

張宝「あははは…ちょっとね？」

笑ってはいるが、さっき遠目に見た時と変わらず、やっぱりこ
となく表情が固い。

張月「…何か無理してるんじゃないか？悩み事があるなら天和達に
相談することをオススメするぞ」

張宝「…そこに兄さんは入らないの？」

張月「んゝ…別に入れてもいいんだけど、女の悩みは女に聞いた方が
早いし、的確な助言が貰えると思うぞ」

張宝「…フフ、確かにそうね！胸の悩みなんかを兄さんが相談しろって言ったら、ただのへ・ン・タ・イなものね」

そう言った地和が浮かべる笑みは、実に小悪魔チックだった。

張月「…まあ、悩み事は無理に抱え込まないこと。助けてくれる奴が周りにはいるからさ…」

張宝「ふふ〜ん…ありがと、兄さん」

そう返すと、地和はまたしても小悪魔チックな笑みを浮かべた。
これで肩の荷が少しでも下りてくれてればいいんだが…

張月「そう言えば、地和が持つてるその本、どこで手に入れたんだ？」

張宝「ん？これ？これは、さっきぶらついてた時に会った男の人がくれたのよ。何でも『私達の役に立つ物だ』って話だったんだけど……」

張月「胡散臭さ丸出しだな……そう言うのを謳い文句にしている物は、たいていが法外な金を騙し取るための嘘っぱち……ってのが定石なんだが……」

張宝「でも、そうしたいのならどうしてタダで譲ってくれたのよ？」

張月「うーん…凄いつてことを見せ付けて信用させ、紛い物を法外な値段で売りつける…いや、それならもっと裕福な奴を狙うな…スマン、分からない」

張宝「…ま、いつか。とりあえず、この本…えーと…そう、『太平要術の書』を帰ってから読んでみるわ。全てはそれからよ！」

張月「ああ！頑張ってくれ…って、ちょっと待て」

張宝「？今度は何？」

地和：今何て言った？

張月「太平要術の書だつて！？」

張宝「？そうだけど…兄さん、それがどうかしたの？」

太平要術の書と言えば、史実において張角が入手したとされる妖術書じゃないか！？

なんで天和じゃなくて地和の手に渡るのか？とか疑問はあるが、これはそれ以前の問題だ！

張月「地和、それは棄てた方がいい！」

張宝「え！？なんでよ兄さん！？」

張月「それは…」

しまった。何て説明すればいいのか考えてなかった。

流石に黄巾の乱云々を教えるわけにはいかないし…

張宝「？どうしたのよ？」

張月「え」とだな…そう、そんな胡散臭い物正しいはずがないだろ？」

…自分で言っておいて何だが、かなり無理があるように思う。

張宝「だから何よ？せつかく手に入れた機会、そんなことで手放せるわけないじゃない！そもそも、私達にそんなこと言ってられる余裕は無いって、兄さんも気付いてるでしょ！？」

張月「……………」

…言い返す言葉も無い。俺達が資金不足で藁にもすがりたい状況なのは重々承知しているし、『俺、実は未来人なんだ』なんて言っても信じられるわけが無い。

詰まるところ…

張宝「とにかく！私は帰ってからこの本を読む！それで効果やいい術が無ければ兄さんの言う通り棄てるわ。それでいいでしょ？」

張月「……………仕方ない…か。分かった」

…今の俺には妥協することしか出来ない。

結局、地和は太平要術の書を数日で読破。書かれていた内容を天和・地和共々実践したところ集客率は急上昇、数日で以前より遥かに高い収益を叩き出し、半月ほどで白馬では知らない者のいない人気者となったのだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

（2ヶ月後）

地和が太平要術の書を拾ってから2ヶ月、様々な事情により随分と長らく居座ることになった白馬の街を出てから約1ヶ月が経った。

集客率の爆発的上昇に味を占めた天和達は、太平要術の書の力をフル活用し始め、棄てる気配は微塵も感じられない。

そして俺も、『太平要術の書の内容を3人が覚えてしまった以上、棄てても無意味』と判断し、棄てさせることは諦めていた。

そして将来起こるであろう黄巾の乱に向けて、俺に何ができるのかをずっと考えていた。

しかし、なかなか名案は浮かばず途方に暮れていたところ、天和達が…

張月「え？舞台に來ないかだって？」

張角「うん、そうそう」

張梁「兄さん、最近疲れてるみたいだったから、気分轉換にどうか

な？って思ったの」

張宝「私達の歌を聞けば、疲れなんてあつと言つ間にぶっ飛ぶわよ！」

張月「…断る理由が無いな。それに、収益がとんでもないことになつてからの3人の舞台は見たことが無い。楽しませてもらおう」

…と、言うわけで、俺は今、天和達の舞台の会場となる河原へと来ているのだった。

河原は天和達の歌を聞きに来たらしい聴衆で埋まっていて、動き回るのもつらそうなように思えたので、俺はすぐ近くの橋の上から

見ることにした。

橋の上にも少くない聴衆がいたが、河原と比べれば遙かにマシだった。

しづはくすむと...

聴衆『ウオオオオオオオ!!!!!!』

野郎共の野太い大歓声と同時に天和達が現れた。

張角「みんなー！今日も私達の歌を聴きに来てくれてありがとう！
」

張宝「今日も張り切っていくわよっ！耳の穴かっぱじってよおおお
く聴きなさいっ！！」

張梁「それでは早速、本日の一曲目をどうぞ！」

聴衆『ウオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！』

そんな可愛らしい挨拶と、暑苦しくて野太くうるさい、何と言え
ばいいのかよく分からない、分かりたくもない聴衆の雄叫びと共に、

3人の舞台は始まったのだった。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

3人『 』

聴衆『うおおおおおおおお!!!!』

時が流れるのは早いもので、時間的に考えて3人の舞台も間もなく後半と言う所に差し掛かった。

その時、俺のいる位置の真下ぐらいから、3人が歌い終えると同時に男2人の怒鳴り声が聞こえ、橋の上から見みると、2人の客が言い争いをしていた。

天和達は困ったように見つめ、進行を止めている。

周りの客も迷惑そうにしているが、2人から距離を取るだけで何もする気配は無い。

張月「……ここは天和達の義理の姉弟？として、俺が一肌脱ぐとしますかね……」

そう決めると、俺は橋の上から声をかけた。

張月「ちよいとそこのお2人さん！」

聴衆「あん？何だお前は？」

聴衆「こっちはコイツとケリ着けるのに忙しいんだ！邪魔すんな
！」

張月「いえいえ、お2人が決闘されようが結婚されようが、こちら
としてはどうでも良いんですがね…」

…周りの迷惑だ。やるなら他の所でやれ！ここは全員が楽しむ場所
だ！他の奴らのことが考えられないなら来んじゃねええ！！！」

聴衆「……………」

俺がそう吠えたと一瞬にして、当人達はおろか他の聴衆達まで静
まり返った。

… 静寂という名の槍がガラス製のマイハートに突き刺さる… 駄目だ、耐えきれない！

… そんなわけで、この場の空気に耐えきれなくなった俺は、踵を返しても来た道を宿へと急いだのだった。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

天和達の舞台を抜け出した俺は、宿屋の部屋で1人寂しく物思いに耽っていた。

あの時の静まり返った空気が、未だに鋭い刃物のようにざっくりと心に突き刺さっている。

傷心状態で意気消沈してから数時間後、天和達が舞台を終えて帰って来た。日はすでに沈み、空には月が昇っていた。

張宝「たっ だいまゝ…って兄さん!？」

張月「…ああ、3人共お帰り。今日はすまなかつたな…」

俺は自分でも分かるぐらいに元氣のない声で3人に謝った。

張角「燕ちゃん元氣出して。私達は全然氣にしてないから」

張梁「そうよ兄さん。むしろお礼を言いたいぐらいだから」

張月「…お礼？どういうことだ？」

人和の言葉に疑問を覚えて聞き返したところ、少し前から舞台の最中に客同士が口論になったり、それが高じて殴り合いの喧嘩にまで発展することが少なからずあったらしい。

天和達も客に強く出ることが出来ず、かと言って放置するわけにもいかず、困っていたらしい。

張梁「ハア…なんとかならないものかしら…」

説明し終わると、人和は深い溜め息をついた。

そんな中、俺は人和の話を聞いて1つの案が頭に浮かんだ。

張月「…人和、今日みたいな事を起こさせず、もし起きたとしても上手く治めることが出来るかもしれない方法を思い付いたんだが…」

張梁「！…興味があるわ。是非聞かせてくれないかしら兄さん？」

角・宝『燕ちゃん（兄さん）！その方法を教えて！早急に！速攻で！即刻！』

張月「うおっ！？ふ、2人とも落ち着け！？」

角・宝『あっ…ごめんなさい…』

俺は2人の勢いに思わずのけぞった。

人和はおろか、天和と地和までもが俺の話に食い付いたことには驚いた。口にはしていないが、このことは人和だけでなく天和と地和にとってもよほどの懸念材料なのだろう。

張月「…分かった。ただ、これをやるとかなり金がかかるんだが…」

張梁「今日みたいなことを押さえ込めるなら、ある程度は構わないわ。内容にもよるけど…」

俺達の財布の紐を握っている人和からの許可が下りたので、俺は自分の考えを述べた。

張月「自前の護衛部隊、”会場警備隊”というものを作ろうと思っている。」

角・宝・梁『会場警備隊？』

3人が揃って声をあげた。

張月「ああ。具体的には会場周辺の警備と会場内の見回り、何か問題があった場合はその対処・鎮圧に当たる。
これが主な仕事内容だ。こうすれば、騒ぎを起こそうとする奴らの抑止力となるし、騒ぎが起きてもすぐに鎮圧可能だ」

張角「人手の方はどうするの？」

天和が俺の案に対する質問を口にする。

張月「それは浪人や家も職も無い人達から集めてこようと思う」

張宝「移動する時はどうすんの？」

天和に続いて地和からも質問が飛ぶ。

張月「元々家を持たない人達が主力になる予定だから問題はないはずだ」

張梁「…人を雇うのにお金がかかるけど、将来的なことを考えると私は賛成ね。姉さん達はどうかしら？」

人和は賛成してくれたようで、天和と地和にもどうかと聞いた。

張角「うん！それでたくさんの方が楽しんでくれるなら文句は無いよ」

張宝「ちいも賛成！」

どうやら、俺の案に3人とも賛成してくれたようだ。

ちなみに、この案の本当の目的は、第一に黄巾の乱が起きてしまった場合に主戦力となりうる精鋭を育て上げること。

第二にその精鋭部隊を乱以前から組織することによって、信者（この場合はファンか？）を監視・抑止し、黄巾の乱にまで発展させないこと。

そして最後に、仮に黄巾の乱が起きてしまい、天和達が追い詰められた場合に盾となって天和達を逃がすことの出来る俺に忠実な部隊を育成すること。

この3つが本当の目的だ。

張月「ありがとう。それじゃあ早速明日から人員確保を始めるとするよ。人和、資金管理の方はよろしく！」

張梁「任せておいて兄さん。頑張つてね」

張月「ありがとう。それじゃ早速明日から人員確保を始めるとするよ。人和、資金管理の方はよろしく！」

張梁「任せておいて兄さん。頑張つてね」

張月「ああ。じゃ、3人ともお休み」

張角「お休み〜…す〜…ZZZ」

張宝「天和姉さん寝るの早いわね…」

張梁「お休みなさい、兄さん」

かくして、俺は歴史改変に向けた準備に、いよいよ着手することになったのだった。

戦乱の世に生きるといふこと（前書き）

・主人公の現時点での能力値

統率 60

武力 66

知謀 77

政治 72

・兵科適性

剣兵 B 槍兵 C

戟兵 D 騎兵 C

弓兵 B 兵器 B

水軍 C 計略 B

戦乱の世に生きるということ

警備隊設立を決意した翌朝、俺は早速良い人材を求めて平原の街の中心街にやって来ていた。

隊員は募集もするが、その集めた兵士達をまとめて指揮を執る俺の副官みたいな立場を任せられる人材や、腕の立ちそうな奴がいないかをこの目で見て回り、この耳で聞いて回っていた。

…だがそんな人物には簡単に見つかるはずもなく、情報もそうそうある分けではない。あっても大したことなかったり、他に仕事がある…といった具合で困り果てていた。

そんな所に……

住民壹「あ、暴れ馬だー！！みんな逃げろおー！！」

住民貳「うわあああ！！」

住民参「助けてくれええ！！」

…住民達の悲鳴が街中に響き渡り、声のした方を見ると、一頭の馬が、逃げ惑う住民達を蹴散らしながら、道の真ん中をこちらへ向かって爆走していた。

張月「…釣れたのは良い人材でも情報でもなく暴れ馬、か…」

そう愚痴った後、道の脇に移動し馬の速度に合わせるように、馬

の進路前方に薙刀をぶん投げた。

そして、狙い通りに突然前方に突き刺さった薙刀に驚いた馬は棒立ちとなった。

その隙を逃さずに俺はその馬に飛び乗り、着けられていた手綱を握った。

…その後、また馬は爆走を開始したのだが、なんとか制御しきれた

ようで、300Mほど走った所で大人しく止まってくれた。

-
-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

馬商人「いやあ、本当に助かりました！ありがとうございます！」

馬が大人しくなってから数分後、馬の飼い主らしき馬商人が放り投げてそのままにしていた俺の長刀を持ってやって来た。

で、今に至る分けなのだが…

張月「いやいや、お礼なんていりませんから」

馬商人「それでは私の気が治まらないんです。どうかコイツを買ってやって下さい！」

張月「でも、馬商人が馬をそんな簡単に譲っていいんですか!？」

馬商人「構いません！受けた恩は絶対に返すのが私の信条ですから！それにあなたが貰ってくれた方がコイツも喜びます」

張月「…ハア…分かりました。ご厚意に甘えさせてもらいます…」

…と馬商人の押しに勝てず、『礼代わりに』と止めた馬をそのまま譲り受けることになってしまった。

…太っ腹だねえ、この人。

馬商人「ありがとうございます！そうそう、私は”弘北”と申します。幽州と冀州を中心に馬を扱っております」

張月「俺は”張月”と申します。ではご縁があればまた会いましょう」

弘北「はい、またどこかで」

別れの挨拶を交わして、気分転換がてら、俺は早速貰った馬を走らせるのだった。

…餌とか厩とかどうしよう？

-
-
-
-
-
-
-
-

『張月は馬を手に入れた』

しばらく馬を走らせた俺は、町外れの川のほとりで馬を止めた。

張月「…ふう、なかなか爽快だったな。しかし、”あの大会”での経験がこんな所で役に立つとは思わなかったな…」

俺の言う”あの大会”とは、旅の途中で立ち寄った街で開催されていた”流鏑馬”みたいな騎射の大会だ。

入賞&賞金獲得を目指し、僅かな日数ではあったが現地の馬商人の下で乗馬・騎射の訓練に励んだ。

結果を言えば、その大会で入賞は出来なかったのだが、練習の甲斐あって馬に乗ることだけは出来るようになったのだ。

あの時は所持金が白馬の時ほどではないけど、かなり逼迫していたから結構必死だったのを覚えている。

訓練の過程で何度落馬して頭を打ったことが…

俺は馬上で『よく頑張ったなあ俺』としみじみ思った。

その後、俺はしばらく思考の海に沈んでいたが、少し地面が恋しくなあって馬から下りた。

張月「しかし、改めて見てみると結構綺麗な毛並みだな…」

下馬した後、改めて貰った馬を眺めているとそう思う。

若干青みがかった美しい毛並み。

千里先をも見通しそうな鋭い眼光。

風を切っているような軽快な脚力。

…もしかして、かの赤兎馬に並ぶぐらいにとんでもない名馬だった
りして。

…まあいい。とりあえず名前を付けてやらないとな。

張月「……よし！お前の名前は”蒼空”だ！」

馬…もとい、蒼空は頷くように嘶いた。

張月「気に入ってくれたようだな…よし！もうちょっと遠くまで行ってみるか」

そして俺は再び馬改め蒼空を走らせた。

張月「そして何故こうなつた？」

-
-
-
-
-
-
-
-

山賊「兄ちゃん、良い馬持つてんじゃないか！」

山賊「その馬置いてけば命は見逃してやるよ」

現状報告。森の中で山賊10人に囲まれてます。ちょっと調子に乗って遠乗りしすぎたようです。

『蒼空を超越せば命は助ける』とは言っているものの、蒼空を引き渡したところでバツサリ殺^やられるのが落ちだと思っ現実。

命の危機なので全力で抗ってみたいと思う。

張月「…置いていけと言われて素直に置いていく馬鹿がどこにいる！あんたおつむの方が逝ってんじゃないか？」

やっぱり馬鹿には挑発が一番よく効くと思う。

山賊壹「言わせておけばこのガキがあー!!」

山賊貳「人が下手に出てれば調子に乗りやがって…!!」

張月（山賊である以上、穏やかもクソもないだろうが）

しかし、どうしたらこの状況から抜け出すことが可能だろうか？

やはり全員…いや、半数以上を気絶させて山賊達に諦めさせるか、突破口を開いて来た道を全力で駆け抜けるべきか？

そんな事を思っていると...

山賊「死ねやこのガキッ!!」

張月「...!!」

『やられる!』

そう思った俺は、とっさに薙刀を振った。

ただの牽制であり、防御のつもりだった。

怪我をさせるつもりなど毛頭なかった。

しかし...

『ザシュッ！……ドサッ！ドッ……』

張月「……あ……」

……慣れない馬上からの攻撃だったため目測を誤ったのか、俺の一撃は襲いかかって来た山賊を頭と胴体できれいに2つに分けていた。

張月「……あ……ああ……」

山賊式「このガキ仲間を殺りやがった！……もう許せねえ！……」

山賊参「殺つちまえ!!」

俺は何をしたんだ？俺の一撃はどうなったんだ？何故この山賊は俺の目の前で真つ赤な水の池に沈んでいるんだ？

…そうだ、俺がこいつを斬ったんだ…殺したんだ…俺が、自分自身のこの手で…っ！

山賊『オオオオオ!!!!』

山賊達が俺を殺そうと一斉に攻め掛かって来る。

それが俺には異様なまでゆっくりに見えた。

『ズバァッ!!!』

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

山賊十「ぐああああ！！！！？」

『…………ドサッ…………』

張月「…………終わった…：か…」

…無我夢中だった…

ひたすら薙刀を振るい、斬りかかって来る山賊達を身体が反応するまま片っ端から切りまくり、気が付けば血溜まりと人であった物体に囲まれて、俺1人だけが蒼空に跨っている生き残っている…という状況になっていた。

どうしたことが、『人を殺した』という実感は全くしなかった。

俺自身は初めて人を斬り、初めて他人の命をこの手で奪い、初めてこの手を血で汚した…というのにも関わらず…

辺り一面に転がる山賊達の亡骸を見ても何も感じなかった。

ただ無気力に佇んでいた俺は、何気なく薙刀を見てみた。

薙刀は、本来の鈍色の刃の所々に山賊達のモノと思われる血の朱^{アカ}が幾筋かの流れを創り、一滴、また一滴…と、美しくも汚れた朱を大地に滴らせていた。

ここに来てようやく、俺は自分が人を斬り、その命を奪ったことを理解し、実感した。

張月「…ははっ…人って、結構簡単に死ぬんだな…ははっ…」

乾いた笑いが辺り一帯に空しく響いた。

どんな態度をとればいいのか分からなかった。

張月「ははは……？これは…涙？泣いているのか、俺は…？」

いつの間にか、俺の目からは涙がこぼれていた。

俺の精神は人を殺したという事実には堪えきれなかったようだ。

張月「…くっ……いや、これで良かったんだ…これで…」

その後しばらくの間、俺は蒼空から下りてその場につづくまで
地面を濡らしていた。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

…どのくらい涙を流していたのだろうか？

気が付いた時には空は茜色に染まりきり、すでに暗くなりつつあった空の一角には、三日月と一番星が輝いていた。

その光景は、初めて人を斬ったことで精神的にまいっていた俺の心に強く焼き付いた。

それと同時に、本来ならばあってはならない感情も、俺の中に湧き上がった。

『これは仕方のないことだ』

そう思うことで、自分自身を丸め込もうとしていた。

確かに、これは命を蔑ろにした人として絶対にあってはならない感情だ。

しかし、この感性は平和な現代を生きてきたからこそそのモノであり、この頃では人の死は至極当然のように側にあるモノ。そして、人々も至極当然のモノとして受け入れていた。

更に今は後漢末期。政治の腐敗による漢王朝の衰退、悪政による民の困窮、それに伴う山賊等の増加：そしてこれから来るであろう群雄が割拠する戦国時代：命を奪わずしては何も守れない、生き残れない、より過酷な時代に突入しつつある。

そのような御時世、命を奪うことに何の躊躇いを持つ必要があるだろうか？

命を奪うことを躊躇えば、待っているのは自身、あるいは身内・仲間の死だ。

それに、俺は天和達を守るために警備隊設立を決めたんだ。将来的に、人を斬る必要が出て来る可能性は…悲しいことだが十分にあり得る。

今回の事は、いつか来る”それ”のための下準備だったと思えばいい。

どこかでこの感情を体験していなければ、いざという時に感情に吞まれ、何も出来ずに天和達が…なんて最悪の事態にもなりかねない。

天和達を失ってしまうぐらいなら、いつそのこと羅刹なり殺人鬼なりと呼ばれた方がマシだ。

はつきり言つて、俺の考えていることは現代日本の人々から見ればキチガイもいいところだろう。

だが、ルール無用の無法地帯たるこの世界を生きるなら、自分自身のルールは絶対に必要だ。

そうでなければ、人殺しを当たり前に受け入れることなど俺には到底出来ない。

だから、俺は天和達を守るために人殺しを受け入れることにした。

そうでもしないと、俺の心はその罪の重さに堪えきれず、確実に潰れてしまうだろう。

俺はよつやく顔を上げ、物言わぬ屍達を見やった。

張月「…これは、この荒廃してゆく世界を生き抜くには致し方なきこと…だ。…悪く思わないでいただきたい」

それだけを呟くと、ずっと近くに控えるようにしていた蒼空に跨り、守るべき者達の待つ場所へと風を切った。

その呟きが自分自身への言い訳だったのか、屍達へ捧げる祈りだったのか…それは、今の俺には分からなかった。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

俺が天和達の待つ宿に着いた頃には、日は完全に山の向こうへと隠れてしまっていた。

泣き腫らして沈んでいる顔を天和達に見せるわけにはいかないの
で、部屋に入る前になんとか笑顔を創った。

張月「ただいま……」

張梁「あつ、燕兄さんお帰……」

俺を迎えてくれたのは人和。しかし、人和は俺を見るなり固まっ
てしまった。いったいどうしたんだ？

張梁「に、兄さん！その格好どうしたのよ！？」

普段はクールな人和が珍しく焦っていた。そこで、人和の指摘し
た俺の服装を確認してみることにした。

服…血だらけでほぼ真っ赤

ズボン…やっぱり血だらけ

腕…傷だらけのやっぱり血まみれ

…あゝ…うん、そりゃ驚くよね。しくつたなあ、これは。

張角「れんほーちゃん、どうし…きゃあああ！！燕ちゃん何があったの…!?」

張宝「ちよつ、兄さん血だらけじゃない!」

人和の悲鳴に似た叫びに誘われて顔を出した天和と地和も似たような反応を示した。

張月「あゝ…まあ、色々あったんだよ」

夜で暗かったから、他人に見られなかったのは幸いだったな。

-
-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

張梁「…で、何があつたのか洗いざらい話して貰うわよ、兄さん？」

張月「…はい…」

その後、俺は一晩中人和を中心に3人から説教をくらうハメになつたのだつた。

戦乱の世に生きるということ（後書き）

主人公が精神的に強くなった？回でした。

次回、オリキャラのオンパレードが始まります。

ご注意下さい。

部下を求めて東奔西走

〱翌朝〱

初めての殺人から一夜が明けた。

天和達（主に人和）から一晩中説教をくらい寝不足な俺は、遠出のために蒼空を入れた馬小屋にいた。

張月「…今日も遠くまで行くからよろしく頼むな…ふぁ…」

寝不足なせいで頭が回らず、欠伸を連発している俺。

もし蒼空に人間並みの知能や感性があったとしたら…

『ぎゃはははは！！なんつー間抜け面してんだよお前っ！ぎゃははは！！』

…なんて笑われていたに違いない。

そんな間抜け面をしながらもどうしてここにいるのかと言えば、さっき口にした通り、昨日行けなかった場所まで足を伸ばすためだ。

その目的は人材探し。やっぱり優秀な奴が1人でも多いに越したことはないし、他人から聞くよりも自分で見た方が確実だ。

そんなわけで、今日は昨日の森を抜けた先にある隣の村へ行く予定だった。

だ
っ
た
の
だ
が
…

「???」へへっ！こんな良い獲物に出会えるとは、アタイはついてるぜ！」

「???」…そうだな」

…はい。お察しの通り、また山賊に絡まれています。

相手は6人。リーダー格は、真ん中の黄色の鎧を身に付けた顔に傷のある小柄な女の子に、額から左頬まで斬られた痕があるちょいと厳ついお兄さんを見た。

張月「…で、何かご用ですか？」

流石に何時までも冷や汗垂れ流して固まってるわけにもいかない
ので、実質的に意味がありそうで全く無い問い掛けを試みる。

「…？？」
「…そんなの決まっている！」

「…？？」
「そうだった！！アタイと勝負だ！！！」

山賊達が一斉にずっこけた。

…そこは普通『馬寄越せ!』とか『身包み置いてけ!』とかじゃないの?

???「…またか…」

女の子の思いもかけない発言は、山賊達にとっては馴れたことのようにだ。

敵ついお兄さんが盛大に溜め息ついて『またか』とか言ってるあたり、彼女の唯我独尊っぷりに大分前から苦労しているようだ。

立場的に天和達と俺の関係によく似ているように感じる。普段はそれほどじゃないけど、やる時は俺の意思とか意見なんか完全無視

だからなあ…

???「…狗葉、毎度のことだが、一騎打ちよりも馬を奪つことが先じゃねえのか？」

???「うるせえ！アタイが闘うって言ったら闘うんだよ！」

厳ついお兄さんが諫言をするが、頭の女の子は無視。お兄さんの方も、元から聞き入れるとは思っていないように見える。ただ、2人とも明後日の方向向いて話してるし、残りの山賊の方も多少揉めてるようだ。この隙にこっそり…

???「どこに行こうってんだ？」

…逃げられなかった。

張月「…どうして闘いたいんだ？」

何となく気になったので聞いてみた。

???「アタイが強い奴と闘いたいからに決まっている！見たところ、お前なかなか強そうだからな。だから…

…アタイと闘ええええ！！！！」

そう叫ぶやいなや、女の子は身長ほどもある大剣を構え、『問答無用』と言わんばかりに真一文字に突っ込んで来た。

『ブオン!』

いきなりのことだったので俺は反応出来ず、間一髪で蒼空から飛び下りて大剣の一振りを避けた。

???「アタイの一撃を避けるとは、あんたやるじゃないか! やっぱ思った通りだぜ!」

張月「そりゃどーも」

敵とは言え、褒められるのは悪くないな。

???「...お前は武器持ってたらず誰にでも突っかった挙げ句、避

けられたら毎回それだな……」

…何か聞こえた気がしたけど気にしない。

???「くううう！燃えてきたぜ！アタイの名は”官亥”だ！行つくぜええ！」

全身で『アタイ燃えてます』を表現しながら、官亥は再び突撃をかまして来た。

自身の背丈と同じかそれ以上の長さの大剣を軽々と振り回すあたり、官亥はその小柄な体に似合わないぐらいの怪力の持ち主であった。しかし、初めの一撃こそ焦ったものの攻撃自体は至って単調。ビビりさえしなければ避けるのは容易だった。

官亥「くっ！逃げ回ってないで勝負しやがれ！」

張月「馬鹿力と正面切って闘うほど、俺は馬鹿じゃないもんでね」

官亥「こ…の…ヤロー…！」

『ブオン…！』

張月「ふっ！」

『キーン！ガキイツ！』

時間が経過するにつれ、官亥の動きは少しずつ鈍くなり、肩で息をするようになった。

勝機を探して守りに徹していた俺は、ここぞとばかり反撃に転じた。

『ギイン！ギイン！』

最初から飛ばしすぎたことでスタミナ切れなのは目を見るより明らかだ。俺の攻撃も徐々に避けきれなくなっている。

そして…

『ガキイン！！ヒュンヒュン…ザクッ！』

…とうとう武器を弾き飛ばされ、彼女は俺の眼前に膝を屈した。

官亥「ちくしょっつ…参った…！」

「こうして、俺は官亥との一騎打ちに辛くも勝利したのだった。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

張月「…マジでどうしよう」

その後、俺は思案に暮れていた。なぜなら…

官亥「是非あんたの…いや、旦那の部下にしてくれ！…いや、断られてもアタイは旦那に着いていくぜ！」

…という具合に、官亥に”旦那”と呼ばれ土下座された挙げ句、勝手に着いていく宣言を現在進行形でくらっているからだ。勝

「つか官亥、それはただのストーカーだ。」

張月「官亥…」

官亥「何だい旦那？」

俺が声を掛けると、彼女は顔を上げ、キラキラした熱い視線を俺に向けてきた。

その時、俺は彼女を見ていてふと思った。

『こいつらを丸ごと抱え込んで、適当に調k…訓練してしまえば警備隊完成じゃないか？』

…と。

曲がりなりにもこいつらは山賊だ。ここにいるのは6人だが、少なく見積もっても後10～20人前後はいてもおかしくない。

警備隊の人数は50人、将来的には100～200人ぐらいを考えているが、こいつらの山賊団が俺の予想通りの人数だったなら警備隊の土台は作れるだろうし、予想を少し上回るだけでも十分に機能する警備隊が作れるはず。

張月「…色々言いたいことはあるが、今は置いておこう…。官亥、お前の部下がどれくらいいるか聞きたい」

俺の言葉に彼女はしばらくポカンとしたが、すぐに考え込んでこ
う言った。

官亥「……んーと……」
「ごじゅう……剛鬼、何人だっけ？」

…オイ、お前ホントにリーダーなのか？

剛鬼「…お前は…ハア…41人だ…」

官亥のこの言葉を受け、一騎打ちの間ずっと空気だった巖ついお兄さんが呆れながら答えた。官亥、部下の人数ぐらい把握しておけよ…

だが、人数的には予想していた通りだ。官亥のこの言葉を受け、一騎打ちの間ずっと空気だった巖ついお兄さんが呆れながら答えた。官亥、部下の人数ぐらい把握しておけよ…

だが、人数的には予想していた通りだ。これならそっくりそのまま警備隊に出来そうだ。

張月「そうか…なら、そいつらの所まで案内してくれないか？」

俺の発言を聞いて、彼女は『部下にしてくれる』と思ったのか、より一層目を輝かせて快諾。

俺はすぐに彼女達の拠点へお邪魔することになった。

張月（官亥）のパーフェクト更生教室（前書き）

あとがきにオリキャラ2人のプロフィールを載せてあります。

張月（官亥）のパーフェクト更生教室

官亥「ここだぜ旦那！」

張月「…まさか館が拠点だったとは…でも、思ったよりもまとまな拠点だ」

官亥&蔵ついお兄さん他4名に案内されること20分とちょっと。
俺は無事に、彼女達の拠点に辿り着いていた。

これは森の中でも小高い丘の頂上近くの開けた場所にあり、蔵つ
いお兄さんの話によれば、放棄されていた館に手を加えてそのまま
拠点としたらしい。

元からあったと思われるが、周囲のには土塀が張り巡らしており、

門もしつかりした物だ。

後から造つたらしい櫓もあるし、立地条件も相まって多少廃れてはいるが十分に拠点と言えるものになっている。

ちなみにこの厳ついお兄さん、名は”牛金”と言つらしい。

…官亥も牛金も、三国志のゲームに出てたよな？

確か…官亥は黄巾党、牛金は魏の所属で、2人とも軍事力に特化したタイプの武将だったはず。

…何で所属も活躍した年代も違う2人が一緒にいるのかは分からないが、両方とも一級とまではいかないが、比較的優秀な武官だったはずなので、こっちにとつちや僥倖と言つべきか。

官亥「じゃ旦那、中に案内するぜ！」

張月「…頼む。俺を認めてもらえれば良いんだが…」

不安感いっぱい俺は呟く。

すると、俺の心情を感じ取ったのか、官亥が満面の笑顔で振り返りこう返してきた。

官亥「安心してくれ旦那！旦那に忠誠を誓わない奴は、アタイがぶちのめして跪かせてやるからな！！」

そして、そのまま門をくぐって中へと消えて行った。物騒なことこの上ない発言であった。

…そして官亥。それは結局、認めてないのと同じことじゃないのか？

牛金「…あいつの言葉は無視してくれると助かる」

官亥の発言を受け、今度は厳ついお兄さん改め、牛金が側に寄って来て、疲労感を多分に含んだ口調で囁いた。

張月「…苦労してるな、アンタも」

俺も天和達に振り回されることは日常茶飯事だから共感が湧くね。
牛金とは良い友達になれそうだ。

そう思っていた矢先、牛金からもう一言…

牛金「…何、俺の幼少の頃からの知り合いに比べりゃどつてこと
ねえよ…アイツ、事あることに俺を…フフフ…（泣）」

…悲壮感たつぷりですね、オイ。あんたの幼なじみとやらはアレよ
り更に酷いのか！？

牛金の幼なじみとやらを猛烈に気にしつつ、牛金と肩を並べるよ
うに館の門をくぐり、中へと吸い込まれるように進んで行った。

-
-
-
-

-
-
-

-
-
-

-
-

-

官亥「さあ！これがアタイの城だぜ！」

官亥に案内されるまま、館の中を進んで行った俺だったのだが…

張月「……………なあ…」

牛金「…言つな…コイツ…いや、コイツらにそれを求めるのは無謀だ…」

…館の内部は、物が至る所に散乱していて、味の踏み場も無いほどだった。

手が加えてあつた外装とは打って変わって、樽や食糧、武器や様々な日用品でこつた返っていて、壁も汚れだらけだし、蜘蛛の巣も至る所に張られていてとにかく汚い。

つか「無理」じゃなくて「無謀」ですか…

官亥「そんじゃ、アタイは手下達を連れて来るぜっ！」

それだけ言うと、官亥は俺と牛金、他4名をこの場に残して1人で更に奥に消えて行った。

牛金「…俺もなんとかしようとしたことはあつたんだが…」

張月「…だが？」

牛金「…数日で諦めた」

張月「……………」

よく見ると、所々に整理された場所があるのはそのためか…

牛金「ああ…あの時の俺の苦勞はいつたい…OTL」

そうばやいて牛金は崩れ落ちた。

…頑張れ牛金。少なくとも俺は応援しているぞ。

牛金に哀れみを感じていたところ、にわかに奥が騒がしくなり、
やがて…

『ズガン！バキィッ！ドシンッ！』

『うぎゃあああ！！？』 『ぐああ！！』
『ガフッ…』

… 何かが倒れる音や、男性の悲鳴や断末魔が大音量で聞こえて来た。

… ホント何なんだ？

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

（約30分後）

『ドタドタドタドタ』

断末魔や倒壊音をBGMにすること約30分。ようやく奥が静かになり、すぐに大勢の足音が聞こえて来た。

官亥「すまねえ旦那！全員ぼこる…ん、連れて来るのにちよつと手こずった…って、どうしたんだ剛鬼？」

昔の苦勞を思い出して未だに凹んでいる牛金を見て、訝しげに首を傾げる官亥。

…牛金が本当に哀れである。

張月「（…察してやれよ）ところで、後ろの奴らが残りの手下達か？」

…何故かボロボロになっている奴が多いのが気になるが…

官亥「おうっ！アタイの自慢の手下達だぜ！

おいお前ら！この方がアタイ達の新しい頭だぜ！忠義を尽くせよ？
さもないと…」

部下『全身全霊をかけて誠心誠意尽くさせていただきますっ！！！！
！（泣）』

官亥がそう言うなり、全員が青ざめた今にも泣き出しそうな表情

と声で土下座をかましてきた。

…官亥… 肉体言語で O H A N A S H I やがったな…

官亥「それでいーんだよ」

官亥はかなりご満悦なようで、腕を組んで満面の笑みで部下達を見下ろしている。

…俺の不安感がものの見事に粉碎された気分だ。是非とも「ここに来るまでの心配を返せ」と言いたいが… まあいいや。

官亥や牛金、他の山賊達の様子を見ていて心情的には大分楽になったし。

官亥「旦那！旦那からも一言言ってやってくれ！」

官亥から催促される。やっぱり、新しく上に立つ以上はこういった挨拶みたいなのは必須ですね。

俺は2・3歩前へ出て、山賊達の視線を一身に浴びながら話し始めた。

張月「…あ…さて…まあ、なんだかんだでお前らの頭になってしまったわけだが…『こんな奴が頭で大丈夫か？』とか、いろいろ言いたいことはあるだろうが、とりあえず聞いてほしい。お前らは今の生活に満足しているか？」

山賊壹「どういうことだ？」

張月「不安定な収入、討伐軍に追われたり、物を奪うために戦った
り…と、いつ死ぬかも分からない生活。
…そんな生活にお前たちは満足しているか？」

山賊壱「んなわけないだろうが!!」

山賊貳「そうだそうだ!!」

山賊参「俺達だって好きでこんなことやってるわけじゃねえ!!」

やはり好き好んで山賊をやっている面子はいないようだね…

これならなんとか説得出来そうだ。

張月「そうだろう？そこで、そんなお前らに良い話があるんだ」

山賊式「良い話？何だそりや？」

張月「それは…」

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

俺は山賊達を前に、警備隊の構想を話した。

話していく内に自分でも分かるぐらいに熱が入ってしまい、かなり長々と熱く語ってしまったが、山賊達は静かに俺の話を聴いてくれた。

話し終わった後の感想も、ほとんどは好意的なものだったのだが、中には…

山賊「あまりに都合が良過ぎる話だな」

…このように考える慎重な者もいた。

おそらく、コイツらの説得が警備隊設立への最終関門となる。そう思った俺は更に言葉を続ける。

張月「…まあ、確かにこの仕事も命の危険が絶対無いか？と言われるとそうでもない。政治の腐りきったこのご時世で安定した高収入、命の危険も少ないなんて仕事はそれこそ私利私欲を貪る役人ぐらいのものだろうよ。

…だが、山賊業よりかははるかにまともな仕事であることは保証しよう」

山賊達「……………」

張月「流石に俺を信じろとまでは言えないが、ここは1つ、騙されたと思って俺について来てみてはくれないか？」

山賊達『…………ザワ…………ザワ…………』

俺の話を聞いて、少し離れた所に仲間内固まって話を始める山賊達。時々聞き取れる言葉を拾う限り、悪い感じを抱いている者は少ないようだ。

この様子なら、良い返事が返ってk「てめえら……」……何だ？

ふと聞こえた呟きに吊られて振り返ると、そこには…

官亥「…さつきから黙って聴いてりゃあ旦那の言う事に一々ケチ付けやがって…」旦那の言うことは絶対”って言ったはずだぜ？」

山賊達『ガクガクブルブルブル…』

…憤怒のオーラを全身に纏った官亥がいた。
というか、お前が言うほど反対されてない気がするんだが？

後、山賊達のその異様な震え様は何だ！？

官亥マジ何事！？

官亥「…そこんとこ、少し語り合おうぜ？…剣で」

なるほど、某首相の『話せば分かる』ならぬ『戦^ヤれば分かる』の
方程式ですね。

官亥「さあ、覚悟はいいか？」

…その後、およそ30分間に渡って官亥の『第二次話し合い』(という名の暴力制裁)が続いたのだった。

俺は人が飛び、壁にめり込む阿鼻叫喚の地獄絵図を、牛金他4名と一緒にただただ眺めていた。

-
-
-
-

-
-
-

-
-
-

-
-

-

官亥「…分かったかてめえら!？」

山賊達『申し訳ありませんでしたあ!!!（泣）』

30分後、官亥の前に山賊達がズラリと並んで土下座していた。

頭を地に着けているためその表情は伺い知れない…というか、全員顔をボツコボコにされているため、土下座してなくても表情は分からない。

まあぶっちゃけそんなことはどうでもいいのだが、俺にべったりと言つか何と言つか…そんな印象が強かった官亥が、この人数の山

賊達を平伏させてふんぞり返っているのが信じられない。

張月「…なあ、牛金…官亥って…」

牛金「…アレがいつものアイツだ。俺も正直信じられないんだがな…
…アンタに対するアイツの態度が」

言わずとも、俺の心中を察してくれたのか？あるいは顔に出ていたか？

…後者なら改善しないとな。

牛金「…まあそれは置いといて、あの調子ならアンタが頭として認められるのは決まったようなもんだろっよ。おめでとさん、そしてよろしく頼むぜ、新しい大将さんや」

そう言う牛金はかなりにやけていて、その言葉はとても皮肉っぽく、少々イラッと来た。しかし、官亥のここまでの様子を見る限り間違いでもなさそうだ。そういうことなので…

張月「…ハア…ありがとう…とっておくか。ここまでの過程やら、いろいろ納得出来ないものはあるが」

…俺も諦め気味の口調で返すのだった。

牛金「…とりあえず、大将となるからには真名を預けておこう。俺の真名は”剛鬼”だ。改めてよろしく頼む」

張月「ん、確かに受け取った。じゃあ次は俺の番だな。俺の真名は”燕”。こちらよろしく」

牛金「おう」

『ガシッ』

俺は牛金改め、剛鬼とがっちり握手を交わす。

言い過ぎかもしれないが、ある意味俺が『一軍の将になった』ことを実感した瞬間だった。

-
-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

その後、先に剛鬼と真名を交換したことに關して一悶着あつたものの、山賊達とのO H A N A S H Iを終えた官亥とも真名を交換した。

” 狗葉 ”

これが彼女の真名だそうだ。

「殺す！剛鬼絶対殺す！」

「何でこんなことになってんだああ！！？」

『頑張ってください副頭目！！』

狗葉と剛鬼は真名交換の後からずっと乱闘を続けている。

そして、他の山賊達はその周りから思い思いに声援を送っている。

そんな中、俺は少し離れた場所から1人その様子を眺めていた。

彼らはこれから同じ警備隊の仲間として、日々顔を会わせることになる連中だ。俺が自分で考えたことなだけあり、これからのことを思うと、つい顔が綻んでしまう。

張月「ふふ…楽しくなって来た」

ギャー スカ騒ぐ彼らを見ていて、そう呟かずにはいらなかった。

張月（官亥）のパーフェクト更生教室（後書き）

・姓 官【カン】

・名 亥【ガイ】

・字 ？？？

・真名 狗葉【クヨウ】

・性別 女

・現在の能力値

統率 68

武力 80

知謀 31

政治 13

・兵科適性

劍兵	A	槍兵	C
戟兵	B	騎兵	C
弓兵	D	兵器	D
水軍	D	計略	D

〈備考〉

黄色い鎧に頬の傷がトレードマークの元山賊の少女。

張月との一騎打ちに破れ、自らを破った張月に惚れ込みほぼ強引に部下となった。

張月の言うことには素直に従う張月第一主義者。犬みたい…というより、直感に頼ったり、嗅覚がすごかったりと、行動が犬に近い。

男勝りで、考えるよりも手が先に出る性格。山賊として暮らした期間が長かったためか、喋り方も男っぽい部分が多分に見受けられる。

小柄だが、自分の身長よりも長い大剣を軽く振り回すほどの怪力の持ち主。

幼児体型だが、本人は全く気にしていない…と言うか、その手のことには興味がほとんど無いようだ。

座右の銘は『旦那（張月）のためならどこまでも！』

戦場では自身の背丈以上の大剣“雷凰”【ライオウ】を振り回して張月と共に駆け回る。

戦兵	剣兵	・兵科適性	政治	知謀	武力	統率	・現在の能力値	・性別	・真名	・字	・名	・姓
C	B		5 6	7 1	7 5	7 7		男	剛鬼【ゴウキ】	???	金【キン】	牛【ギユウ】
騎兵	槍兵											
D	D											

弓兵 B 兵器 B

水軍 D 計略 B

〈備考〉

元山賊の副頭目で、官亥の部下を勤めていた。

顔に傷痕があり、いつも不機嫌そうな表情をしていて若干口が悪い部分はあるが、根はとても誠実で面倒見のいい性格。

官亥が張月に敗れた際に共に部下となった。

とある事情から軍略・政治に通じていて、ある程度は心得ている。

武力の方も官亥程ではないにしろ力があり、軍事・政治をソツなくこなせる万能武将となっている。

ただ、その誠実な性格故に、官亥に振り回されたりと気苦労が絶えないようだ。

非常に手先が器用で、日曜大工をよくやっている。

戦場では”鉄心”【テッシン】という両刃剣と”牙鷲”【ガオウ】という弓を使って戦う。

2人の友人（前書き）

また時間が開きましたが、戦極姫3をやってて投稿が遅れました。

今回は多少短めです。

2人の友人

…官亥、牛金などが部下となり、無事に警備隊を設立してから4ヶ月が過ぎた。

元が山賊のため始めは統制や規律を守らせるのに苦労したが、圧倒的な影響力を持った官亥：狗葉の力と、牛金：剛鬼を筆頭とした数人の良識派の助力もあって、1ヶ月後には十分にまとまった部隊となった。

その後は、当初の目的通り天和達の舞台に護衛兼会場警備として同行。

回数を重ねるうちに経験を積み、それと同時に会場警備のノウハウを得て、様々な問題の対処をした。今では騒ぎを起こす馬鹿共は減り、起きても早急な鎮圧が出来るようになっていた。

資金などの問題も、天和達の援助があったために、何も問題は無かった。

しかし、ここに来て新たな問題が浮かび上がっていた。

天和達の人気が高まるにつれて、観客の動員数も増加。それに伴って会場も広くなり、今の人数では警備しきれなくなった。つまり、兵士が足りなくなったのだ。

「いや、勿論兵士も足りないのだが、それ以上に問題なのは、その兵士達をまとめることの出来る指揮官向きの人材が狗葉・剛鬼を除いていないことだった。

今は創業を支えてくれた数少ない元山賊の良識派数人に任せているのだが、彼らはどちらかと言えば文官向きの人間だったため、ど

こか力不足が否めなかった。

張月「…と、言うわけなんだが…2人とも、伝え聞いた話でも知り合いでも、何でもいいから良い人材に心当たりは無いか？」

『これだ！』と言える人材は見つからず、良い案も思い浮かばず…で行き詰まっていた俺は、狗葉たちにも話を聞いてみることを考え付いた。すると…

官亥「それならアタイの親友が強いんだぜ！ま、アタイほどじゃね

「がな！」

牛金「…俺にも心当たりはあるにはある……だが…」

…なかなか良い答えを聞くことが出来た。

張月「本当か！？『鼻屑目に見て…』何てこと無くか？」

官亥「おう！この辺りでアタイが本気で闘^ヤり合える数少ない奴だぜ」

…なるほど。全力の狗葉とまともに闘えとなると…かなりの剛勇

の持ち主と見ていいだろうな。これは期待出来そうだな。

張月「…で、剛鬼の方も心当たりがあるみたいだが…かなり嫌そうだな…」

先ほどの返事からみればあまり乗り気ではなさそうだが、表情は複雑というか…迷っているみたいな感じだ。

牛金「…アイツは本当の天才だよ。何でも出来るし、非常に博識だ。俺に色々と教え込んだのはそいつだし、なんたって一時期朝廷に出仕していた時期もあるぐらいだからな。もっとも、上司と馬が合わなかったみたいでな…職を解かれて故郷に帰って来て、今は山中で仙人みたいな生活を送っている」

…それはすごいな。中央の役人になるなんて、よほど頭が良くなけりゃ無理だろう。そんな知恵者がうちに来てくれればいろいろと助かるだろう。

それに、今の警備隊には軍師・参謀と呼べる存在がない。この先、

黄巾の乱が起るにせよ起らないにせよ……いや、起こさせないようには努力はするが……とにかく、ゆくゆくこの国が乱れることは間違いない……だが、それでも天和達は歌うことを止めはしないだろう。それはこの1年余りの生活から確信している。

もし仮に黄巾の乱が起きてしまった場合、俺達は天和達を守るために数多くの戦をこなさなければならない。それはつまり、劉備・曹操・孫堅などの三国志の英雄達を相手に立ち回りを演じることだ。その際、優秀な軍師・参謀が居るか居ないかは勝負の明暗を分ける大きなファクターとなるだろう。

ここは是非とも仲間にk「ただな……」……何か問題でもあるのか？ 剛鬼の話聴く限り、問題があるような人間には思えないのだが……

牛金「確かに優秀ではあるんだが……分けの分からんものを作っては、俺を実験台にしゃがるんだよ……何度川の向こうで手を振る死んだ親父とお袋を見たことか……」

張月「……………」

牛金「見るからに怪しい水を飲まされて3日ほど寝込んだこともあったし、”滑空砲”とかいう投石機みたいなやつ製作・発射実験にこき使われたこともあった…こないだなんか、アイツが作った”火薬”とかいう粉を使った爆発物の爆発に巻き込まれて死にかけたし…」

…うわぁ…いろいろあったんだな剛鬼…何というか、ご愁傷様？

でも”火薬”って明らかにアレだよな？こんな時期に火薬なんてあったか？もし、1人で生み出したとするなら…

… 剛鬼の話聞いた限りでは本当に優秀なようだな。 火薬の調合に
投石機の設計まで1人で出来る知恵者だ。これは…

張月「剛鬼、是非ともその人を連れて来てくれ！（お前1人を生け
贄にするだけで）そんな人材が仲間入りしてくれるならありがたも
のだ！」

…絶対に逃すわけにはいかない！是非ともうちに来てもらわなければな！たとえ剛鬼を生け贄に捧げることになっても損は無いはずだ！

牛金「…何か、言い方に邪な感じがしたんだが…まあいい。気は向かねえが大将のためだ。なんとか説得してみよう」

一瞬懐疑的な表情を浮かべたものの、剛鬼は承諾した。

しかし、本音が言動に出てしまっていたか…まだまだ精進が必要だな。

官亥「よしっ、アタイも絶対に彌姫を連れて来てやるぜ！待ってて

くれよ旦那！」

今まで俺と剛鬼の会話を静かに聞いていた狗葉だが、突然俺に向かってそう言つと、さながら吹き抜ける風のように部屋を飛び出して行つた。

彌姫と言つのは件の親友の真名だろうか？

張月「…しかし、何時ものことだが狗葉は突発的な行動が多いな」

牛金「なに、単に俺よりも早く連れ帰つて、大將に褒められたいだけだろうよ。アイツの頭は単純だからな」

…初めて会つた日から薄々感づいてはいたことなんだが、どうも狗葉の行動の優先基準は、第一に俺、第二が自分、第三がその他友人など…となつてしまつたようで、今となつては何をするにも俺が喜ぶか？俺に褒めてもらえるか？…というのを念頭に、狗葉は行動し

ているようだった。

…もつとも、実際のところその行動のほとんどは結果と一緒に迷惑と損害を周辺に撒き散らす暴走機関車とも言つべきもので、俺と剛鬼にとつての頭痛の種であつた。加えて狗葉自身に悪気は無いのだから更に質が悪い。

…今回も周りに迷惑をかけなけりやいいんだがな…

牛金「…ま、なるようになるだろうよ。気楽に構えときゃいいと思うぜ？ あんま気にし過ぎるのもよくないしな」

張月「…それが出来ればどれだけ楽なことか…」

毎回のようについに苦情を持ち帰られてりゃ、気疲れせずにはいられないぞ…

牛金「…とりあえず、俺も行くとするわ」

張月「…ああ、剛鬼も頼んだぞ」

こうして剛鬼も部屋を出て行った。

俺は2人が無事勧誘を成功させることを祈りつつ、狗葉がまた問題を持ち帰るであろうことを見越してため息をつくのだった。

2人の友人（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回からも続々とオリキャラが登場します。

親友は好敵手（前書き）

お待たせしました！

人材勧誘という名のオリキャラ祭り前編、官亥側のお話になります！

では、どうぞ！

親友は好敵手

〈視点・作者〉

張月達が話し合いを行ってから2日後の早朝。牛金への対抗心に駆られて飛び出して行った官亥は、とある山村の外れにある小さな家の前に立っていた。

早朝とは言っても住人たちが往来に出るにはまだ早い時間帯であり、事実、通りには彼女以外の人影は2つ3つ見えるだけだ。

そんな時間帯であるにも関わらず…

『ドンドン…!』

官亥「彌姫…!!開けてくれ…!!」

…周囲に響くぐらいに強く戸を叩いただけでなく、こともあろうか
大声で中にいるであろう親友に呼び掛けたのである。…近所迷惑も
いいところだ。

そして、それは当然…近所のみならずやられる側にとってもたま
ったものではなく…

『ガラッ!』

???「うるさいぞ狗葉!…!少しは時間を考えて行動しろ!…あ
と、戸が壊れる!…」

『ドゴンッ!…!』

官亥「きゃいん!？」

…戸を開けて出て来た少女は出会い頭、鉄拳を持ってこれに応えた。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

「???」：お前が来た理由は分かった。あたしにもその”警備隊”とやらに加わって欲しいというわけだな？」

官亥「おう！」

戸口でのやり取りから約10分後、頭にでつかいたんこぶを乗せた官亥と寝癖がひどい少女は机を挟んで向かい合っていた。

家は質素な造りではあるが、人間1人が生活するには十分な広さがあり、設備も整っている。ただ、女性にある華やかな感じは全くない。彼女がファッション等に興味を持っていない証拠だろうか？

彌姫というこの少女、官亥とは戸口でのやり取り程度で誰かが分かるぐらい、寝癖を直す必要もないくらいに親しい間柄のようだ。冒頭の会話からも、彼女が官亥のいう”親友”なのは明らかなこと

が見て取れる。

…もつとも、寝癖を直していない件については彼女が身嗜みをあまり気にしていないからかもしれないわけだが…

官亥「飯も出るし給金も出る。アタイたちの力も振るえて旦那の役にも立てる！…最高だぜ？」

彌姫「…まあ、確かに力が振るえて命の危険が少ない、という2点ではかなり魅力的だ」

官亥「だろ？彌姫も『だがちょっと待て』…？何だ？」

官亥「だろ？彌姫も『だがちょっと待て』…？何だ？」

官亥の話を一度切った少女は、少し間を置いて深呼吸をする。

…そして、先の話における最大の疑問を吐き出した。その内容というのが…

彌姫「さらつと出て来たその”旦那”ってのは何だ!!?」

…官亥の主にして本作主人公、張月についてであった。

官亥「…?旦那は旦那だぜ?」

彌姫「ああもう！！だからその旦那ってのは何者かってのを聞いている！！」

…官亥は基本的に頭が残念な娘なので、遠回しに言ったり抽象的過ぎると全く理解出来ない。

少女としては、自身の上司となるであろう張月についてある程度は知っておきたかったのだろうが…

官亥「…そうか！！つまり、彌姫も旦那の凄さについて知りてえんだな！？良いぜ！旦那の素晴らしさをたっぷりどっぴり聴かせてやるよ！！旦那はだな…」

彌姫「…は？いや、あの…」

…この後約30分、彼女は口を挟むことはおろか、目を背けることすら許されず、延々と官亥による張月自慢?を聴かされることとなるのだった。

-
-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

官亥「…ってことだ。分かったか彌姫!？」

彌姫「…ああ…十二分に分かった…(頼むからもう勘弁してくれ…)」

官亥のうんざりするぐらいに長く熱い熱弁に、少女は息も絶え絶えだ。

官亥「…で、どうだ？」

彌姫「…はあ…まあ、こんな田舎でグータラ過ごすよりかはるかに面白そうだ」

官亥「！じゃあ、来てくれるんだな！？」

嬉々とした笑顔の官亥の問に、少女は力強く頷き、

彌姫「ああ！この周倉、お前の言う”旦那”とやらに付いて行くことにさせてもらおう！…」

官亥「いよっしゃあ！ありがとな、彌姫！！」

周倉「あたしが面白そうだと思ったから乗っただけだ。ただし、付いて行くに値しないと思ったなら遠慮無く辞めるぞ！！」

官亥「ハント…残念だが彌姫、旦那はそんな詰まらねえ人じゃねえ

ぜ！」

官亥は自分のことであるかのように、自信満々な様子で頷いた。

それは親愛というか、尊敬というか……まあ、そういう色々なもの全てを合わせた張月への絶対的な信頼の表れと言っていていいだろう。

周倉「……ふふっ、ならば楽しみにさせてもらおう……！」

その様子を見て、周倉は思わず笑みをこぼすのだった。

くおまけく

周倉「…っと、気付いたらもうこんな時間か…」

官亥の話に集中し過ぎたためか、何時も仕事に向かっている時間よりも大幅に遅くなってしまうことに周倉は気付いた。

…まあ、仕事と言っても大人たちが農作業に出ている間の子守がこの村での彼女の主な仕事だ。

自分がいないならいなくて子供たちは勝手に遊び始めるから、村の外に出ない限りは自分がいなくても実質的に問題はない。

そう考えているからか、周倉は平然と構えていた。

周倉「…さ、朝飯にするとしますか。これ以上遅くなるわけにはいかないからな」

そう呟くと、周倉はおもむろに立ち上がり皿を2枚手に取り、隅の方に置かれている瓶から”何か”を掬って皿に盛った。

そしてその”何か”を盛った皿を机に置くと手にとって…

周倉「いったただっきまゝす」

『バリツ！…ネチャ…グチャ…』

…食べた。丸かじりで。

官亥「…まずった…（汗）」

その光景を目の当たりにした官亥は、『やつちまった』的な焦りとドン引きの表情を浮かべた。

周倉が丸かじりにしたそれだが、それ自体の見た目は真っ黒で：それだけでも美味しいのか疑問なのだが：何というか、カオスな色のソースっぽいドロツとした何かが垂れていて：非常に毒々しい。さらにこのドロツとしたものがかった謎の物体を素手で鷲掴みにして食っているのだから、見ている側としては目と鼻が痛くてたまったものじゃない。

官亥「……………（焦）」

『ズツ…ズツ…』

あまりの毒々しさに、官亥は引きつった笑みを浮かべたまま少しずつ後ずさる。

周倉「…ん？……！」

そんな官亥を見て何を思ったか、周倉は…

周倉「狗葉も食べるか？こんな朝早くから家に来たんだ。何も食ってないだろ？」

『グチャア…又チャア…』

…官亥を食事に誘った。無論、食する物は件の真っ黒物体である。

官亥「いいいい、いやー！アタイもう食べて来たからー！気にせずさっさと食ってくれー！」

周倉「…ふむ…そうか…非常に残念だ」

『…バリツ！』

官亥の返答に、周倉はがつくりと肩を落とした。それでも食事を
する手は止まらなかった。

…周倉、字は不明、真名は”彌姫”…官亥と互角に打ち合えるほど
の剛の者にして、飾り気の無いさばさばとした感じの少女。

…そして、官亥曰わく『極度の味覚音痴』にして『毒物調理師』…
…まだ張月の知り得ない、新たな仲間の実像であった。

そして、周倉の村の住人への挨拶や荷造りが終わるまでの数日間、
官亥が周倉の作る真つ黒料理と命懸けの死闘（食うか否か）を繰り
広げることとなったのは、今となってはどうでもいい余談である。

親友は好敵手（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は（人材勧誘という名の）オリキャラ祭り後編・牛金側のお話になります！

楽しみに。

白衣の世捨て人（前書き）

）
剛鬼
s
i
d
e
（

白衣の世捨て人

牛金」……………」

『ザッザッザッ……』

官亥が周倉の説得に成功した日の翌日。もう1人の勧誘役・牛金
は、街から遠く離れた山中を歩いていた。

日はすでに高く上がっており、もうすぐ昼時といった所だろう。

彼は官亥と同様、人材登用のためにこのような場所にいるのであ
る。相手は勿論、件の彼の昔馴染みだ。

しかし、その昔馴染みに対して良い思い出が無いからか、彼の表
情は山に登るにつれて重く、苦しそうになっていくのだった。

牛金「……やっと着いたぜ……」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

そのまま歩き続けること20分余り。牛金の眼前には一軒の小屋
…というか、館があった。

牛金「…仙人みたいな生活とは言ったものの、でかい屋敷を構えて
のんびり生活してるなんざ、仙人とは似ても似つかないな」

そう牛金は独り言を呟いて、止めていた足を再び動かした。

その足取りが重そうに見えるのは、決してここまで来るのに疲れた
ことだけが原因ではないだろう。

彼の眼前に広がる館は、訪ねる者を拒むかのように佇んでいた。

-
-
-
-

-
-
-

-
-
-

-
-

-

「???」随分と久しぶりね剛鬼。アナタがここに来るなんていつ以来になるかしら?」

牛金「…かれこれ2年とちょっとだ。出来ることなら二度と来たくはなかったがな…」

「???」あら、随分と酷い言い種ね」

…さらに場所は変わって館の内部。牛金は現在、この館の主と思しき女性と机を挟んで対面していた。

この女性、見たところでは年はだいたい20前後。眼鏡をかけていて、着ている上着は医者などが着ている白衣によく似ている。

部屋中には何かの設計図と思われる図面が散乱し、その片隅には使用用途不明の謎の物体が山積みとなっている。

ちよつと目を他の場所に移してみれば、文字が書かれた竹製の水筒が所狭しと並べてある机もあった。

雰囲気的にはどこぞの医者か科学者のようなオーラを漂わせる人物であり、その想像を肯定するような室内であった。

牛金「相も変わらず変な物作ってるんだな」

???「今の私の唯一の楽しみにして生き甲斐だもの。力を入れて当然でしょう?」

呆れたような牛金の言葉に、白衣の女性は特に気にする様子もなく返す。

牛金「…それ以外にすることが無い…の間違いだろ…」

彼がぼそつと呟いたその言葉は、女性の返答に対する本音だろう。随分と棘のある言葉だ。

しかし、本人は聞こえてないと思っていたようだが、女性には聞こえていたらしく…

「……」
「……剛鬼……今、何か言っただかしら……？」

牛金「うえー？い、いや、何でもない！」

「……思い切り睨み返されてしまったのだった。

「???」…まあ、いいわ。本来なら新薬の実験台に…」

牛金「っ！…！！…？そ、それだけは止めてくれ！！今度こそ俺が死
んじまう…！」

…実験台という言葉に過剰な反応を見せる牛金。これだけでも過去
に相当な目に遭って来たことが伺える。

そして、見る側としてはその新薬とやらがどのようなものなのか、
非常に気になる所だ。

「???」…してるとこなんだけど、何か大事な用があるみたいだか
ら不問にしてあげるわ。

…フツ、それにしても、やっぱり剛鬼を弄るのは楽しいわ」

そんな牛金の様子を見て、女性は実に楽しそうに笑う。この女性、
なかなか良い趣味をお持ちのようである。

「……で、今日は何の用でここに來たのかしら？」

先ほどの加虐心満載の笑みから一転、眼鏡の奥から光る鋭い視線が牛金を貫いた。

それを受け、牛金もいつものようなやる気の無いひねくれた表情から、普段は絶対に見せないようなキリツとした真面目な顔に変わる。

牛金「……なに、お前をこの辺鄙な山奥から引きずり出しに來たんだよ」

女性の問いに、目を睨み付けるように見つめて牛金は答える。

先ほどまでの気楽な空気はすでに無い。

「……仕官の誘いかしら？ だったら止めてちょうだい。私は今の為政者には呆れ果ててるの。そうでなければ今、こんなところにはいないわ」

女性は牛金の言わんとしていることを即座に解し、同時にバツサリと切り捨てた。

牛金「いや、仕官つーわけじゃない。俺が世話になってるのは太守でもなければ中央の役人でもねえからな」

「……へえ」

牛金の言葉に、彼女は多少驚いた様子を見せた。
そして同時に、牛金の言う仕事に一定の興味を示した。

「……いいわ、話だけは聞いてあげる。下らないような内容なら

実験台だけど」

牛金「…いいだろう」

牛金は話した。警備隊の創設理由、今自身がしている仕事の内容
e t c…その間、女性は特に感じるものが無いように、無表情のま
ま微動だになかった。

…しかし、牛金の話が上司である張月のことに差し掛かった時、そ
の中のある話に彼女は大変興味を示した。

その内容と言うのが…

???「…剛鬼、それは本当でしょうね？」

牛金「お、おう…何故かは知らんが、お前のガラ」…実験台」…

スマン、発明品に異常に興味があるみたいでな。『是非とも会ってみたい』って目を輝かしてたよ」

…彼女の発明品に対して、張月が並々ならぬ興味を持っているということだった。

彼女は以前から色々な物を製作しており、それは彼女独自の理論や発想を形とした物だったの。

しかし、天才の考えることは凡人には理解出来ないという言葉の通り、世間で評価されることはほとんど無かった。

官職を罷免されてこの山中に隠遁した後は、有り余るようになった時間をふんだんに使ってさらなる発明品を作り続けているのだが、評価は相変わらずだった。

そんな中で出てきたこの話は、彼女の気を引くのには充分であった。

???「…フフ…ようやく話の解る奴に逢えそうね…」

牛金の話聞いた女性は微笑を浮かべており、その言葉からも期待が滲んでいた。

牛金「それじゃあ……」

???「ええ、とりあえず会ってはみるわ。誘いに応じるかどうかはその時、私とその人物を見てから決める」

そう言つと、その後彼女は独り言のように呟いた。

???「フフフ…張月…ね……この私、田元皓のお眼鏡に適う人物か否か……楽しみにさせてもらいましょつか」

そう呟いた女性…田豊は、いつになく楽しそうだった…後ほど、牛金はその語るのだった。

く
おまけ
く

…牛金による田豊説得の成功の翌日、彼らは早くも出発しようとしていた。

まあ、周倉とは違い近所付き合いが無い…と言うか、付き合い合すべき近所さんがいないので、必要な荷物をまとめるだけで充分だったからだ。

それに、まだ誘いに応じると決めたわけでもないのです。その量も少ない。

田豊「さて、これで準備も出来たし…剛鬼、行くわよ」

牛金「へいへい、分かりやしたよ…って、おい！」

田豊「ん？何かしら？」

牛金「そのでかい瓶は何だ」

そう言って牛金が指差した場所には、大人の腰の高さぐらいまではある大きな瓶が鎮座していた。

田豊「あら、火薬に決まってるじゃない。実物を見てもらった方が、色々の良い話が出来ると思うのよ」

牛金「そうかもしれないが、よりもよってそれかよ!?!もっと別の物にしるよ!?!」

瓶の中身についてさらりと流す田豊に、牛金のツツコミが入る。

しかし…

田豊「うるさいわね。火薬の爆発演習の的にするわよ?」

牛金「よし、俺が全面的に悪かった。だから標的だけは勘弁してくれ!?!」

… 田豊の脅迫の前に、なす術なく牛金は散るのであった。同時に、彼らの上下関係もはつきりさせられてしまった。

田豊「分かればいいわ。後は… 叶！響！準備は出来たかしら！？」

???「は、はい！大丈夫です！」

???「… 準備完了！」

田豊の呼び掛けに応え、それから数秒の後、館の中から2人の少女が少ない荷物を持って現れた。

この2人の少女は名をそれぞれ” 寥化 ”、” 劉壁 ” と言い、賊の襲撃で家族を無くして孤児となつているところを田豊に拾われ、以降彼女とともに生活していた。

昨日、牛金が訪ねた際には山菜や薬草の採取に出ているため、彼らが顔を合わせたのは夕食の席でのことだった。

寥化は活発そうな感じのする明るい少女で、真名は”叶”と言う。一方の劉壁は寥化とは正反対で、寡黙で大人しい感じの少女だった。真名は”響”で歳は2人とも12・3歳ぐらいだろうか？まだまだ幼い感じが抜けきっていない。

そんな彼女達が今回の旅に同行することになった理由は、『彼女達にも大きな街を見せておきたい』という田豊の親心？からだった。

ちなみに、”魔耶”というのが田豊の真名だ。

田豊「さ、準備も出来たことだし行くわよ。剛鬼、荷物持ちなさい」

牛金「何で俺がんなことしなきゃならねーんだよ…そもそもその瓶はどうやっても無理だ！」

寥化と劉壁の準備が終わったことでいつでも出発可能となり、田豊は牛金に荷物を持つように指示するが、牛金はいからさまに嫌そうな顔をして反発する。しかし…

田豊「あら、か弱い女の荷物を持つのは男の役目って決まってるのよ？」

牛金「か弱いって…そっちのチビッコ2人はともかく、お前は全くか弱k「何かイッタかしら？」…いや、なんでもないです、はい」

…余計な一言を口走ってしまったがために、牛金は完全に田豊に呑まれてしまったのだった。

…その後、牛金は結局自分の荷物に加え、女3人の荷物も持つて街へと戻ることになったのだった。

火薬の詰まった瓶は流石に持ち運べなかったため、やむなく田豊は小型の壺に入るだけ詰め込んで牛金に押し付けた。

そしてこれらのやり取りを全て見ていた寥化と劉壁の2人は、牛金と田豊の関係を『主人と奴隸』と結論付けたのであった。

ある日の警備隊：前編（前書き）

裏サブタイトル

「劉壁仲良し大作戦」

1ヶ月以上も間を空けてしまいすみませんでした！

ある日の警備隊：前編

く回想く

周倉「…貴殿が、狗葉の言っていた張月殿か」

張月「そうだが…君は？」

周倉「おっと、これは失礼した。あたしの名は周倉。貴殿は強いと狗葉に聞いたので釣られて来た。ついでに良い仕事にもありつける」と

張月「…そこまで強いとは思わないんだが…」と言つか、仕事の方はついでかよ」

周倉「はっはっは！……で、早速で悪いのだが一手手合わせ願いたい」

張月「ホントいきなりだな！？しかもス…無かったことにしやがったよ……まあいい。理由を聞いても？」

周倉「あたしは仕えるのは自分で認めた者と決めている。貴殿が仕えるに値する人物かどうか、あたし自身の手で確かめさせてもらいたい」

張月「…そういうことなら喜んで受けて立とう。

…だが、俺も一応は武人の端くれだ。あまり自信は無いが、そう易々と負ける気も無いぞ！」

周倉「それはこちらとて望むところだ！我が武技の冴え…とくどくどく
覧あれ！」

-
-
-

-
-

-

田豊「アナタが張月…ね……ふうん…なかなか良い面構えしてるじゃない」

張月「えっと…貴女は？」

田豊「私は田豊、字は元皓。剛鬼の紹介で来たわ。ま、よろしくね。…もつとも、まだ入隊すると決めたわけじゃないのだけど…」

あ、それと、こっちの2人は右から寥化と劉壁。私が親代わりで面倒を見ている子達よ」

寥化「寥化です！よろしく願いします！」

劉壁「……………（ペコリ）」

張月「こちらこそよろしく願いします。2人もよろしくな」

寥化「はい！」

劉壁「……………（サッ）」

張月「……………」

田豊「…あゝ…早速なのけど…アナタ、私の発明品に興味がある
そうね？」

張月「ええ、それはもう。是非ともこの目で見てみたいと思ってま
した。作った方に会ってみたいとも…」

田豊「あら、嬉しいこと言ってくれるじゃない。どこの馬鹿とは
大違いね」

張月「あはは…で、それが何か？」

田豊「実は、その発明品の中から1つ持って来ているのだけれど…
どう？実験に付き合ってみない？」

張月「是非ともお願いします！！」

く回想終了く

…これが今から約4ヶ月前、
狗葉と剛鬼が連れて来た新しい仲間と
の馴れ初めだった。

この後、周倉とは約15分間にも及ぶ激闘を繰り広げた末に辛くも
勝利を掴み、田豊とは発明品の実験の後で多いに意気投合し、結果
として彼女達の警備隊への入隊と共に”彌姫”と”魔耶”という2

人の真名も預かることになった。

…魔耶さんによる火薬の爆発実験で、剛鬼が準備にこき使われた拳
げ句、退避に失敗して一歩間違えてたら爆死、という事態になった
のは流石に焦ったが…

ついでに、寥化と劉壁の2人も魔耶さんのサポート役兼お勉強とし
て入隊が決まった。と言うより、魔耶さんについて行くしか道が無
いのだろう。

なお、寥化からは魔耶さん達同様”叶”という真名を預かったが、
劉壁の方は魔耶さんの背後に隠れて完全黙秘だった。

魔耶さんの口調から察するに、過去に何かあったらしいが…今は深
く突っ込むべきではない、と考えて心の中に留めることにした。い
つか、心を開いてくれる日が来ることを信じて、今は気長に待とう
と思う。

また、魔耶さん達が住んでいた館は改装と増築を積み重ねて、いずれは警備隊、ひいては天和達の拠点とすることで合意。現在も兵舎などの増築・改装が継続されている。資金は天和達が出してくれるそうだ。

全くもってありがたい限りだ。

…何か、男として情けない気がしないでもないけどな…

…まあ、それは現状ではどうしようもないことだから今は置いておくとして、この話は新しく警備隊に入った4人が、今の生活に大分

慣れた頃の警備隊の日常を、この俺、張月の視点から描いたお話である。

く朝・張月用天幕く

張月「ふぁ……うぁぁふう……ん、朝……か……」

俺はもう少し寝ていたい気持ちを振り払い、布団を無造作どけると身体を寝台から起こす。

天幕の隙間……すなわち入り口からは眩い陽光が差し込んで、内部を薄明るくしてくれている。

俺は顔を叩いて眠気を吹き飛ばし、素早く寝間着から普段着に着替えると、朝食を取るべく外へ向かった。

天幕から外へと抜けると、降り注ぐ陽光が思いつ切り目に染みた。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

本日も快晴なり。

季節的には冬に向かいつつある時期なので、多少寒く感じることはあるが、まだまだ過ごしやすい季節だろう。

俺は1つ大きな欠伸をすると、兵舎群の中を、行き交う隊員達に挨拶したり、逆にされたり…を繰り返して、一路広場を目指した。

周倉以下、新しい仲間が加わってから、何度か増員を行ったので、警備隊の人数は今では100人を大きく越えている。なので、毎日かなり賑やかだ。

そんなことを考えつつ、歩くこと1分ほどで広場には到着した。

広場は隊員達の声で溢れており、すでに隊員達の大半は朝食にありついているようだ。

ここで少し、警備隊の食事についての話をしておきたい。

警備隊の朝・昼・夕食は、隊員達を何班かに分けてローテーションで準備を担当させている。

食事の時間は基本的には時間制で、一定の時間内に指定場所に来ないと食事にはありつけないという、なかなか現代の学食と同じような手法を取り入れている。

こうすることで、食事担当の隊員達の時間を制限してしまうことを極力少なくすると同時に、自然に規則正しい生活をするように促しているのである。

もちろん、寝坊して朝食にありつけない奴もたまにいるのだが、その内訳を見てみると、頻繁に朝食抜きになる”寝坊常習犯”が8割方を占めているのが実状で、その筆頭が…

官亥「また寝坊しちゃったあああ……！！！！！！！！」

周倉「…不覚っ！！」

…この2人だ。つか、隊員達をまとめる立場にあるお前らが寝坊常習犯というのはいただけないぞ？

…後で魔耶さんと相談して対策練るか…

張月「ふう、ごちそうさまでした……っ」と

喧騒の中で食事を終えた俺は、今日の予定を確認するために一旦
天幕に戻る。

えっと……確か今日の予定では、午前中は部隊の鍛錬と戦闘訓練、
その後昼食を取って午後は夕方まで自由、その後ここに帰って配置
や移動の確認をした後、夜から天和達の舞台の警備……か。舞台のあ
る日は午後から休みが取れるからありがたい。

……まあ、休みの前にまずは部隊の訓練だ。狗葉や彌姫もいるみたい
だから、気合い入れていかないとな。

…そう言えば、結局アイツらは飯にありつけなかったみたいだが…
午前の仕事に支障は出ないだろうな？

「2時間後」

張月「そこ！先が下がって来ているぞ！そんなことで敵の突撃を止められると思うな！！」

隊員「はっ！！」

張月「何度も言ったと思うが、槍衾は1カ所でも隙があれば、そこから敵の突破を許してしまいかねない！^{ファン}

決して集中力を切らすな！力を抜くな！さもないと、味方全員が敵^{ファン}の波に吞まれることになる！

それは同時に任務の失敗、俺達の抑止効果の低下、そして本当の戦争での死に直結する！！！！

他の奴も人事じゃなく、自分のことだと思って訓練に当たれ！！」

隊員達『はっ！！！！！！！！！！』

俺は隊全体を見回しながら、声を張り上げて檄を飛ばす。

今は部隊全体での戦闘訓練中で、これは天和達目当てで押し寄せるファンに対する防御戦法の訓練だ。

これは警備隊前衛の基本戦術であり、実際の舞台では、この槍袞隊が敵の前に常にバリケードとして立ちふさがり、天和達への必要以上の接近や呐喊トッカンを防ぐことになる。

そして、今でこそ手に持っているのは木製の棒だが、いざ実戦となれば、棒から槍に持ち替えて戦うことも可能な実戦仕様となっている。

この他にも基礎体力トレーニングや模擬戦、隊員同士の組み手、陣形変更訓練等が基本的な訓練内容となる。

かれこれ半年ほどの訓練内容に沿って訓練を行ってきたため、今ではすっかり様になってきているし、陣形変更等もスムーズに行えているように思う。

幾つかの将来的な懸案事項と、それに対する思惑を抱える身としては嬉しい限りだ。

…後はこの部隊に実戦を経験させることが出来ればより良いのだが
……これに関しては、近い内に現実のこととなりそうだ。

魔耶さんから上がっている報告によれば、どうやら賊の一団が天和
達の舞台で俺達が陣地を空にする隙を狙って、資金・物資等の略奪
を企んでいるらしい。

現在、この賊を嵌める計略を魔耶さんと検討しているので、おそら
くはその時が警備隊の真の初陣となるだろう。

あと、警備隊員のさらなる増員も検討中だ。今後は舞台警備の他
に、賊の襲撃を防ぐために陣地防衛にも人員を割かなければならな
い。そうすると、今の人数では両方に十分な戦力を配置することが
出来ないからな。

魔耶さんとの話し合いでは増員の方で話は進んでいるから、あと
は人和と相談して決めるか…

官亥「うおりゃあああああ！！！！」

隊員達『うわあああ！！！！！！！？』

…向こうの方で、人が次々と空を舞っているのはこの際無視だ、うん。狗葉（あの馬鹿）には何を言っても無駄だからな…

…そして、狗葉は一食抜いた程度では、行動にさほど問題はないようだ。こうなると、彌姫がどうなのか気になるところだ。

-
-
-
-
-
-
-
-

訓練を終えた後、昼食を取った俺は陣地内を散歩している。

何も無い日は、午後も訓練があったりデスクワークに追われたりするのだが、天和達の舞台がある日の午後（夕方まで）は基本的に自由になれるので、俺はその時の気分であちこちをフラフラしている。

そういうわけで、今日は陣地内の様子を見て回っているのである。

…そして、しばらく歩き回っているよ…

「やつ！ハアツ！」

『ブオン！ブオン！』

…どこからか、素振りの音と声が聞こえてきた。

気になったので、声のした方に進路を変更し、物影から様子をつかがうと、そこには…

寥化「せいっ！やあっ！」

『ブオン！ブオン！』

…警備隊最年少の1人、叶こと寥化が懸命に薙刀を振るう姿があった。

以前からもちよくちよく見かけており、初めのうちは「熱心な娘だ

な…」と思っていた。

ところが、ある時魔耶さんから聞いた話によれば、彼女と劉壁の2人は山賊の襲撃で家族を亡くしているらしい。

…で、叶はいつの日にか自分自身で家族の仇を討つべく、日々研鑽を積んでいるそうだ。

普段は明るい娘だけに、そういう過去があつたというのを聞いた時はショックだったが、これも王朝の衰退・役人の腐敗…乱れた世相が原因だろう。

…いつか、彼女が仇討ちのことを忘れ、普通に笑ってられる日が来たらいいと思いながら、俺はその場を後にした。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

次に俺が向かった場所は、午前中に練兵を行っていた場所だ。

この時間帯は全体での訓練こそ行われてはいないが、自主的に鍛錬に励む者が模擬戦をやったりしているので非常に騒がしい。

あちこちで棒がぶつかり合う音や鈍い打撃音、隊員達の雄叫びが飛び交っている。

そして、そんな中に一際目を引く大激戦を繰り広げる2人がいた。

官亥「今日こそはお前を倒す……!」

『ガキイイイン……!……!』

周倉「それはっ！あたしの台詞だっ！！」

『キイン！！ガキイツ！！！！』

…はい、お察しの方もいたと思いますが、寝坊常習犯の2人組、
狗葉こと官亥に彌姫こと周倉です。周りの隊員達とは色々次元が
違う闘いを繰り広げてます。

具体的な次元の違いを挙げるとすれば、両方とも自分の武器…官亥
は大剣、周倉は薙刀…で闘ってることだな。

警備隊では、隊員達に実戦でもちゃんと戦えるように槍や剣、弓の
扱い方を鍛えさせてはいるのだが、万が一を考えて模擬戦での使用
は禁止しているのだ。

それなのに、あの2人ときたら彌姫の警備隊加入の翌日からこの規
則を破ってドンパチやらかしやった。

これに対し、俺は魔耶さんの力を借りて制裁を加えたのだが…数日後には懲りずにまた同じことをやり、制裁し…の繰り返しで、何時まで経つても言うことを聞かないので、最終的に2人の裁量に任せて放任することにした。

…で、その結果、あの2人はほぼ毎日のようにバトっているわけだ。

他にも、一撃の攻撃力が周囲の隊員達とは明らかに桁違いだったり、動きも随分と戦い慣れたものだったり…と、周囲とは一線を画した闘いだ。

官亥「うおりゃああああ！……！！」

『ドゴンッ！……！！』

周倉「貰ったああああ！……！！」

『バチイイ！……！！』

官亥「へぶうつ！……！！？」

『ドサッ…』

…勝負あつたな。とゆーか狗葉の奴、もろに薙刀の平面で頬ひっぱたかれてたんだが、大丈夫か？

周倉「はっはっは！！これであたしの勝ち越しだな！！」

官亥「くううう…次は絶対、ぜえつつたいにアタイが勝ってやるからな！！！！」

…あ、大丈夫っぽいな。頼さすってるけど、普段通りだから問題なさそうだ。

…とりあえず、一旦兵舎に戻るとするか。せつかくの休み、羽を伸

ばすためにも街には行つときたいしな。

…因みに、以前狗葉に聞いた時の対周倉戦の戦績は、1578戦756勝752敗70分けらしい。

これ聞いたのが確か…ひと月ほど前だったから、今は+30戦ぐらいしてるだろうな。

つか、お前ら闘い過ぎだ。2人がライバルってのは知ってたが、ここまでだったとは思わなかったぞ。1600戦ってなんだよ…

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-
-

-

張月「……………ん？」

街に向かう準備のために兵舎へと向かっていた俺は、その途中、
視界の片隅に何かを捉えた。

気になったので立ち止まってよく見ると、木陰で読書をする少女の
姿をはっきりと捉えることが出来た。

張月「あれは……劉壁……だな」

その少女の名は劉壁。戦災孤児であり、叶とともに魔耶さんの補佐役として警備隊に籍を置いている。

…もつとも、ほとんどの仕事は魔耶さんが1人で瞬殺してしまうので、実質的には”補佐”というより”勉強”と言った方が正しい。

なので彼女達は1日のほとんどを自由に使うことが出来、それを利用して叶は武術、劉壁は読書に励んでいるわけだ。

また、彼女は警備隊の主要メンバーの中で、唯一真名を全ての面子には預けていない存在であり、俺が今一番気にかけている存在でもある。

俺に限った話ではないが、ほとんどの警備隊のメンバーは、彼女と会う度に一緒にいる魔耶さんの背中に隠れられたり、ひどい場合に

は逃げられたりもした。

これには流石に俺も『なんとかしたい』と思うようになり、彼女の
人見知りを治そうと、常々気にかけるようにはしていた。

その甲斐あつてか、なんとか会う度に逃げられるようなことは無
くなつたんだが……魔耶さんに聞いたところによると、どうも彼女、
人見知りがかなり激しい……と言うより、もはや『人間恐怖症』と言
つても差し支えない状態らしく、俺以外では魔耶さんと叶を除き、
彼女とまともな会話が出来る奴は未だにいない。

…正確には、過去に賊の襲撃に遭つて家族を失っていることから

『武器を持った”人間恐怖症”』

…というのが正しいみたいだが…とにかく『一握りのメンバーと交
流して残りはシャットアウト』なんてのは、警備隊全体のことを考
えるにしろ、彼女自身のことを考えるにしろ、あまり良いことだと
は思えない。

なので…

張月「何読んでるんだ？」

劉壁「！」

…こうして彼女を見掛けるたびに、出来る限り声を掛けるようにし

ているのである。

張月「おっと、驚かせてしまったか？」

劉壁「……………ちょっとだけ…」

張月「…そうか、悪かったな」

劉壁「……………別に…大したことない…」

劉壁との会話は、何時も俺が声を掛けて劉壁が一言一言返すという感じで、あまり長く続くことはない。

ただ、これだけでも初めての頃と比べれば反応は格段に善くなった。地道に続けていけば、いずれは彼女の心からの笑顔を見ることが出来る…と、俺は信じている。

張月「…で、何読んでるんだ？良ければ教えてくれないか？」

劉壁「……内緒」

それだけ呟くと、劉壁は持っていた本を閉じて後ろに隠してしまった。

…やはり、まだ警戒されてるのかな。

張月「…そりゃ残念だ…」

俺はそんな彼女の様子に少しだけ落胆し、けれどそれを悟られないように呟いた。

すると…

劉壁「…全部読み終わったら…教える……」

張月「…！そっか…じゃあ、その時までの楽しみにしておくよ」

劉壁の言葉にそう返すと、俺は踵を返して歩き出した。彼女は何かを感じていたのか、それとも…

…ふふ、俺の想像通りだったのなら、ホント嬉しいところだ。

こうして、俺は再び兵舎への道を歩き出した。

…後編へ続く

ある日の警備隊：後編

劉壁と別れた後、俺は兵舎へと戻る途上でこの後街に行くつもりだったのを思い出し、『劉壁を誘ってみよう』と劉壁の下へと引き返した。

何時もは1人で出掛けるのだが、陣内で引きこもり気味な日々を送っている劉壁を、魔耶さんは『外の世界を見せてやりたい』と言っていた。ちょうど良い機会なので、一緒に街に行かないか誘ってみるのもありだろう。

そんなわけで劉壁を誘ってみたところ、多少迷った様子ではあったが、最終的には首を縦に振ってくれた。

張月「そして今、俺達は商店街を歩いているのであった……ってか？」

劉壁「……どうしたの？」

張月「…いや、何でもない。気にしなくていい」

劉壁「……そう……」

…思わず地の文を口にしてしまったぜ。多少劉壁に白い目で見られたけど、気にしないことにする。それこそが俺の傷付いた心のためというものだろう。

ちなみに、今は劉壁を連れて商店街に到着し、これから回っいこうとしているところだ。

張月「何か欲しい物があつたら遠慮無く言ってくれよ？金は俺が出すから」

劉壁「……でも…」

奢られるのは気が引けるのか、物凄く遠慮気味だ。

張月「気にするな。俺から誘ったんだから、そこらへんも俺が責任を持つべきだろ？劉壁は好きなだけ楽しめばいい」

劉壁「……でも……」

…譲らない、か…意外と芯がしっかりしてるな…魔耶さんの教育の賜物ですかね？

まあ仕方ないか。こんなところで延々と争ってても良いこと無いし、妥協案で我慢しますか。

張月「…そこまで嫌なら、劉壁が欲しい物の値段の半分を俺が出す…ってことでどうだ？」

劉壁「……それでも…張月さんに悪い……」

…ええい、強情な。譲る気が無いなら、こちらも強行手段を採らせてもらっぞ！

張月「残念、これは決定事項だ。異論反論は一切認めない！諦めて奢られな」

劉壁「！？で、でもっ「さあ行こうか。時間は限られているんでね」……はい……」

こうして強行手段『異論は認めない！』によって、俺は劉壁を完全に押し切ることに成功。有無を言わず強制的に奢りを認めさせた。

だいたい、子供は何かを買うときは親にねだるものだろ？

…まあ、俺自身まだまだ子供なんだろうが…

…と言うか、『親が子供に何かを買ってやる感情』と言うより、『親戚とか近所の子に何かプレゼントしてやる感情』って言う方が正しいかな。

まあとにかく！俺は何かをやり遂げたようなすがすがしい気分で、物凄く不満げな表情の劉壁と、人でごった返す商店街へ足を踏み入れて行ったのである。

…劉壁が感情をここまで顔に出すのは初めて見たが……これも一歩進展ってことで良い…のかなあ…

-
-
-
-

-
-
-

-
-
-

-

-

（約1時間後）

劉壁「……………（キラキラ）」

張月「…ん？どうかしたか？」

劉壁「…！？」

張月「…もしかして…それ、気に入ったのか？」

劉壁「！！！！…（ブンブンブンブン）」

商店街突入から1時間ちよつと。色々な店を見て回ったが、劉壁が何も欲しがらないため、俺の財布はちつとも軽くなっていない。

そんな中、ようやく彼女が興味を示したのは、ある装飾品店の店先に、所狭しと置かれていたブレスレットや髪留めといった小物だった。

普段は感情を表に出さない彼女だが、やはり年頃の女の子。懸命に首を振って否定しているものの、こういうお洒落な物は好きなのだろう。天和達も収益が増えてからは毎日のように買ってるし。

劉壁「こ、これは…その…あの…き、叶ちゃんに…その…に、似合うかって…」

張月「叶に…ねえ…」

ここまで追い詰められての言い訳など見苦しい！…という冗談は心の内に留めておいて、俺も劉壁が目を輝かせていた小物群に目を移す。

彼女が見ていたのは、色とりどりの鮮やかな花や可愛い動物をかたどった髪留めや髪飾りだ。

客引きのために店頭に置かれた物故か、見栄えのする色彩の割に値段はだいぶ控えめ。

劉壁が魔耶さんから貰っているお小遣いでも、充分買える値段だ。

張月「…うん、良いんじゃないか？値段も手頃だし、叶にも似合いそうだ」

劉壁「……………（フウ）」

劉壁の苦し紛れの言い訳に、乗ったように見せてその反応を俺はうかがう。

そして『話題を逸らせた』とでも思ったのか、小さく息をついたのを俺は見逃さない。

張月「それに、その…梅の髪飾りなんかは劉壁にも似合いそうだ」

劉壁「……（ボンッ）……！！！！？」

『タッタッタッタッタ……』

張月「……逃げたな」

劉壁は一瞬で顔を沸騰させて逃げ去った。普段は物静かな彼女も、あの一撃はやはり想定外だったらしい。

張月「……って、のんびりしてる場合じゃない！あいつを追わないと……」

飯に、だ。もしも、劉壁を迷子にでもさせようものなら…

張月（確実に魔耶さんの雷が落ちる！最悪実験台だ！）

…これは明らかに緊急事態だ！！剛鬼のようには絶対にはな
らない！！

張月「…まあ、その前に…」

-
-
-
-
-

-
-
-

-
-
-

-
-

-

張月「まったく…道もよく分からないのに、1人で勝手にいなくな
っちゃダメだろ？」

劉壁「……………うう… / /」

装飾品店を離れた後、俺は劉壁を引き摺るように商店街を回って
いた。

劉壁は、逃亡から僅か30秒後にあえなく御用となり、以降は顔を真っ赤にして俺にされるがまま。何時もの冷静な劉壁の面影は微塵も無い。

…でも、この状況は流石に打開しないとマズい。最悪、仲良くするつもりがこのまま逆に嫌われて、ハイお終い…なんて結末になりかねない。さらにその後には、魔耶さんの実験台フルコースももれなく付いてくるのは目に見えている。

それだけは…それだけは是が非でも回避しなくてはならない！

最悪のシナリオから逃れるべく、俺は再度劉壁に声を掛ける。が、しかし…

張月「…劉壁、他にどこか行きたい場所はないか？」

劉壁「……………うう…／／」

張月「…もしもし？劉壁さん？」

劉壁「…あつ……うう…／／」

張月「…ダメだ、こりゃ」

…劉壁は自分の世界に入り込んだまま、一向に出て来る様子は無かった。

張月「くっ…このままじゃ、魔耶さんの実験室が目前に…！！そう
だ！あの手があった！」

万策尽きたかと思った矢先、俺はあることを思い出した。

それは、天和達の機嫌が悪い時によくやっていたことだった。

張月（これならば確実に劉壁を呼び戻せ、尚且つより親睦を深められるはず！）

俺は劉壁の力の無い手を取ると、彼女の様子をつかがいつつ早足で目的地へと向かった。

（数分後）

店員「いらっしゃいませ！2名様でよろしいでしょうか？」

張月「ええ」

店員「かしこまりました、こちらの席へどうぞ！」

俺が劉壁の手を引いて向かったのは、現代的には”喫茶店”と言えはしっくり来る感じの点心専門店だ。

これぞ俺が思い付いた作戦『女は皆点心が好き』だ。文字通り、点心をたべさせて意識回復・友好関係構築を目指した作戦である。即興故、ネーミングについては突っ込んではいけない。

思い付いた理由だが、俺は天和・地和・人和の内の誰かの機嫌が悪かったり、元気が無い時には、今回のように点心を奢ってご機嫌取りをしていた。

その際、天和が

『点心が嫌いな女の子はいない』

…というような意味の言葉を漏らしていたのを思い出したのが、この作戦を思い付くに至った経緯だ。

事実、この店まで後少しに迫った所で劉壁の意識はこちらに戻って来た上、今までは俺に引きずられるようにしていた足取りも、自分から進んで歩くようになっていた。

そして、今となっては…

劉壁「……………」

…この有り様である。やはり点心の力は偉大だったようだ。

店員「御注文がお決まりでしたら、遠慮無く声をお掛け下さい」

店員の女性に案内されて席に着くと、劉壁は目を輝かせ、すぐにメニューの書かれた竹管に釘付けとなった。

俺はその微笑ましい様子を眺めながら、1人と和むのであった。

-
-
-
-
-

-
-
-

-
-
-

-
-

-

店員「御注文はお決まりですか？」

メニューを見つめる劉壁を眺めること数分。ようやく店員が注文を取りに来た。

張月「じゃあ、肉m「杏仁豆腐！」……ふふ、それと肉まん3つで」

店員「杏仁豆腐1つと肉まん3つですね？承りました。今しばらくお待ち下さい」

言葉を遮ってまで注文を主張する劉壁に苦笑しつつ、カウンターの向こうへ消える店員を見送った。

…この数分後、俺の頼んだ出来立てはやほやの肉まんが届き、それを食べている途中に劉壁の杏仁豆腐もテーブル上に加わった。

数が少なかつたためすぐに完食してしまった俺は、劉壁が杏仁豆腐を頼む姿と、窓の外に見える商店街の風景を、満腹になるまで眺めてリラックスしていたのだった。

喫茶店を出た俺達は、商店街の徘徊を再開した。

-
-
-
-
-
-
-

喫茶店に入る前までは俯いて不機嫌だった劉壁も、今ではすっかり笑顔になり、気まずい空気はすでに無い。

今回の外出は、劉壁に外の世界を見せて、あわよくば彼女との距離を縮めることを目標にしている以上、色々あったが今のところは順調と言っているだろう。と言いか、めったに感情を面に出さない劉壁が笑顔を見せていることだけでも、今回の外出はすでに成功したと言っても問題ないと思う。

俺個人としては、すでに満足のいく内容だったので、後は劉壁の行きたいように歩かせ、自分はもう、その後について回るだけにしようとしていた。

そんな時…

「あれ？兄さんがちっちゃい女の子連れまわしてる！！」

…予想外の奴らに見つかってしまった。

張梁「え？」

張角「え！？地和ちゃんそれどこ！！」

張宝「ほらあそこ！宿屋の前らへん！」

地和はこちらを指差して、周囲にも普通に聞こえる大声で叫ぶ。

そして、それに釣られた人々の視線が容赦なく俺に突き刺さる。マジ勘弁。

張角「あゝ！！本当だ！！燕ちゃんが知らないちっちゃい女の子と逢い引きしてるゝ！！」

…待て天和。今、何か聞き捨てならない単語が聞こえたぞ…”逢い引き”って、確か…

張宝「これは兄さんに詳細を問い質す必要があるわ！姉さん！人和！行くわよ！！」

張角「おゝ!!!!」

張梁「：？」

3人が俺を尋問すべく、行き交う人々を掻き分けて俺達のいる場所へ迫って来る。

予想出来る内容的に、こんな往来での尋問は勘弁して欲しいものだが…逃げたら逃げたで後が面倒だからなあ…

やむなく俺は劉壁を呼び止め、3人を真正面から迎え撃つ体制を整えた。

張角「燕ちゃん！その娘はいつたい誰なの！？お姉ちゃんよりも、そんなちっちゃい娘が好いの！？」

張宝「兄さんがそんな年端も行かないような娘が好みだったなんて妹として、残念でならないわ…」

…ボソボソ（でも、もしそうだったら体型的には…）」

張月「2人とも開口一番から手酷いな！？あと地和、俺は別に幼女趣味ではないぞ！？そして天和、これは逢い引きなどでは決してない！！」

天和・地和の強烈なW先制攻撃に、すでに迎撃体制を整えていた俺は（多分）冷静に対処する。

確かに俺は子供の面倒を見るのは好きだが、それは決して幼女趣味

（俗に言うロリコン）などではないはずだ！

張月「この娘の名前は劉壁。確かにまだまだ幼いが、立派な警備隊の一員だ！今日一緒にいるのは『ウソだっ！！！！！！！！』……って、理由も聞かずに即否定かつ！！」

それと、それはどこから輸入して来たんだ？偶然かね？まあとりあえず、2人とも某鈍少女自重。

張角「だって、私達結構警備隊の人達とはお話するけど、そんな娘見たことないよ！！」

張月「……あ……なるほど、そういうわけか……」

天和の言葉に、俺の中ではようやく合点がいった。確かに天和達が劉壁を知らなくても無理はない。

何故なら劉壁は基本的に陣地待機で警備に当たることなく、警備に付いて来ても遠くから彼女達の舞台を観てるだけ。人見知りも加

わって、天和達と話をする機会が無かったとしてもおかしくはない。

張月（魔耶さん、何か手を打ってくれよ…完全な他力本願である上にお役所違いではあるが…）

俺は二重の意味で、この場にはいない某マッドサイエンティストに抗議した。

ちなみに、当の劉壁は宿屋前に積んであった荷物の山に隠れ、頭を出したり引つ込めたりしてこちらをうかがっている。

張宝「さあ兄さん？その娘との関係をじっくりこつてり、隅から隅まで洗いざらい吐いてもらっわよ？」

張角「素直に全部吐き出しちゃった方が、お姉ちゃん良いと思うな
」？」

2人は俗に言う『とってもいい笑顔』で迫ってくる。

普段はとても絵になる光景ではあるのだが、今日は何故か歪んで見

える。天和・地和とは思えないとんでもない威圧感だ。

張月（くっ！何か手は…てか、何でこんなことに…）

じりじりと後退しながら、この理不尽に対する逃げ道と疑問が頭の中を支配する。そして、気付けば背後は壁。もう後は無い…

角・宝『さあ燕ちゃん（兄さん） お話しましょ？』

張月（ああ、終わったな…）

宿屋から漏れる客の楽しげな声を背に、俺は心の中で涙を流した。

そんな絶望の中、突如として俺に天使は舞い降りた。

張梁「待つて姉さん達。兄さんの言ってることは事実よ」

角・宝「…え？」

その声に天和と地和は背後を振り返り、俺への威圧感は霧散した。

迫る天和と地和の後方で、ここまでほとんど空気だった人和が2人を止めてくれたのだ。

張角「人和ちゃん、それホント？」

人和の言葉を聞き、天和が疑り深そうな感じで聞き返す。背を向けているため表情は伺えないが、地和も同様だろう。

張梁「ええ。以前、警備隊の運用資金の調整で駐屯陣地に行ったことがあったの。その時に見かけて、一緒にいた魔耶さんから紹介されたのよ」

張宝「それじゃ、結局その娘は本当に警備隊の一員なの!？」

張梁「ええ。孤児みたくで、魔耶さんが保護者代わりに面倒見てる娘よ」

確かに、人和は3姉妹の財布の紐を握ってるから、警備隊に配分する資金の調整とかで、陣地に来る機会は他の2人よりも多い。

劉壁は今日みたいに外で読書していることもあるし、こっちの資金調整役魔耶さんだ。その時に見掛けたり、聞いたりしていても不思議じゃあない。

張宝「…なあくんだ、心配して損したわ」

人和の説明によって、天和と地和の怒りはなんとか収まったようだ。

張梁「ところで、兄さん達はどうしてこんな所にいるの？」

張月「どうしてって…いたら変か？」

そう返すと、人和は一瞬驚いたが、すぐに呆れ顔になり溜め息をついた。俺は劉壁についていただけのはずだが…

張梁「…兄さん、周りを見て」

張月「？」

何事かと思い、人和に促されるままに俺は辺りを見回した。

俺達がいる周辺は商店街の中の一角であり、建物が所狭しと乱立している。

人もたくさんいて賑わいを見せて…

張月「…あれ？」

ここで、俺はあることに気付いた。行き交う人々を見ると、女性が多過ぎる。圧倒的に多いのだ。というか、ほぼ全員女性じゃないか？ぱっと見、9割以上が女性だ。

張月「まさか…」

俺は再び周囲の店に目を移す。そして、案の定それらの店全ては、女性用品の店か女性向けの品物を多く扱う店だった。

つまり、この辺りは女性用品店の建ち並ぶ『女性専用通り』とでも言うべき場所だったのである。

張梁「…兄さん、本当に気付いてなかったの？」

張月「…ああ、全く」

俺は、この事実を人和に指摘されるまで全く分からなかった。

何せ、劉壁の後を付いて歩いてただけだからなあ…

ここに来るまでの周辺の様子なんか全然見てないし覚えてない。

張月「どうしたもんかな…」

流石にこの女性の大群の中に男1人ってのは、俺個人としては精神的にかなりよろしくない。他の奴にとってどうかは知らないが。

ならば早急に脱出すれば良いだけの話…なんだが…

劉壁「……」

…劉壁の存在がある以上、それは出来ない相談だ。

そして、あの人見知りの劉壁が人の目に脅えることもなく楽しんで
いる以上、しばらくは脱出出来そうにない。もしかしたら、舞台の
準備の時間までこの中に居続けなければならなくなるかも…

そんな『彼女いない歴〃年齢』な俺には絶望的状况（ある意味樂園）
の中…

張角「じゃあ、燕ちゃんも私達と一緒に回らない？もちろん、劉壁
ちゃんも一緒に！」

張月「えっ……」

…ものの見事に天和が、俺をさらに絶望のどん底（最上位の樂園？）に叩き落とす（押し上げる？）発言をかまして下さいました。

さらに…

張宝「姉さん…それ良い考えだわ!!」

張梁「…まあ、天和姉さんにしては悪くないわね……」

…下2人もえらく乗り気だ。

だが、ここは俺の体裁を保つためにも早急に断るべきだろう。じゃないと俺がこの街の往来を歩けなくなるばかりか、俺の鋼の理性まで狂ってしまいかねない！

張月「いや、俺は『あ！ちなみに燕ちゃんに拒否権は無いよ』…
何ですと？」

『ガシッ！』

張月「…は？地和？人和？」

宝・梁『ふふ（満面の笑み）』

断ろうとした矢先に俺の発言は遮られ、その拳げ句、俺は地和と人和にがっしりと後ろから捕縛されてしまった。

…どうやら、俺に拒否権の類は一切無いらしい。そんなのって有りかよ…泣けてくるわ…

張宝「ふふゝん 兄さんには何してもらおうかしらね？」

張梁「兄さんも男でしょ。潔く諦めてちょうだい」

張角「今日は時間ぎりぎりまで楽しもうね それじゃ、問答無用でいざ」

3人 出発進行おー!!!

張角「あ、勿論劉壁ちゃんもね」

張月「誰か助けてくれえええええ！！！！！」

劉壁「……………」？」

…かくして、俺の心からの叫びは誰にも聞き入れられることなく、
ただただ虚しく澄み渡る蒼空へと溶けて消えていった…

く
だ
い
た
い
3
時
間
後
く

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

張宝「いや、いっぱい買ったわね姉さん」

張角「うん 燕ちゃんがいてくれたおかげだね」

張月「……………」

…荷物持ちという名の強制連行から早3時間。時間はあつと言つ間に過ぎ去り、陽はすでに西へ西へと傾きつつあった。

天和達は存分に楽しんだようで満足げな笑顔だが、対する俺はグロッキー…体力的にも精神的にも悪い時間だった。何せ天和達が、何か（主に服）を買ってきては俺に預け、また何かを買ってきては俺に預け…を繰り返し、最終的には荷物の山に埋もれたようになってしまっていた（人和談）。荷物持ちの名に恥じない姿であると言えるだろう。

…流石に自分で言うのは泣けてくるけどな。

しかもそれだけでなく、その買い物資金の大半は、どう言っわけ俺の財布から出ているのだ。

張梁「姉さん達は買い過ぎ。もう少し兄さんのことも考えてあげるべきよ」

3 姉妹一の常識人・人和が、はしゃぐ天和と地和に呆れたように言うが、人和も他人のことは言えないと思う。何故なら…

張月「…人和が言えることじゃないだろ…」

張梁「あら、姉さん達よりは兄さんの体に配慮したわよ？」

張月「…その代わり、俺の精神と財布の中身には一番容赦がなかったがな…」

…以上である。具体的な内容は、上記のやり取りから察して欲しい。天和と地和が肉体的に俺を酷使し、人和が精神的にいたぶって来るんだ。思い出すだけで……うう……まじで鬼畜だよ、我が義理の姉妹達は…（泣）

さらに、この後からも仕事だと考えると余計に辛いものがある。

なお、劉壁は3姉妹（主に上2人）にあちこちを（強制的に）連れ回されてお疲れのようで、今は天和の背中で寝息をたてている。

張角「…でも、こつやって4人でお買い物するのって久しぶりだね」

張宝「姉さんの言う通りだわ。最近私達は舞台、兄さんは警備隊の指揮とかで時間が合わなかったからね…」

張梁「確かにそうね。前と比べて生活は随分楽になったけど、兄さんが一緒に時間はめつきり減ったわね…」

天和が何気なさそうに零した言葉に、地和と人和も同意する。俺自身もそれに触発され、ここ数ヶ月…そして、こちらの世界に飛ばされてからの約2年を振り返り、天和の言う通りだと気付いた。

以前は天和達がい物だけとは言わず、所用で街に行く時はほぼついて行ったものだが、今となっては月に数回が関の山。

それに加えて『警備隊の中で、自分だけが宿屋に泊まるのは良くない』と、寝泊まりを陣中でするようになったため、3人と一緒に過ごす時間も減っている。

張月（…改めて考えると、少し寂しいものだな。なんとかなれば良いんだけど…）

天和達と共に過ごす時間が減ったことを憂慮しつつ、俺は行き交う人の群れの中、天和達の後について行く。

両手と背中に抱えた荷物が、少し重くなったような気がした。

この後、天和達のどこか寂しげな会話をBGMに、荷物を宿まで運び終えた俺は、天和から劉壁を受け取ると、まだまだ賑わいを見せる街を足早に後にした。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

—

3 姊妹

観衆「ウオオオオオ！！てんほーちゃあああん！！！」

観衆「れんほーちゃん今日もキマってるぅー!!!」

張月「総員、警戒を緩めるな！！！！いつ敵が突進^{ファン}を始めてもおかしくはないぞ！！！！」

隊員『はっ！！！！！！！！！！』

天和達の荷物持ちを終え陣地に戻った俺は、休む間も無く舞台に備えた最終確認を行い、現在敢行中の天和達、張3姉妹の舞台警護に当たっていた。

今日の舞台も満員御礼、『天地が揺れているのでは？』と錯覚するぐらいに、天和達のファンの熱気と叫びは凄まじい。

張月「他の隊から異常等の報告はないか！？」

隊員「はっ！先ほど官亥様から『盗みを働いていた者2名を叩き出した』との報告が来ております！！！！」

張月「そうか…狗葉にはくれぐれも『やり過ぎるな』と伝える!!」

隊員「はっ!!」

防衛ラインを形成する部隊を指揮する傍ら、遊撃（見回り）隊に逐一指示を飛ばすのも俺の大切な仕事である。

特に、狗葉と彌姫は高確率で暴走するので、こまめに釘を差しておく必要がある。

怒鳴るぐらいの音量じゃないと指示も通らないから、本当に楽じゃない。

張月「…それにしても、最近はファン同士の諍いに加えて、盗人が増えたな…」

警備隊創設当初、警備中の問題はファン同士のいざこざがほとんどだった。しかし、舞台の規模が大きくなるに連れて、その他の問題も増えてきていた。

この『盗人の出没』も最近になって増えてきた問題で、これはファンの中に紛れ込み、所持金や持ち物を抜き取る”スリ”と言えるもので、警備隊隊長の立場からは頭を悩ませている問題の1つだった。

張月「…まあ『盗人に狙われる』」「人が集まってる」」「天和達の人気が出ている」ってことなんだから…複雑な気分だよな…」

…もつとも、天和達にしてみれば目下最大の問題は、盗人ではなくて今日の昼間にこぼしていたことなのかもしれないが…」

…まあ、それは仕方がないことだろうから、月に何日か今日みたいな日を設けることで我慢してもらうか。出来るなら荷物持ちは勘弁したいところだが。

妖術でライトアップされた舞台上を所狭しと歌い踊る天和達を眺

めながら、俺は1つ、大きい溜め息をついた。そして、再び部隊の指揮と警護に集中していくのだった。

これ以降、狗葉が暴走した（口論していたファン数人を殴り倒した。怪我の程度は全治5日〜3週間）以外は特に目立った問題無く舞台は進み、終了後は警備隊をまとめて陣地に引き上げ、警備隊の1日は無事終わったのである。

…後日、狗葉にフルボッコされたファンの方々には、見舞金を渡して頭を下げて回った。いい加減にしろ、狗葉。
（翌日、しっかり魔耶さんの実験室に放り込んでおきました）

ある日の警備隊：後日談

翌日、俺はある目的のため、魔耶さんの専用宿舎（と言う名の実験室）へと足を運んでいた。

その目的とは、叶と劉壁に前日に買った髪飾りを渡すことだ。

前日は劉壁が逃走した挙げ句に応答不能状態になり、その後は天和達に連れ回され、仕舞いには疲れ果てて寝てしまったため、渡し損ねていたのだ。勿論、夜遅くまで舞台警護の仕事があったことも大きく影響している。

なので『この時間帯なら魔耶さんと一緒にいるだろう』と見当をつけて、髪飾りを2人に渡すべく、魔耶さんの宿舎を訪ねたわけだ。

張月「失礼しますよ…っ」と

天幕を掻き分けるように払って中に入ると、そこには…

田豊「あら、燕じゃない。何か用かしら？」

…椅子に座って足を組み、何事かを思案している何時も通りの魔耶さんと…

牛金「……………（ピクピク）」

…顔面蒼白な状態で寝台に横たわっている剛鬼の姿があった。

張月「魔耶さん、剛鬼に何やったんですか…」

田豊「何って…言っではいけないことを言っただから制裁（調教）を加えただけよ？二度と逆らう気が起きないように、ね…」

そう言うと、魔耶さんは不気味な笑顔を浮かべた。

…やはり、昨日の俺の判断は正しかったようだ。魔耶さんは絶対に怒らせてはいけなかったのである。さもなくば今日、俺は剛鬼と一緒に、この寝台の上で死んだように眠っていたことだろう。

ちなみに、一昨日はこの天幕から…

『岩が…岩が………ひっ！？い、嫌あああああ！……！？』

…という、狗葉らしいんだが狗葉らしからぬ悲鳴が聞こえていた。

こちらは何をやったのか非常に気になるところではあるが、聞かないのが明日の我が身のためだろう。

張月「…と、ところで、話は変わりますが叶と劉壁は今どこに？」

不気味な笑顔の魔耶さんに戦々恐々としながら、俺はお目当ての2人の所在を尋ねる。

魔耶さん専用宿舎を訪れたのは良かったが、その内部には残念ながら2人の姿を見つけることは出来なかったのだ。

…哀れな1人の男は見つけたが…

田豊「ああ、あの娘達なら西の雑木林にいるはずよ」

西の雑木林か…そこなら10分もあれば行けるだろう。

張月「そうですか。ありがとうございます」

俺は魔耶さんに礼を言うと、宿舎を後にして西へと向かった。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

宿舎を出て歩くこと十数分。雑木林を少し奥に入った場所で、俺は無事に2人を見つけ出した。

そこで叶は薙刀の素振り、劉壁は木陰で読者…と、2人揃って何時

も通りのメニューに励んでいた。

張月「おーい！叶！劉壁！」

劉壁「！！！？（サッ！）」

寥化「ん？…あ、燕さん！何か御用ですか？」

俺が声を掛けると、叶は笑顔で元気良く返事をしてくれたが、劉壁はあっという間に木の後ろに隠れてしまった。顔半分を出してこちらを窺っている。

張月「いや、実は昨日…」

俺は叶に昨日劉壁と街へ出たこと、その中で叶に似合いそうな髪飾りを見つけたこと、劉壁に逃げられたこと、昨日渡し損ねていたことを順を追って話した。

張月「…で、これが問題の髪飾りなんだが…」

ここに至り、俺はようやく髪飾りを叶に渡すことが出来た。

寥化「わあああ…綺麗ですね！ありがとうございます！大事にしますね！」

そして、それに対する叶の反応は上々だった。喜んでもらったようなので、まずは一安心だ。

張月「ふふ、喜んでもらったようで何よりだ。ただ、それを見つけ

たのは劉壁だからな？劉壁にも感謝しろよ？」

寥化「はい！響ちゃん、ありがとう！大切にに使わせてもらうね！！」

劉壁「……あう……／／／」

そして勿論、今回の発端である劉壁を持ち上げることもしれない。
叶に感謝された劉壁は、木の陰から見えている顔半分を赤らめて照れていた。

その姿に、少し『グッ！』とくる何かが俺の心中に湧き上がったのはきつと気のせいだ。

叶に髪飾りを渡した俺は、今度は劉壁に近づいて行く。

叶に感謝されたことがだいぶ恥ずかしかったのか、彼女は未だに顔を俯けたままで、俺が近付いていることに気付いていない。

この好機を逃すことなく、俺は忍び足で出来る限り素早く劉壁に近

付いた。

そして…

張月「…ほい。これが劉壁の分だ。大事にしてくれとありがたい」

劉壁「!!!!!!?」

…彼女の眼前に髪飾りを差し出した。

後は劉壁が受け取ってくれるかだったが、彼女には突然のことだったようで、しばらくは目を白黒させていた。しかし、幾分か落ち着くと木の陰を出て、少し遠慮気味に髪飾りを受け取った。そして…

劉壁「……………ありがとう…／＼」

…小さい声ではあったが、そうはつきりと返してくれた。

それは些細なことではあったが、劉壁との距離が確かに縮まった
と思えるものだった。

かくして、俺の当初の計画は、無事に満足のいく結果で締めくくられた。

この後、劉壁に点心を奢ったことがばれ、叶にも点心を奢る羽目になりはしたが…まあ、劉壁との距離が多少なりとも縮められたから、許容範囲内とするか。

ある日の警備隊：後日談（後書き）

如何だったでしょうか？

次回は色々兼ねて座談会やります。

閑話休題ゝ息抜き座談会ゝ（前書き）

思ったよりも随分と長くなってしまいました…

閑話休題ゝ息抜き座談会ゝ

政久「えゝ…本日はこのしょーもない小説を読んでいただき、誠にありがとうございます。私は作者の政久「まさひさ」と申します。

今回は座談会と称しまして、今まで片手間で作ったキャラ紹介や、今後予定している展開等を酷いネタバレにならない程度にお話しいこうと思っております。

司会&進行は私、政久と」

張月「本作主人公の俺、張月でお送りします」

政久「というわけで始まった座談会だが…燕さんや、向こうでの生活は順調かい？」

張月「なんとかね。一番心配してる黄巾の乱も、今のところは起きる気配は無いし」

政久「ははっ、そいつは結構。その調子で頑張ってくれ。

まあ、結論から言えば黄巾の乱は起こすんだが」

政久「…やはりあるのか…まあ、三國志関連の小説である以上、黄巾の乱が無いと始まらないからなあ…黄巾党側の身としては複雑だが」

政久「だろうね。まあ、悪いようにはしないから死ぬ気で頑張れ」

張月「…死ぬ気でやらないと悪いようになる…と？」

政久「いや、もう話の大筋が出来てるから、頑張ってくれないと予定が狂って私が困るんだ」

張月「…超個人的な理由だな…まあそっちの事情はどうであれ、こっちは天和達の命が掛かっているんだ。全力でやらせてもらうさ」
政久「助かるわ…そんじゃ早速オリキャラ紹介といきますか。まずは…」

張月「俺だな」

↳ 発展途上の主人公

・ 姓：張「チヨウ」

・ 名：月「ゲツ」

・ 字：慶鷹「ケイヨウ」

・ 真名：燕「エン」

・ 性別：男

・ 現在の能力値

統率 81

武勇 75

知謀 80

政治 85

・兵科適性

剣兵	B	槍兵	A
戟兵	C	弓兵	A
騎兵	B	兵器	B
水軍	B	計略	B

〈紹介文〉

本作主人公。元々はちゃんとした日本人の名前だったが、張3姉妹と出会ったのをきっかけに改名し、以降は3姉妹と行動を共にしている。行動を共にするうちに、何時の間にか3姉妹の義理の兄弟の立ち位置に落ち着いていた。位置的には天和と地和の間。

現在は警備隊を組織して、張3姉妹の舞台警護に奔走している。

能力値は平均よりも高い水準でバランスが取れており、軍事・計略・内政のどれをやらせても良い万能君。これでもまだまだ発展途上。

目標は、以前敗れた太史慈に少しでも食らいつけるようになること。

政久「…以上、張月君の現状紹介でした」

張月「確かに発展途上ではあるが…作者、最終的にはどのくらいのステータスになる予定なんだ？」

政久「最強クラスだから…予定通りなら、ほぼ90は越えることになるね」

張月「ほお…それじゃあ、ゆくゆくは一騎打ちで太史慈さんやら、呂布なんかともまともにやり合えるように？」

政久「んゝ…やろうと思えばやれないこともないかも…って所かな？」

張月「…少し不安だが…まあ、なるようになるか。じゃあ、次のキアラ紹介に行こうか」

政久「あいよ。次に紹介するのは、その太史慈だな」

く烈火の迷将く

・姓：太史「タイシ」

・名：慈「ジ」

・字：子義「シギ」

・真名：????

・性別：女

・現在の能力値

統率　　???

武勇　　94

知謀 ???

政治 ???

・兵科適性

剣兵 ? 槍兵 ?

戟兵 ? 弓兵 ?

騎兵 ? 兵器 ?

水軍 ? 計略 ?

くその他く

武術大会の準決勝で、張月に余裕勝ちした女性。赤髪のポニーテールと着物っぽい服装が特徴。

武術の腕前は超一級で、学問に手を出していたこともあり頭も良い。各地で族を討伐したり、武術大会に出るなどして賞金を手に入れることで生計を立てている。

ただし極度の方向音痴で、目的地とは見当違いの街に辿り着いたり、道に迷って荒野を何日も迷ったり…なんてことを当たり前のように何回も経験している。

長期間の放浪生活が祟ってか、金銭感覚が若干おかしくなっており、何でも食べる。（身体に害がなければどんな物でも）

軍事能力は極めて優秀。そして冒頭は誤字に非ず。

政久「…以上、太史慈の紹介文でした。今のところは武術大会以降出てませんが、今後再登場させる予定でいます」

張月「だから、その時までは能力値は伏せておく…ということか」

政久「そういうこと。正確に言えば、武勇は開示してるけどね」

張月「武術大会で腕前を披露してたしな。再登場をご期待下さい、つてところか…」

政久「そゆこと。はい、じゃあ次、いってみようか」

張月「次は…コイツか…」

↳愛すべき駄犬↳

・姓：官「カン」

・名：亥「ガイ」

・字：？？？

・真名：狗葉「クヨウ」

・性別：女

・現在の能力値

統率 74

武勇 8 5

知謀 2 4

政治 1 4

・兵科適性

剣兵 A 槍兵 C

戟兵 B 弓兵 D

騎兵 B 兵器 D

水軍 D 計略 D

くその他く

張月の部下第1号。鼻と左頬の傷痕、黄色のマフラーがトレードマークの少女。

身体能力が高く、考えるより先に体が動く行動派。自身の背丈よりも長い両手剣を軽々と振り回す。おつむは残念賞。

背丈は張月の肩よりも少し高い程度で、言動は男っぽく、着飾ったりするような女らしいことにいつさいの興味を示さない。

張月に心酔しており、何においても自分のことより張月のことを優先する張月第一主義者。頻繁に暴走しては周囲に迷惑を撒き散らす

トラブルメーカーだが、何時もお気楽そくに振る舞って周りを元気づけるムードメーカーでもある。

周倉とは親友兼ライバル。

政久「…以上が官亥の紹介文だ。能力値は、完全な戦闘専門の脳筋だ」

政久「以前、書類処理を任せたら、3分で知恵熱出してぶっ倒れたからな……ところで作者」

政久「ん？どうした、燕？」

張月「以前紹介した時よりも、狗葉の知謀が若干下がってるような気がするのはいけませんか？」

政久「…それが官亥クオリティさ…」

張月「……………」

政久「さ、次いこう次！」

〈苦勞性の副官〉

・姓：牛「ギユウ」

・名：金「キン」

・字：？？？

・真名：剛鬼「ゴウキ」

・性別：男

・現在の能力値

統率 8 1

武勇 7 7

知謀 8 0

政治 7 0

・兵科適性

剣兵 B 槍兵 D

戟兵 C 弓兵 A

騎兵 C 兵器 B

水軍 D 計略 B

くその他く

張月の部下第2号。元々は官亥の率いていた山賊の副将を務めていた。

目つきが悪く、口も悪い。左頬から眉間にかけて傷痕があり、パツと見は完全に怖いお兄さん。

しかし、その実情は面倒見がよく、部下のことを気遣える優秀な将。張月並みに万能な能力値で、加えて警備隊上層部唯一の男性であるため、張月にはかなり頼りにされている。

さらに能力値もさることながら、炊事・洗濯・日曜大工e t c…色々な意味で、たいていのことは1人でこなせるナイスガイである。

ただ、普段は暴言から田豊に実験台にされて酷い目に会うことが多い、醜態を晒すことがしばしば。

『女難の相があるんじゃないか?』と思うぐらい、親しくなる女性全てに振り回されている。

田豊は幼なじみ。

政久「…以上、牛金の紹介でした。能力値は政治が低い以外は燕と大差無し。色々出来るから、（日常での）使い勝手の良さは燕以上だな」

張月「確かに剛鬼は口は悪いけど、何だかんだ言って、頼んだことはどんなことでもきっちりやってくれるからね。同じ男としては頼もしいよ」

政久「予定では、彼と田豊でタッグを組んで今後も頑張ってもらっ
予定です」

張月「あ…確かに剛鬼って実験台にされてはっただけど、何だか
んだで魔耶さんと仲良いからな…」

政久「幼なじみだからこそ…だな。その内ムフフなことになるかも
よ？」

張月「…主人公差し置いて？」

政久「うん、差し置いて」

張月「…何か悔しい。でもあの2人なら納得」

政久「作者的には、今出てる面子の中で一番いちゃラブしてる気がする」

張月「…調教と称して爆破されたり、”如何にも”な怪しい薬を飲まされたり、実験準備にこき使われるのが…か？」

政久「…でもそれが彼女の愛なのさ…多分。

とにかく、それは今後の展開次第ってことにしておいて、次のキラ紹介いつてみよー！」

張月「…無理やり話題変えたな。しかも多分て…哀れ剛鬼」

〈豪腕の毒物調理師〉

・姓：周「シュウ」

・名：倉「ソウ」

・字：？？？

・真名：彌姫「ミキ」

・性別：女

・現在の能力値

統率 77

武勇 83

知謀 50

政治 27

・兵科適性

剣兵 C 槍兵 B

戟兵 B 弓兵 D

騎兵 C 兵器 D

水軍 A 計略 D

～その他～

官亥の誘いで新たに警備隊に加わった少女。

『仕える主は自分で選ぶ』という信条を持ち、その信条に則り張月に一騎打ちを挑むが惜しくも敗れた。

官亥とは数年来の付き合いで、親友兼ライバル。毎日のように武勇を競い合っており、馬鹿力の官亥とともに打ち合える豪腕の持ち主。

官亥と同じくがさつで大雑把。女らしいことや恋愛ことには疎い…
というか、興味を示さない。

官亥よりは物分かりが良いものの、ジツとしているのは苦手。

重度の味覚音痴で、毒物としか思えないような未確認暗黒物体が大好物。

料理をしてはこの暗黒物体を作り出しているが、それは意図的にそうなるように作っているだけで、料理の腕前自体は決して悪いわけではない。

政久「以上、周倉の紹介でした。能力値は官亥よりもおつむが優秀。

「ただどやっぱり戦闘専門」

張月「あいつ、料理の腕前って良いのか！？俺、何と言つか…見ていて痛くなる毒物を作っているところしか見たことないぞ？」

政久「ああ、暗黒物体を毎日のように作ってるだけで、設定上はちゃんと普通の料理も作れるぞ？」

張月「…本当かよ…全くもって信じられん」

政久「そっちとしては信じられないだろうね…まあ、機会があれば、何れはその腕前が見られると思うよ？」

「機会があれば…だがね」

張月「…なんか、最後がやけに意味深な感じだったか…とりあえず、次いこうぜ？」

政久「はいはい。んじゃキャラ紹介、お次はこの方だ！」

く 白衣の世捨て人く

・ 姓：田「デン」

・ 名：豊「ホウ」

・ 字：元皓「ゲンコウ」

・ 真名：魔耶「マヤ」

・ 性別：女

・ 現在の能力値

統率 75

武勇 64

知謀 89

政治 88

・兵科適性

剣兵	C	槍兵	D
戟兵	D	弓兵	A
騎兵	C	兵器	S
水軍	D	計略	S

くその他く

数年前までは役人として都にいたが、上司と反りが合わず左遷され、役人を辞めて故郷の近くの山中に隠遁していた所を牛金に誘われ警備隊に入った。

何時も白衣を羽織って眼鏡を掛けており、見た目は知的美人なお姉さん。元が役人なだけあって、その見た目に違わず頭は非常に良い。

趣味は発明で、様々な物を創り出しては牛金（たまに官亥）を実験台等で馬車馬のごとくこき使っている。

Sっ気があり、特に馬鹿と牛金に容赦がない。その一方で家族を亡くした寥化・劉壁の2人を引き取って養育するなど、優しい一面も持っている。

常に冷静で、事務的な仕事の5割、7割を一手に引き受ける警備隊のブレンである。が、元上司のことが絡んでくると言動が豹変する。

政久「以上が田豊の紹介文だな。能力値は戦闘もある程度はこなせる一級の文官ってとこだ」

張月「魔耶さんって何か、凄く上官っぽいって言うか…そういう雰囲気醸し出しているんだよな。俺がトップのはずなのに、何故か話す時は自然と敬語になってしまっんだ」

政久「それは人の上に立てる人物ってことだろう？ いざって時に頼りになるんじゃないか？」

張月「…確かにね。もし俺不在時の警備隊の指揮を任せるなら、魔耶さん以外に適任はいないな」

政久「田豊以外だったらどうなんだ？」

張月「狗葉と劉壁は論外。彌姫もちよつと危ないな。叶も無理、剛鬼なら何とか……ってとこだな」

政久「そう判断した理由を聞いても？」

張月「狗葉は突撃馬鹿の猪だし、劉壁は戦えないから全軍を任せられない。彌姫は狗葉よりはマシだが、アイツの親友だけあつてやっぱ突撃馬鹿のきらいがある。叶はそんなことは無いんだが、まだ幼くて力不足。剛鬼なら極端な欠点は無いし、何でも出来るから何とかまとめられるだろ」

政久「なる程ね……これはメモっておいて……っと、そろそろ次のキラ紹介に行こうか」

張月「そんなことメモってどうする気なんだ？」

幼き復讐者

・ 姓：寥「リョウ」

・ 名：化「カ」

・ 字：元俟「ゲンケン」

・ 真名：叶「キョウ」

・ 現在の能力値

統率 48

武勇 64

知謀 60

政治 41

・兵科適性

剣兵	B	槍兵	B
戟兵	D	弓兵	C
騎兵	D	兵器	C
水軍	D	計略	D

くその他く

田豊のサポート役兼見習いとして警備隊に所属する少女。

数年前に山賊の襲撃で家族を失い、劉壁とともに田豊に引き取られて育った。

明るくて活発などどこにでもいそうな少女だが、その心の内には家族や友人を奪い、故郷を焼き尽くした山賊への怨恨が渦巻いており、普段はそんな様子は見せないが、何時か仇討ちを果たそうと暇があれば薙刀を振って自身を鍛えている。

何でもソツなくこなせるが、これと言って抜きん出たこともない。良く言えばオールラウンダー、悪く言えば器用貧乏。

劉壁とは同郷の友人。

政久「というわけで、寥化のキャラ紹介でした。能力値は…まあ、正直微妙なところです。でも、この歳でこれぐらいあれば凄い方ですよね？」

張月「確かに。叶は頑張ってるから、何時か報われて欲しいね。それに、復讐心で生きる…なんてのは悲しいだろうし」

政久「そっだよな…」

張月「ところで、『この歳』ってあるが、具体的にはどの位の年齢何だ？」

政久「設定上は小学校高学年ぐらいだな」

張月「ほうほう…」

政久「因みに劉壁も同じだ。前章、客觀的に見れば、お前はガチでロリコンの一步手前だったわけだ」

張月「……………（ブルブル）」

政久「さて、何かを思い出して震えてる燕は放っておいて、お次はその劉壁のキャラ紹介だ」

く人間不信の少女く

・姓：劉「リュウ」

・名：壁「ヘキ」

・字：????

・真名：響「ヒビキ」

・性別：女

・現在の能力値

統率
1

武勇
9

知謀
7
2

政治
5
6

・兵科適性

剣兵
D
槍兵
D

戟兵
D
弓兵
D

騎兵
D
兵器
D

水軍
D
計略
C

くその他く

田豊のサポート役兼見習いとして警備隊に所属する少女。

数年前に山賊の襲撃で家族を失い、寥化とともに田豊に引き取られて育った。

引っ込み思案な性格で、他人と上手くコミュニケーションがとれない。加えて、山賊に家族や友人を殺され、故郷を焼き払われたことがトラウマとなって拍車を掛けており、他人…特に武器を持った人間を恐れている。

警備隊のメンバーにはある程度慣れたようで、武器を持っていても大丈夫な模様。

話し方が独特だが、慌てたりすると普通の話し方になる。

真名は田豊と寥化にしか預けていない。

寥化は同郷の友人。

政久「…以上、劉壁のキャラ紹介でした。能力値は完全に文官だな」

張月「劉壁はホント利口だよ。叶も何だかんだで物分かりは良いし…これも魔耶さんの教育の賜物かな？」

政久「だろうね。それはともかく、燕はまだ劉壁から真名を預かってないんだよね？」

張月「…ああ。何とか距離を縮めようと頑張っているんだが…これがなかなか上手くないんだ。」

あ、別に真名は預けてくれなくてもいい。ただ、もう少し警備隊に馴染んでくれれば…」

政久「…まあ、頑張ってくれ」

張月「…ああ、ありがとう…」

-
-
-
-
-
-
-
-

政久「…さて、これで全員の紹介が終わったな」

張月「だな。この後は何をするんだ？」

政久「後は今後の展開予定を酷いネタバレにならない程度に語って終了、だな」

張月「そうか。そんじゃ、早速お願いしようか」

政久「任された！ってなわけで今後の展開予定ですが、もう何話か挟んで黄巾の乱に突入します」

張月「ふむふむ」

政久「で、黄巾の乱終了後はしばらくオリジナル展開で進行」

張月「ほうほう」

政久「その後は一応董卓軍を予定している」

張月「なるほどね…つまり、反董卓連合軍を叩き潰せ…と？」

政久「さあ？どうだろうね？」

張月「…何か嫌な予感がするぞ」

政久「それは蓋を開けてのお楽しみだ。…あ、あとオリキャラのオンパレードはこの後も永遠に続くので悪しからず」

張月「…要するに、まだオリキャラを出すつもりなわけか」

政久「おう。とりあえず現時点で登場が確定してるのは…19人だな」

張月「…多過ぎだろ、それ」

政久「私もそう思う。だが止めない。出したいと思った武将は意地でも出す！それが政久クオリティ！！」

張月「…えー…馬鹿な作者は置いといて…と…こほん。本日は、このしょーもない作品をここまで読んでいただきありがとうございます。作者共々、読んでくださる読者の方々には大変感謝しております。作者は大変気紛れで、気分が乗らなければ書きもしないでしょうもない奴ですが、今後も頑張りますので、どうかよろしくお願い致します」

政久「はーはっはっはあ！！！！！！」

張月「では皆様、予定では黄巾の乱の途中か終了後に、一度座談会を挟む予定ですので、その時にまたお会いしましょう」

政久「はーはっは…って、勝手に終わ」『バキィッ！！！！』メキョッ！！！！？」

『ドサア…』

張月「…悪は滅びた。それでは、サヨナラ」

夜天の業火（前書き）

ようやく完成しました。今回はまとも？な戦闘パートになっております。

夜天の業火

前章からだいたい一週間。天和達が少し北東の街へと舞台開催地を移したのに合わせて移動し、その街の郊外に布陣していた警備隊の陣地内は、非常に騒がしかった。

舞台警護に向かう前は何時も騒がしいので、何時も通りと言えば何時も通りだ。

…しかし、張月以下警備隊上層部の頭の中は、何時も通りとは到底
言えないものであった。

事の発端は、この街に到着した翌日…3日程前日まで遡る。

この街は、この辺り一帯を治める太守が居を構える場所…つまり、
この辺り一帯の政治の中心地だった。

この太守はなかなかのやり手らしく、前いた街以上に多くの商人や民達で賑わっていた。人が集まっているので、天和達の舞台にはまさに打って付けの場所と言えた。

張月は舞台成功のために、街の行政府に上演の許可を貰いに行ったり、街の有力者に会場整備の協力を依頼したり…と、3姉妹の裏方を一手に担っている張梁とともにあちこちを駆け回っていた。

そして、だいたいの手回しが終了して陣地に帰ってきて、田豊から『山賊達による駐屯陣地襲撃の日程が判明した』という主旨の報告を受けたのである。

具体的な内容は、以前から付け狙っていたこの近辺を縄張りとする賊が、『今回の舞台開催中の留守を狙って襲撃する可能性が濃厚』とのことだった。兵数はおおよそ500〜600らしい。

それを受けて、張月は急遽警備隊上層部を召集し、張角達とも相談の上で、山賊戦への備えと手回しを開始した。

そして、張月達は戦に向けた最終確認を行い、隊員達は準備やそ

の確認に奔走しているのである。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

└警備隊・天幕内┐

張月「…と言うわけで、以上が今回の戦での基本戦術となる。質問は無いな？」

張月の問い掛けに、出席している警備隊上層部：官亥・牛金・周倉・田豊の4人は『異論無し』と口を揃えた。

ここは警備隊の会議用天幕内。今回の戦への対策会議が、かれこれ2日間に渡って開かれているが、その中身は、もうほとんど最後の詰めとなっていた。

張月「…では、これで会議…いや、軍議は終了とする。各々、夜に備えて油断無く準備をしてくれ。では、解散！」

張月の合図に合わせて4人は立ち上がり、4人それぞれの速さで

天幕を出て行つた。ある者は飛ぶように速く、またある者は何時も通りの落ち着いた様子で…

先ほどまでの2日間の軍議で決まつたのは

- ・基本戦略

- ・基本戦術

- ・それに伴う準備と手回し

…以上が主であり、準備は最終確認中で、手回しはすでに完了している。

今回の戦闘で彼らが採る策はズバリ”火攻め”だ。

具体的な内容を言えば、警備隊はまず一部の隊員を陣地に残し、ほ

とんどは3姉妹の舞台警護に行くように見せかけて陣地を離れる。

陣地を離れた警備隊は、街に入ってすぐに、攻城兵器”雲梯”を利用して城壁から城外へ降り、先日張月が劉壁と叶に髪飾りを渡した雑木林に身を潜める。

後は陣地に残った隊員が、賊が侵入した所で火矢を放って陣地を火の海とし、それを合図に潜んでいた部隊も陣地に雪崩れ込み、賊を一掃する。

…以上が、基本的な戦略だ。

なお、今回の策を実行するためには手持ちの全兵力を投入する必要があった。

そのため、人員が割かれる戦と平行しての3姉妹の舞台警護は難しく、3姉妹や支援してくれている有力者達との相談の末に

『張角の体調が悪い』

という理由で数日間延期することに決まった。

また、この作戦には太守や街の有力者・商人達が全面的な協力をしてきていた。城壁から降りる際に使用する雲梯は太守側が徹夜で用意してくれたし、作戦に必要な物資は商人達の善意で格安で手に入れることが出来た。

陣地を丸々棄てるような作戦のため、失ったらマズい物（糧秣や馬等）の扱いに困ったりもしたが、そこは街の有力者達が責任を持って預かってくれることになった。

また、諸々の事情により、作戦の最終局面にはあるが太守軍・約500の加勢も決まっており、ほぼ街全体を挙げての賊討伐の様相を呈していた。

…そして数時間後、満を持して警備隊本隊は陣地を出発した。その時の隊員達は、皆一様に緊張した面持ちであった。

張月「…総員配置に着いたか？」

-
-
-
-
-
-
-

官亥「おう、旦那。1人の欠員も無えぜ」

張月の問いに、傍に控える官亥が小さな声で応えた。

張月以下の警備隊本隊は、予定通りに雑木林に身を潜め、現在は茂みの影から陣地の様子をうかがっていた。

彼が直接率いているのは、官亥・周倉を中心に隊員140名余り。これに、本人たつての願いで寥化も加わっている。

そして、陣地では別働隊30名余りが、賊の侵入を爪を研ぎながら待ち構えていた。指揮官は田豊で、牛金が副将としてついている。

また、戦鬭が不向きな劉壁は3姉妹の下に避難させていた。

ちなみに、彼らが城壁から城外へと降りることにした理由は、今回のことが街の住民に伝わっておらず、街中を行軍して無駄に心配を煽りたくなかったことと、人で賑わう時間帯の街中を行軍すると大幅なタイムロスになりかねなかったからだ。

張月「じゃあ、隊員達の様子は？緊張している奴らがほとんどとは思うが…」

この問には、官亥の反対側に控える周倉が応えた。

周倉「主殿の言う通りだ。ほとんどの者が初めての实战で硬くなっているよ…」

そう言っで、周倉は軽く溜め息をついた。

…まあ、無理もない。警備隊員の多くは元は普通の民だった者達であり、人を殺す機会など皆無だったのだから、それは仕方が無いと言えるだろう。

…しかし、だからと言ってこのままのはよろしくない。何せ、戦いはすでに避け様の無い現実として、目前に迫っているのだから。

しかし、現実問題として隊員達の緊張は解けていない。周倉は、こんな隊員達の様子で作戦が上手くいくのか心配なのだろう。

…ここにいるのが元官亥の部下だったのなら、彼女も多少は落ち着けただろう。何故なら、官亥の部下だった者達は元が山賊であり、そういう経験は少なからずあっただろうから、多少は当てに出来たはずだったのだ。

…だがしかし、残念なことにそのほとんどは別働隊に組み込まれていて、本隊に配属されたのはほんの数人に過ぎなかった。

彼らが別働隊に組み込まれた理由は、別働隊が今回の戦における実質的な先鋒かつ戦の鍵を握る部隊であり

『策を敢行・成功させるためにも荒事の経験のある者が別働隊にいることが望ましい』

という魔耶さんの意見があつてのことだった。

そういうわけで、真剣で人を斬るのが初めてな平民出身者達を本隊の主力にせざるを得なかったのだ。

…話を戻して、周倉の指摘を受けた張月は考え込むような仕種をとった。現状打開策を考えているのは明らかだった。

…だが、やがて眉間に皺を寄せると、苦々しげな表情で、傍らに控える2人に彼は呟いた。

張月「…ダメだ、何も思い付かない…こんな時どうすれば…」

…確かに彼が人を殺したことはあった。だが、一軍の司令官として戦闘時の指揮を執ったことは無い。

3姉妹が舞台のために移動する時も、警備隊が護衛に当たっていたのと運が良かったこともあってか、賊に襲撃されることは無かった。

舞台警護で実戦に近いようなことをやってはいたが、所詮は”実戦

に近い何か”でしかなく、様々な書物を通じて軍略を学んではいるが、実際に経験しなければ机上の空論に過ぎない。

…彼が持たない”経験”という2文字が、今の彼を苦しめていた。ある意味、彼がこの中で一番緊張しているのかもしれない。

そんな何時もより気弱な様子の張月に、官亥が発破を掛けた。

官亥「おいおい、何言ってるんだよ旦那。旦那は大将だぜ？大将ってのは、どっしり構えてりゃいいんだよ。大将が堂々としてりゃ、下の奴らも自然としっかりするもんだぜ？」

それは小規模ではあったが、数ヶ月前まで山賊のトップとして部下を率いていた経験を持つ彼女だからこそ言える言葉であった。

張月「…そういうもんなのか？」

官亥「おう！」

官亥は笑顔で頷いた。

張月「…どっしり…ねえ…ふふっ、何故か狗葉を見てると自然とそんな気がしてくるわ」

この自信満々な官亥の発言に、張月も幾分か緊張がほぐれたようだ。

その時、僅かに東の方が明るくなったかと思うと…

『ドオオオン！！！ズツガアアアン！！！！』

…立て続けに、盛大な爆発音が夜の静寂を引き裂いた。

そして、それこそが作戦開始、本隊突入の合図であった。

ただ…

官亥「うお！？」

周倉「何なんだいったい！！？」

隊員「すげえ…」

…具体的にどんな合図なのかを知らなかった彼女達や隊員達には、
驚愕するに値するものだったようだ。

張月「思ったよりも早かったな！」

張月は立ち上がり、自身の得物である薙刀をしっかりと握りしめた。

周倉「主殿、あれが合図なのか!？」

張月「ああ！」

立ち上がった張月は周倉の問いを即答すると、後ろを振り返って叫んだ。

張月「さあ、行くぞっ！！者共臆するな！俺について来い！！」

そして、轟音と爆炎に気を取られていた隊員達を置き去りにするかのよう駆け出した。その時の表情に、緊張の色は一切無かった。

その後、ワンテンが遅れて官亥と周倉、隊員達が次々と張月の後を追うのだった。

〔警備隊駐屯陣地〕

時間を少し戻して、こちらは警備隊陣地のすぐ傍。

ここには、警備隊別働隊の30人余りが身を潜めていた。指揮官は田豊で、副将に牛金がいる。

この部隊の役目は至極単純で、この陣地を文字通り火の海にするにとだった。

そのための準備は万全であり、陣内の至る所に干し草や油を染み込ませた木材等の燃えやすい物、あるいは火災を助長する物を置いていた。その中には、田豊が開発し警備隊に入ってから改良を続けた火薬も大量に混じっており、後は火を放つのを待つばかりだった。

隊員「田豊様、賊の接近を確認致しました。現在は様子見のようですが、間もなく陣内へ侵入を始めるものと思われます」

田豊「ご苦労様、そのまま監視を続けてちょうだい。敵の最後尾が陣内に入りきつたら、予定通り合図なさい」

隊員「はっ！」

今までに何度、この時が来るのを待ち望んだらうか。斥候に出した隊員の報告に、彼女の心は昂揚していた。

彼女は自他共に認める天才だった。

その博学ぶりは相当なもので、如何なる難問にもしつかりとした答えを示し、10代半ばには大人と白熱した議論を交わすほどだった。

彼女が今までに創り出した発明品は数知れず、彼女の形式上の上司・張月ですら、未だにその総数は把握しきれていないぐらいだ。

…しかし、それらのほとんどは陽の目を見ることは無かった。何故ならば、彼女が創り出した初期の発明品は世俗に評価されることなく、やがては彼女自身が世に発明品を出すことを止めるようになったためだ。

彼女は役人となった。しかし、彼女の上司となった人物はとんでもない無能であった。

その上司と反りが合わなかった彼女は、やがて上司の勘気に障り左遷された。

左遷された彼女は自ら役人を辞め、故郷に帰ると館に引きこもり、発明に没頭するようになった。

しかし、役人を辞めて故郷へと戻った彼女に対する周囲の風当たりは厳しかった。そして、その逆風は当然のごとく彼女の発明品にも及んだ。

彼女の故郷の人間達はその有用性を認めず、それどころか”不良官吏作の珍品”と馬鹿にさえした。

態度に出したところ無かったが、彼女は悔しかった。自分の発明品の有用性が認められず、陽の目を拝めなかったことが。それは、自身の才までもが侮辱されたことに他ならなかったからだ。

…だが、そんな彼女に突如として転機は訪れた。それこそが、張月という自分より年下の新しい上司の出現だった。

彼は彼女の発明品の有用性を認め、さらにはその支援や助言も積極的に行った。

張月の支援を受けたことにより、彼女の発明は今まで以上に進展し、内容もより多岐に渡るようになった。

…そして今宵、ついに彼女の悲願は現実となる。

『馬鹿にして来た連中を見返すことが出来る』

それが彼女…田豊の悲願であり、彼女にとってはその実現は、何よりも嬉しかったのだ。

しかし、それを表に出すようなことは絶対にしない。あくまでも普段通りに振る舞っている。それは、彼女自身の他人と馴れ合うことを良しとしない隠遁生活の名残だった。だが…

牛金「嬉しそうだなお前」

田豊「…あら、何のことかしら？」

…それでも隠しきれない相手だって存在する。この牛金もその１人だ。田豊は彼の言葉に惚けてみせるが、それが無駄なことであることを彼女は分かっているのだ。

この牛金という男は、彼女の幼なじみであつた。家族と同じぐらの時間を共に過ごし、役人を辞めた後も変わることなく彼女に接した唯一の人間だつた。

彼女も隠遁生活に入つた後は人と会うことを嫌つたが、彼とだけは普通に会つていた。

数ヶ月前までの2年間は全く会つていなかったようだが…十分に長い時間を共有しているのだから、牛金は彼女の心情変化に敏感だつた。後は、寥化と劉壁がかるうじて…といったぐらいか。

牛金「惚けても無駄だ。お前があくどい笑みを見せるのは、機嫌が良い時だけだからな」

田豊「あら、見目麗しい美女に向かつて”あくどい”は無いんじゃないかしら？そんなだから、いい歳して女の1人も引つ掛けられないのよ？」

牛金「ぐっ…余計な世話だ！！しかも、そう言うお前も似たような

もんだろぅが！！」

田豊にからかわれた牛金は、やり返すべく声を荒らげるが…

田豊「うるさいわよ剛鬼。盛るのは構わないけど、獲物が近いから
ってこんなところで吠えちゃ警戒されちゃうじゃない」

牛金「ぐっ…！」

…あっさりと田豊に卸されてしまう。

田豊「久しぶりの獲物だから興奮するのは分かるけど、盛るのはもう
少し待ちなさい」

牛金「…ふっ、分かったよ。一番盛ってる奴が我慢してんのに、そ
の必要も無いこっちが盛ってちゃあ部下に笑われる」

そう返す牛金の表情は、微かにではあるが、間違い無くにやけていた。

ちなみに、彼の言葉が正しいか否かを答えるならば、それは正しいと答えることになる。

この時、田豊は確かに興奮していた。何せ、自身の研究成果を初めて、僅かなものではあるが世間に知らしめることが出来るのだ。彼女が興奮しないはずがなかった。

しかし、そのことを他人…しかも牛金に指摘されたことは、彼女にとっては非常に癪だった。

何か反論しようとしたが、それよりも早く言葉を発した者にそれは遮られた。

隊員「田豊様、敵軍が陣内への侵入を開始しました。間もなく敵最後尾が作戦開始地点を通過します！」

田豊「…あら、そう……全員聞いたわね？各員、火矢の用意を」

出かかった反論を飲み込んだ田豊は、素早く頭を切り替えると矢継ぎ早に指示を出し、その指示に従って松明から矢へと火が移された。

それを確認した彼女は、再び牛金へと視線を戻す。

田豊「剛鬼」

牛金「あん？」

返事をした牛金の目に映ったのは、悪魔のような笑みを浮かべた田豊だった。

田豊「さっきの暴言へのお返しだけど、この作戦が終わってからたつぷりしてあげるわ。覚悟なさい？」

牛金「…は？ちよっ…」

田豊「我らが家を荒らさんとする不屈き者共に、地獄の業火というものを思い知らせてやりなさい！！各自、撃ち方始めっ！！」

田豊の号令に合わせ、漆黒の夜空へ無数の火矢がさながら野鳥の群れのごとく舞い上がる。

そして、その紅い野鳥の群れは最高点に到達すると、多少のバラつきはあったがほぼ揃って一気に急降下に移り、山賊のものらしき声や足音の聞こえる陣地へと降り注いだ。

…そして野鳥の群れの着弾後、数秒間の賊達の悲鳴や喚き声の後…

『ドゴオン！！ズガアアン！！！！！！ドドオオオン！！！！！！』

「ウギヤアアア！！？」

「な、何なんだよいったい…ギヤアアア！！！」

「う、腕がつ、腕がアアア！！？」

…耳をつんざく爆音が、数え切れない悲鳴とともに闇夜の静寂を切り裂いた。

田豊「作戦第一段階は成功よ！後は本隊と太守の軍が到着するまで攪乱しなさい！敵に立て直す時間を与えては駄目よ！」

隊員達『オオオオオオオオ！！！！！！』

隊員達が、雄叫びとともに燃え上がる陣地へ次々と雪崩れ込んで行

く。

その様子を満足げに眺めていた田豊は、牛金の方を振り返り、戦場には不釣り合いな柔和な笑みを浮かべて言った。

田豊「さあ、私達も行きましょう？」

燃え盛る陣地を背景にした田豊は、牛金にはとても艶やかに見えた。

しかし、彼には眼前で燃え盛るこの陣地の地獄絵図が、この後に待っているであろう自分の運命と、どうしても重なって見えて仕方がなかった。

-
-
-

-
-
-

-
-

-

張月が本隊の先陣として陣地に突入したとき、そこはすでに阿鼻
叫喚の地獄の様相を呈していた。

拠点へと侵入していた山賊は、田豊率いる別働隊の熱烈な歓迎を受
けて右往左往の混乱状態。規律も無ければ統制もとれていない。

そこから少し離れた場所では、田豊以下別働隊の面々が矢を乱射し、
効率的に山賊の数を減らしていた。

幸いなことに燃え盛る焰のおかげで視界は確保されており、同士討ちの心配はいつさい無い。

…しかし、それ以上に彼の目に焼き付いたのは、人間が燃えているその光景だった。

全身火達磨となって絶叫しながら地面を転がり回っている者もいれば、すでに力尽きて焰のなすがままになっている死体もあった。

生身の人肉の焼ける臭いが辺り一面に充満し、『今この場所こそが本物の地獄ではないのか?』という錯覚さえした。

張月「うつ……く……うおおおお!!!!!!」

数時間前まで隊員達が談笑していたこの場所は、今や見るに堪えない惨劇の場となっており、一度だけだが人を殺したところのある彼でさえ、思わず吐きそうになってしまう。

しかし、後ろに140名余りの隊員達の先頭に立つ彼は、そのよう

な姿を部下達に見せるわけにはいかない。喉を逆流してくる熱い何かを無理やり押し戻し、吼えることで震える心を抑えつけた。

そして…

張月「ハアアアッ！！！！」

『ザシュッ！！』

賊「ぐふうっ…！！？」

『ドサッ…』

…賊軍殲滅のため、悲鳴と怒号と爆発音が飛び交う火中へと、意を決して飛び込んだ。そして、手近な賊へ斬り掛かった。

張月「だああっ！！！」

賊「ぎゃっ！！！！？」

賊「なっ…ガハッ…！！？」

賊「ひっ…うわ…ギヤアア！！！」

まず手始めに彼の餌食になったのは、集団から離れて少数で逃げ惑っていた山賊達であった。

日々の鍛錬で鍛えた健脚で急接近し、そのまま薙刀で1人の心臓を一突き。すぐさま引き抜き、飛び散る血飛沫には目もくれずに立て

続けに右隣の賊を一閃。最後の1人は逃げ出そうとするが、心臓を串刺しにされて呆気なく1人目と同様の末路を辿った。

張月は3人を殺したことを確認すると、周囲を見渡しして手頃なターゲットを探す。

そして、瞬時に複数のターゲットをその双眼に捉えたと、本能の命ずるままに、獲物を狩る猛禽のごとくターゲットへ迫る。

次にターゲットとなった賊は、哀れにも張月の存在自体に気付けなかったようで…

張月「ふっ！！！」

『ズバッ！！！』

賊「うつ！！？」

…何が起きたのかを理解すること無く、膝を折って永久の眠りに落ちていった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

その後も１人、また１人と、張月の手により物言わぬ屍へと変えられていく。

賊達は、当初無駄に図体のでかい男が中心になり、なんとか統制を執ろうと躍起になっていたが、別働隊の１人が放った矢でその男は早期退場処分となり、その後を引き継ごうとした女も、時間を置くことなく同様の理由によって男の後を追った。

これにより、ただでさえ烏合の衆であつた山賊は、不意打ち・火炎地獄・指揮官不在と一気に畳み込まれ、武装している点を除けば、もはや業火に逃げ惑うただの群集でしかなくなっていた。

彼らはすべからず張月以下本隊の刀剣の錆となるか、別働隊の面々が放つ無情の矢が突き刺さるかを待つばかり。驚くぐらいに歯応えの無いものだった。

反撃をする者もいるにはいたが、その数は少数かつまばら。さらにそういう奴は目立つので、真っ先に別働隊の放つ矢の餌食になっていた。そのため、集団的な反撃は未だに無かった。

それでも退くことだけはしなかったのは、数に勝るといふアドバンテージ意識故か、はたまた体裁を気にしてのことか…

…だが、状況は時間が経つにつれて、山賊達に不利になっていった。いや、持っていかれた。

張月による陣地への実質的な単身突撃の1分後、官亥と周倉を先頭にした本隊も、燃え盛る焰をモノともせずに陣地へ突入した。

これにより、すでに指揮官を失って混乱していた賊達は、さらなる恐慌の深みに嵌った。

官亥「テメーごときがアタイの前に立とうなんざ、100年早いんだぜ！！！！！」

『ブオン！！』

賊「がああっ！！？」

賊「うわっ！！！！？」

官亥は、眼前に立ちはだかる者を片っ端から叩き斬って前進し…

周倉「アハハ！ハハハハハハ！……！」

『ザンッ！ドスッ！ズバァッ！！』

賊「ガフッ！？」

賊「ぎゃあ……！」

賊「ぐっ……がはっ……！」

…周倉は、壊れたような笑い声とともに賊達を斬りまくった。

牛金「ふん！」

『ピュン！』

賊「うぐっ！？」

逃げようとする賊には、漏れなく牛金の放つ必殺の矢が突き刺さり…

田豊「もっと、もっとよ！一兵たりとも逃しては駄目、矢が無くなるまで撃ちまくりなさい！」

牛金「だったらお前も撃てよ」

田豊は指示するだけ指示をして、あとは牛金の突っ込みもスルーしてふんぞり返っていた。

”勢い”という名の剣を粉々に砕かれた山賊達は、すでに警備隊の敵ではなくなっていた。

そうこうするうちに、賊達は1人2人と逃げる者が出始め、やがてまとまって張月達に背を向け出した。事実上の敗走を始めたのだ。

これを見た張月は、もちろん逃がすようにはずもなく…

張月「総員よくやった！！これより仕上げるぞ！！本隊で動ける者は俺に続け！！別働隊は速やかに負傷者の救護を！！1人たりとも逃走を許すなあああっ！！！」

隊員『応っ！！！！！！！！！！』

…賊を殲滅するべく、彼は本隊に現時点で出しうる全力での追撃を命じた。

こうして、警備隊は防衛戦から追撃戦へと移行した。

追撃戦というものは、何時の時代にあっても基本的には追う側が有利なものである。

そして、それは今回の戦闘においても例外ではない。

張月「うらあああっ！…！」

『ズシヤッ！』

賊「ぐあああっ！…！」

官亥「彌姫い！どっちがつ！多く敵を殺せるか…ハッ！…勝負しようぜっ！…！」

賊「うがあっ！…？」

賊「ぐっ…チク…シヨウ…」

周倉「たああっ！…それは望むところっ！フンッ！…だっ！負けた方が明日の昼食奢りだなっ！…！」

賊「げふうっ！！？」
賊「グオオッ！！」

寥化「私はっ！もっともっと強くなる！！こんな所で止まるわけにはいかないっ！！」
『ドカツ！』

賊「あ…ガアッ…」

隊員『うおおおおおお！！！！！！』

指揮官を失い、思い思いに逃げる山賊達を、張月達は容赦なく斬り捨てる。それは、まさに一方的な虐殺と言っても過言ではなかった。

官亥と周倉に至っては、明日の昼食を賭けたゲームとなり果てていた。

そんなことが出来るぐらい、今の警備隊には余裕があった。そして、

それは逆に言うと、山賊達にはもはや侵攻時の勢いなど微塵も無い状態だった。

…それでもなお逃げ続ける山賊達の眼前に、突如として絶対的な壁が立ちはだかる。

賊「お、おい！あの軍勢は何だ！？」

賊「旗印は…『鮑』！？マズい、太守の軍勢だ！！」

賊「そ、そんな…どうすりゃいいんだ！？」

賊「も、もう駄目だ…」

まさかの挟み撃ちに山賊達は、次々と完全に戦意を失っていつてしまう。

張月「好機！勝利は目前だ！一気に叩き潰せええ！！！」

隊員『うおおおおお！！！！！！！！！！』

…その後、戦いは警備隊・太守連合軍による一方的な掃討戦となり、

賊達はことごとく討たれるか降伏し、無事に逃げ延びることが出来たのはほんの一握りに過ぎなかった。そして30分後、この一連の戦は警備隊側のほぼ完全勝利で集結したのだった。

厳冬を越えて（前書き）

ようやく出来ました。前話の夜のお話です。新キャラが出ます。

嚴冬を越えて

〔数時間後〕

???「諸君、此度の戦、ご苦労だった。諸君の奮闘の甲斐あり、見事に賊を撃退……いや、壊滅に追い込むことが出来た。まことに喜ばしい限りであり、私も鼻が高い」

あの地獄の業火のごとき様相を呈した戦闘から数時間後、張月は太守の居城にいた。太守の家臣達に混じり、官亥以下、田豊を除いた警備隊上層部の姿もある。

何故彼らがこのような場所にいるのかと言えば、戦闘後、居城に帰還した太守が慰労会の開催を即決し、張月を始めとした警備隊員達は、下っ端1人余すこと無くその慰労会に招待されたからである。

…しかし、小規模？とは言え戦争の後であり、当然警備隊にも死傷者は出る。また、警備隊の陣地が小康状態になったとは言え未だに燃え続けており、それらの手当てや後始末のため、今回の作戦の言い出しっぺである田豊とその補助役の隊員達、負傷者は来ることが出来なかった。

さらに、怪我は無くてもあまりの凄惨さに体調を崩した者が続出し、結果、城にすることが出来たのは全体の3割程度だった。その無事に参加出来た隊員達は、現在外で太守軍の兵士達と騒いでいる。

???「民達もしばらくは安心して床に就けることであろう。これも偏に諸君…そして、今回の作戦に全面的な協力をしてくれた警備隊諸君の尽力の賜物だ」

太守はそう述べると張月に視線を向ける。

張月はその仕草に軽い会釈で応える。

???「…そこで、諸君らの健闘と無事な帰還を祝して、今宵は急遽宴会とすることにした。皆、少々時間は遅いが存分に楽しんで欲しい。以上、乾杯!」

『乾杯っ!!!!!!!!!!』

かくして、太守の乾杯の音頭を合図に、戦勝の宴は始まった……のだが、張月はこの酒宴を素直に喜べなかったようで…

張月（…戦勝の酒宴…複雑なもんだな。喜ばしいことだと分かっているのに、命を散らした者や、それを悼んでいる者がいると考えると、どうにも喜べん…）

…と、どう表現すればいいのか分からない表現を浮かべ、鮑信の音頭や、それを合図に大酒を食らう鮑信軍の武将や自身の部下達の喧騒をよそに、1人物思いに耽っていた。

この様子はいくら時が過ぎようと変わることはなく、結局、張月はそこまで飲んでもいないのに宴の途中で席を外し、頭を冷やすには寒すぎる屋外へと向かったのだった。

張月「.....」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

席を外した張月は、人気のない城壁の一角で佇んでいた。

その双眼は、僅かながら未だに紅い炎と黒煙を吹き上げている今宵の戦場をただ見つめている。大いに思うところがあるのだろう。

そして、そのまま佇むこと約1分。今宵の戦に思いを馳せる彼が漸く口に出した言葉は…

張月「……………寒い」

…語り部たる私（作者）のここまでの努力を返せよ、オイ。今まで

の雰囲気が出たよコノヤロー。

「???」はっはっは！それは当然だ。もう冬がそこまで来ているというのに、そんな薄着で長らく外にいれば、嫌でも寒くなるだろう？」

「まあ、そんな私の愚痴は置いて、冬の夜の寒さに打たれる張月に声を掛ける存在がいた。」

張月が声に釣られて振り返ると、そこにいたのは酒盛り真っ最中の筈の太守であった。

張月「…鮑信殿」

鮑信「私もお邪魔させてもらっよ。少し飲み過ぎたみたいだね…」

” 鮑信 ”

それがこの街の太守である彼女の名前だ。

指導者として十分な魅力・カリスマ性を持ち、この街の発展具合から見るに、為政者として申し分ない能力も備えている。

そして、その政策のほとんどにおいて民を何よりも重んじ、民の利益となるのなら、多少の損失は厭わない。

近年の漢王朝の役人らしからぬ、公正で慈愛に満ちた太守らしい太守：それが彼女だった。

張月「酒宴の席におられなくてもよいのですか？家臣の方達が心配されますよ？」

鮑信「なに、ほとんどは酔いつぶれているから問題無いさ。それと、私は酒が苦手な質でな。あまり飲まないうちに宴もたけなわになって、他の者がほとんどつぶれてしまうから、いても楽しくないんだ」

張月の質問にそう返すと、彼女は彼の左隣に歩を進める。

張月「…苦手という割には、かなり飲んでおられたように思いますか？」

鮑信「え…そう？」

張月「ええ、そりやもう浴びるかのようにグビグビと。私が覚えていただけでも軽く20杯程は飲んでおられましたか…」

あまり喜べなかった宴の中で、自身の見た記憶から、張月は鮑信の自称を否定した。

鮑信「そうか、私は実は酒に強かったのか…なるほど、だから私は何時も最後まで…ううむ…やはり、自分の視点だけでは分からないことも多いものだな」

自覚は無くとも思い当たる節はあるのだろ。彼女は張月の言葉にうんうんと頷く。

そんな鮑信を見て、張月は少しの間呆れていたが、やがて真面目な表情でこう言った。

張月「…まあ、鮑信殿が酒豪か否かは置いておきましょうか。
…あなたは私に何か御用があると見たのですか？」

鮑信「！…はっはっは！そんなことはないぞ！いきなり何を言うかと思えば…「私の勘違いでしたか…では、私はもう十分に頭が冷えましたのでこれで失礼します」…すまん、冗談だ。だから待つてはくれまいか」

張月の言葉を初めこそ盛大に笑い飛ばした鮑信だったが、張月があからさまに室内に戻ろうとすると、彼女は慌てて彼を引き止めた。

張月「御用がお有りでしたら最初からそうおっしゃって下さい」

鮑信「はっはっは！いやあ、悪いね。でも、確かに君に用があつ

たのは事実だが…何故分かった？」

張月「何となくですよ、何となく。男の勘…とでも言いましょうか」

鮑信「…それは、女が使うべき言葉だと思っただが…まあいいか。
単刀直入に言わせてもらおう」

そう言っ 鮑信は張月に向き直り、真剣な眼差しを向けて言い放った。

鮑信「私に仕える気は無いか？」

張月「…本当に単刀直入ですね」

鮑信「別に回りくどく誘っても良いんだが、面倒でな」

張月「確かにこんな寒空の下で、勧誘するまでに時間を掛けられてはたまりませんね……で、何故私を？」

鮑信「何故かと言われれば、私が武官を探していて、君がその条件を十分満たすと判断したからだ」

鮑信は張月の質問に迷うことなく即答し、さらに続けた。

鮑信「ウチには政治が出来る人間は十分にいるんだが、軍事に長じた人材が足りてない…いや、いない状態にある。事実、我が軍単独では賊軍の掃討が満足に行えていないのが現状だ」

太守として、領内で賊軍の被害に苦しむ民衆のことを思つてのことだろうか。そう言う彼女の表情には、どこか哀愁が漂っていた。

鮑信「それに、先ほど聞いただろう？人の世とは、私1人の視点・考え方では分らないことだらけだ。

仙人なら話は別かもしれないが、生憎と私はそのような存在ではない。

つまり、私は私とはまた違った見方・考え方の出来る優れた人材が是非とも欲しいのだよ」

張月「…で、私はその条件に当てはまる存在である…と？」

鮑信「うむ。それに君だけでなく、先頭に立つていた2人の武官、あの作戦を考え出した知恵者：間違い無く十分な能力を持つ人材だ。見る目がある者：私の懇意にしている奴とかなら、なんとか配下に加えたいと思うだろうね」

そう言つと彼女は小さく笑つた。その脳裏には、誇りを胸に我が道を突き進む、金髪で小柄な知人の姿があつた。

…まあ、このことは今は無関係なので置いておこう。

張月「…確かにうちの連中はみんな、私には勿体無いぐらい優秀です。それこそ、俺なんかよりずっと」「私はそうは思わないぞ?」…

…」

鮑信は笑顔で張月の言葉をブった斬る。そして続ける。

鮑信「確かに君よりも君の部下達の方が優れている点はあるだろう。だからと言って、その逆が無いわけでも無いだろう?」

君は自分を卑下し過ぎだ。もう少し自分の力に自信を持ってい。少なくとも、私はそう思うぞ?

…とにかくだ。君には君の長所があるし、部下には部下の長所がある。そして、私はそんな君の能力を欲した。それでいいじゃないか」

張月「鮑信殿……」

鮑信「…さて、寒くなつて来た。そろそろ返事を聞かせてもらいたいのだが…？」

鮑信は優しく、先の勧誘に対する返答を促す。

自身の能力を認めてくれるうえ、太守の家臣（現代風に言えば地方公務員と言ったところだろうか？）という、それなりに地位と名誉ある職に就けるのだ。太守である鮑信も悪い人物ではない。個人としては、受けても悪くない話だろう。

張月「…申し訳ないのですが、お断りさせていただきます。私にとっては、国家権力よりもあの3人の方が大事ですから…」

…それが『張月でなければ』の話だが…

-
-
-
-

-
-
-

-
-
-

-
-

-

鮑信「……うつむ、決意は固い……か」

張月「……すみません」

あれからしばらく、鮑信はどんどん冷えてゆく寒空の下、張月への熱烈な勧誘を続けたわけだが、結局張月が首を縦に振ることは無かったのだった。

何故なら、張月にとって張3姉妹とは、恩人であると同時に家族であり、最大級の大切な存在でもあった。最初に鮑信に言った『国家権力<張3姉妹』は彼にとっては絶対であり、よほどのことが無い限りこれが覆ることは無いのだ。

鮑信「……仕方無い。非常に残念ではあるが、今回は諦めるとしよう」

張月「重ね重ねすみません……本当に」

鮑信「いや、構わないさ。君には確固たる意思がある。それは私の目に狂いが無かった証でもある。

そういう者は概して有能であるか、信頼がおける者である…というのが私の経験論だからな

…さて、何だかんだで長居してしまったな。これ以上冷える前に戻るでしょう」

こうして、2人はすでに過半が潰れてしまった酒宴の席へ戻って行ったのだった。

…ちなみに、今回の話には後日談がある。

それは、鮑信主催の酒宴から4日後のこと…

-
-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

張月「…つまり何か。ここが気に入ったから、しばらくはこの街を
拠点に活動する…と？」

張角「うん」

ここは鮑信が治める城下の一角にあるそれなりな宿屋。張3姉妹は、ここをこの街での活動拠点としていた。

そして、この数日で街の治安の良さが気に入ったらしく、しばらくの間ここを拠点に周辺での舞台活動を行うことを3人は決めたのだ。

張梁「治安は今まで行った何処よりも格段に良いし、街も活気があって人口も多いみたいだから、お客さんの入りも良好。加えて立地条件から移動がしやすく、商人の出入りも活発だから私達の名をより遠くまで広めることが出来るわ」

張宝「それにこれから季節は冬になる。寒い中移動し続けるのは、ちいは嫌よ。兄さんは、何か不満でもあるの？」

張月「…いや、それ自体に反対する理由は無いんだ。……だが…」

確かに3姉妹の利益だけを考えるなら、この街をメインの活動拠点にすることで得られる利点は、欠点を補って余りある。

そして、張月自身もそのこと自体に対する異論は無かった。

…だが、彼には両手を挙げて賛成出来ない点が1つだけあった。

その1点というのが…

張月「…それに伴って寝食する場所を鮑信殿の居城にするのは何とかならないだろうか？」

… 太守である鮑信が、3姉妹がここを活動拠点とする間の3姉妹、並びに警備隊の居住区、及びその生活資金等の提供を申し出ていて、3姉妹がそれに非常に乗り気なことだった。

張宝「えー！？ 兄さんそれが嫌なの！？ 何で！？ 良いこと尽くめじゃない！？」

張梁「宿代と食費、警備隊の駐屯中の薪とその代金等、その他諸々の経費がある程度浮くうえ、太守の居城だから設備もそれなり。兄さんが何でそんなに嫌がるのか、私には理解出来ないわ…」

… もつともではある。

太守の居城なのだから、そんじょそこらの宿屋よりも設備は良いだろうし、そうすることによる利点は多い。3姉妹のみならず、警備隊にとっても。

さらに、3姉妹にとっては”太守にその力を認められた”という箔がつくことにもなる。

つまり、この誘いを断る利点など全くと言っていいほど無いのであ

る。

…しかし、張月には先日の事もあって、鮑信とは非常に顔を合わせ辛かった。超個人的ではあるが、これが先の点が不服な理由である。

さらに、今回の提案には裏があることが見え透いていたこともある。

住居の提供ならともかく、食糧や活動資金の提供が無償であるはずがない。少なくとも、何らかの見返りを求められるのは明らかだ。

では、彼女は何を見返りとして張月達に求めているのかを考えると、まず姉妹が舞台を行うことによる『城下の活性化』がある。

ただ、これだけが目的ならば姉妹だけを保護していればよく、舞台警護は自軍の兵士を出せば良いのだから、警備隊の面倒まで見る

必要が無い。

…そこで張月が至った最悪の答えが、『警備隊の戦力化』『張月他、警備隊上層部の家臣化』という彼にとっては全く笑えない結論だった。

なので、張月としてはそれだけは何とかして回避したかったのだ。

…まあ、結局のところ3姉妹の意思が覆ることは無く、彼らは約半年間を鮑信の保護下で過ごすこととなった。

そして張月達に関しては、元々鮑信に張月達をそこまで縛るつもり

は無かったようで、張月が想定した最悪の結果にはならなかった。

しかし、3姉妹が支援を受けていた半年の間、張月は客将として軍略を学び、鮑信と一緒に賊討伐に駆け回り、必要に応じて官亥・周倉なども駆り出された。その他の警備隊員達も、3姉妹の舞台が無い日は市中の治安維持や、見張り等の任務に当たる日々を過ごしたのであった。

…ただ、この約半年間の日々は忙しかったものの、彼らにとって良い経験ともなったようで、この時の経験が後々生きてくることになるのだが、そのことは彼らにはまだ分からない。

…彼らがこの国に忍び寄る崩壊の渦中のど真ん中に、その年の内に
放り出されるハメになることも…

雪原の焰（前書き）

二週間振りの投稿です。あの人物が満を持して再登場の回です。

雪原の焰

〈張月視点〉

張角「燕ちゃ〜ん！次の街まだあ？」

張月「ん〜…あと一刻半つてところか？少なくとも日が沈むまでには着けるはずだから、もう少し我慢しててくれ」

前章から約半年の時間が過ぎ、葉のほとんどを落として寂しくなっていた木々も、季節の移ろいに合わせて青くなり、今ではすっかりと在るべき姿となっていた。

俺が鮑し…んんっ、白奈に客将としてこき使われる日々も終わり、また以前のように広範囲を移動する日々が始まったのだ。

すでにお分かりだと思うが、白奈「シロナ」というのは鮑信の真名だ。俺が客将になった際に（ほぼ強制的に）預けられたうえ、『真名で呼ばないと大変なお仕置きをする』と脅されて、やむなく真名で呼んでいる。嫌々という風に聞こえるかもしれないが、別に彼女のことが嫌いなわけではないので悪しからず。

…あいつ、仕事が絡む限りはまともなのに、そうじゃなくなると途端にフリーダムになるからなあ…
散々に振り回されたのも、今となっては良い思い出だ。

ちなみに、『大変なお仕置き』というのがどんなことなのかは未だに謎のままだ。

『…パカラッパカラッパカラッ』

???「少年、小腹が空いたのだが…何かないか？」

…そんな風に白奈の下での日々を思い返していると、後ろから蹄の音とともに近付いて来た人物がいた。

張月「…炎馬「エマ」さん…昼食は一刻ほど前に食べたじゃないですか。街に着くまで我慢して下さい。あと、少年って呼ぶの止めい！」

俺は馬上から背後を振り返り、向かって来た人物にそう諭すように怒鳴り返した。

怒鳴るのが諭していることになるのかどうか…と言う疑問は、どこかそこら辺に置いておいていただきたい。

「???」むう…あと一刻半もお預けとは、少年もなかなか鬼だな」

俺が怒鳴りつけたその女性：炎馬さんは、悪びれもしないで気楽そうに返してくる。俺の言うことなど、まさにどこ吹く風の状態だ。

この炎馬という女性は、姓を太史、名を慈、字を子義と言う。炎馬というのは勿論のこと、彼女の真名である。

覚えている方は覚えているのだろうが、俺がこの世界に飛ばされてしばらく経った頃、人和に勧められて出場した武術大会の準決勝での俺の対戦相手だった人物だ。

白奈の客将をしていた間に再会し、紆余曲折を経た結果、こうして警備隊の一員のような感じに落ち着いている。

太史慈「むうう…では、そこら辺りで何かを狩って「炎馬さんが迷って帰って来なくなるから却下!」…むむむ!」

張月「何が『むむむ!』ですか!ちゃっちゃか配置に戻って下さい!街に着くまでの辛抱ですから」

太史慈「…むう…致し方ない。分かったぞ少年」

そう言つと、炎馬さんはガックリと肩を落として戻って行った。

張月「だから少年言うなと……聞こえてないか」

こちらを気にする素振りも見せずに遠ざかる炎馬さんを見て、俺は抗議することを諦める。出会った頃から一度たりとも名前で呼ばれた例がない。一度でもいいからちゃんと名前で呼んでもらいたいものだが……それとも、俺がまだまだ半人前ということなのだろうか？

答えが出そうにない謎に悶々としながら、俺は馬首を返して行軍を再開する。

…ふむ。次の街に着くまでの間、炎馬さんとの再開を振り返りつつ、名前を呼んでくれない答えを探してみるとするか……ま、無駄足になるだろうが。

炎馬さんと再開したのは…そう。確か、この冬でもかなり強い吹雪が吹いた日の翌日のことだった。

城内の食堂で俺は再開したのだが、叶と劉壁がどこからか連れて来た…いや、これでは語弊があるな……『拾ってきた』または『掘り出してきた』が正しいのか？

…まあ、回想すれば楽にはつきりするか。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

〈回想・寥化視点〉

皆さん初めまして。叶こと寥元僣です！こうして私がメインになるのは初めてで緊張するのですが、私以外に炎馬さんとの最初の出

会話を語れる人がいないので、前半は私が頑張りたいと思います。
まあ、響ちゃんも可能と言えば可能なんですが…ご存知の通り人見
知りが激しいですから…

…ん、話を戻しますね。その日、私は響ちゃんを連れてお昼までには
戻る予定で城外に広がる平野へ散歩に出たんです。

寥化「わあゝ！響ちゃん、すごく綺麗だよ」

劉壁「うん。昨日は凄い吹雪だったからね…」

響ちゃんの言う通り、昨日が猛吹雪だっただけあって、辺り一面の
銀世界。空も吹雪は昨日で止んだけど、まだ時々雪がちらつく曇り
空。白以外の色は無いに等しかったのです。

寥化「響ちゃん、何して遊ぼつか？…って言っても、こんなに雪が
あるんだから、やることは決まってるよね」

劉壁「…もちろん」

そう言うと、私と響ちゃんはお互いに距離を取って向き合います。
これだけでも、この先の予想はつきますよね？

寥・劉『…勝負！……！』

（
10
分
後
）

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

-

寥化「えっへへゝ 私の勝ちだね！」

劉壁「むううう……」

今回の私達の戦いは、上からも分かるように見事私が圧勝しました！まあ、響ちゃんも魔耶さんそっくりな頭脳派だから、仕方ないと言えば仕方ないんですけど。

……え、何をやってたのか……ですか？
雪に勝負と言えば、雪合戦に決まってるじゃないですか。

劉壁「……もう一回……」

寥化「え？」

劉壁「むう……だから、もう一回勝負」

響ちゃんは私の圧勝が気に食わなかったのか、物凄く悔しそうな顔で再戦を申し込んできました。

これには付き合いの長い私も驚きました。：いや、付き合いが長いからこそでしょう。

私達が魔耶さんに拾われてからと言うもの、響ちゃんは表情の変化や感情の起伏に乏しくなり、ひいてはそれらを顔や態度に出すこともほとんど無くなりました。私もそうなのですが、響ちゃんは、未だにあの時の山賊襲撃が尾を引いているのです。

：ですが、僅かここ数ヶ月の間で、少しではあるけど感情が表に出てくるようになりました。

これも、偏に普段から気にしてくれている燕さんを始めとした警備隊の方々や、よく構ってくれる天和さん・地和さん・人和さん姉妹のおかげでしょう。響ちゃんの親友として、皆さんには感謝感謝の今日この頃です。

…つと、話が逸れましたね。響ちゃんのこの要求ですが、答えは…

寥化「いいよ！でも、負ける気は無いよ！」

劉壁「むう…勝つ…！」

…当然『是』に決まっています！

そういうわけで、私は開始と同時に再び雪玉を作るため、そこら
辺の雪を掴もうとしました。

その時です。雪に突っ込んだ私の手が、雪の他に何か変な物を掴ん
だのは。

寥化「え？何k『ビュン！』ブフッ！？」

劉壁「……やった……勝利……」

寥化「あ……無念です……」

…その『何か』に氣を取られ、響ちゃんの開始一投目で直撃をもらって負けたのは非常に屈辱でした。

寥化「…って、落ち込んでる場合じゃないよ！響ちゃん、ちょっと手伝って！」

劉壁「…？」

寥化「いいから早く！」

劉壁「…うん？」

こうして、私と響ちゃんはその『何か』を掘り出しにかかったのです。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

寥化「ねえ……これって……」

劉壁「……うん……」

私達が雪を掘り進めていくと、まず真っ赤な綺麗な布が見えて来ました。私達が掘り出しているモノは、どうもかなり細長いモノのようでした。

さらに掘り進めていくと、布に負けず劣らず綺麗で真っ赤な、サラサラの細長い糸のようなモノがたくさんありました。

さらに掘り進めると、今度は顔のような…

寥・劉「ひ、人だあああ！！！！？」

…そう、雪の下に埋まっていたのはなんと、真っ赤な髪で真っ赤な服を着た女の人だったのです！

劉壁「きよきよきよきよ、叶ちゃん！ど、どうしようー！？」

事ここに至り、響ちゃんは完全に地が出ていました。つまり、慌ててます。燕さん曰わく『容量おおばあ』とのことです。

…『おおばあ』って、どういう意味なのでしょう？

寥化「こ、こういう時はアレだよ響ちゃん！剛鬼さんが『困ったことがあったら現実逃避だ。大体のことは、そうやってる間になるよ』うになってるからな』って言ってた……って、それじゃあこの人の命が亡いじゃん！！？」

…こうして思い返すと、私も響ちゃんに負けず劣らず混乱してますね……ところで剛鬼さん。未来ある子供達に何教えてるんですか。

寥化「と、とりあえず生きてるか確認しよ？」

劉壁「う、うん！」

こうして色々と迷走しつつも、私達2人で魔耶さんから教えてもらった知識（響ちゃんが）を使って、なんとかその人が生きてることを確認したのです。

寥化「じ、じゃあ私は誰か呼んで来るね！響ちゃんは私が帰って来るまでその人を看てて！」

劉壁「うん！」

…この後、私は何とか燕さんと、一緒にいた狗葉さん、剛鬼さんをつかまえて事の次第を報告。3人とお供の隊員さん数名を伴って響ちゃんの所までとって返し、この女性：太史慈さんを城に運び込むことに成功したのでした。

〈視点・張月〉

さて、ここからは俺が回想を受け持たせてもらっぞ。

叶の『人を発掘した』という報告を受けて、俺は狗葉と剛鬼、連れの隊員数名を引き連れて現場に急行したわけだが、その発掘された人が、かつて俺が武道大会で闘って敗れ、今日までの目標としてきた太史慈…炎馬さんだったことに驚いたのは言うまでもない。

雪に埋もれていたにもかかわらず生きていたことに、安堵すると同時にもう一回驚いたのも、今となっては良い思い出だ。

そんなこんなで炎馬さんを白奈の居城に運び込んだあと、魔耶さんと叶、劉壁の3人に彼女を預けて俺達はそれぞれの仕事に戻った。

…そして、翌日の昼前に炎馬さんの意識が戻ったことを知らされた俺は、キリの良いところで仕事を切り上げ、炎馬さんを運び込んだ部屋へと向かった……までは良かったんだが、その後が問題だった。

炎馬さんが寝ていた部屋を訪れたところ、彼女は部屋に居らず、魔耶さんに付けていた隊員から彼女が食堂にいることを聞かされ、俺は食堂に向かったんだ。

そして、向かった先の食堂には…

太史慈「ガツガツガツ…モグモグ……つぶはぁ！これは旨いな！おかわりを頼む！」

…実に幸せそうな表情を浮かべ、物凄い早さで『何か』を平らげていく炎馬さんと…

周倉「そうか！まだまだあるからじゃんじゃん食べてくれ！」

…両手に皿を抱え、ホクホクの笑顔で料理らしき『何か』を運ぶ彌姫。そして…

隊員「…うっぱ！？オロロロ…」

隊員「ううう……グハアッ！！」

隊員「目が！目があああ！！」

隊員「の、喉が焼けるっ……！」

隊員「……………」

……いつぞやの賊軍討伐戦に勝るとも劣らない地獄が、そこにはあった……

張月「……………（汗）」

この凄惨な光景を目の当たりにした俺は、踏み出そうとしていた足を思いっきり引いていた。俺にこの魔境へズカズカと踏み入っていく勇氣は無い。と言うか、入ったが最期、絶対に無事では済まない。

なにしろ、彌姫の料理は以前、その香りだけで魔耶さんをノックアウトしたという驚異の戦績を持っている。それだけ、彼女の作る料理^{ダイク}は恐るべき存在なのだ。

現に、今食堂内で倒れている勇者達も魔耶さんと同じ理由に困るところだろう。

張月（急ぎの用と言うわけでもないし、夜に出直すか。うん、それがいい）

そついうわけで、俺は食堂を去ろうとした。…が！

太史慈「…ん？…おお！誰かと思えばいつぞやの少年ではないか！」

張月「あはは……（汗）」

周倉「おお、主殿。ちょうど良い所に来られたな！今、太史慈殿に出す料理のおかわりを持ってきたところなんだ。主殿も一つ如何かな？」

張月「…いや、昼食はもうと」少年、周倉殿の料理を肴に、こつちでお姉さんと一緒に語らおうじゃないか」…いや、だから「ちなみに拒否権は無いぞ？」嫌だアアアアア！！！！」

…こうして、俺は魔境へと引きずり込まれていったのである。

-
-
-
-

-
-
-

-
-
-

-
-

-

魔境の中は、外側から見た以上に地獄だった。

入り口からでは見えなかった所にも、この魔境に挑んだ勇者達の死骸が十重二十重と積み重なっていた。警備隊員だけでなく、白奈の兵士らしき死骸もちらほらと見えた。

しかも、よく見てみるとその死骸の中に叶と劉壁の姿もあるではないか！

…そして、俺もまた…

張月「…うつ！！？（な、何つつ臭い……あ、何かクラクラして…
…）」

『ドサッ……』

太史慈「ん？どうかしたのか少年？」

周倉「あ、主殿……？（汗）」

…一発で奈落の底へと案内されることになり、あっさりと死骸達の仲間入りを果たしたのであった。

-	-	-	-	-
-	-	-	-	-
	-	-	-	-
		-	-	-
			-	-
				-

張月「……………うつ」

太史慈「おお！気が付いたようだな少年！」

張月「…あれ？何故太史慈さんが…と言うか、俺は何故……………
ああ、彌姫の毒物にやられたのか…」

俺が意識を取り戻したのは、その日の夜のことだった。寝台の傍には炎馬さんがおり、後で聞いた話では魔耶さんと交代で看病してくれていたらしい。

太史慈「いやあ、まさかこんな所で少年に遭えるとは思わなかった

ぞ」

張月「それはこっちの台詞ですよ。て言うか、何で雪の下に埋まってるんですか…それと彌姫…周倉の料理をじつに美味そうに食べてましたけど、大丈夫なんですか？」

起きて早々ではあったが、俺は気になって仕方がなかったことを矢継ぎ早に問い質していく。

太史慈「ふむ、流石にいつペンには答えられないから1つずつ話をしよう。実はな…」

炎馬さんの話によると、もともと彼女は青州の片田舎にある実家に顔を見せに帰る途中だったらしい。

しかし、その道中で道を間違えたのか迷子になり（炎馬さんは否定）、さらに立て続けに吹雪に遭い完全に遭難。闇雲に歩き続けたものの状況を打開するには至らず、やがて空腹と体力の限界で力尽き、昨日2人に掘り出されるまで埋まっていたのだそう。

…よく凍死しなかったものだと思つづく。賞賛を受けてもいいぐらいの生命力だ。

また、彌姫の料理に関しては『美味かつた』の一言で片付けられた。

…まさか、本人（彌姫）以外にあの料理を食べられる人間がいたとは…
ダークマター

張月「…まあ、事情は分かりました」

太史慈「うむ、少年は理解が早くて実に助かるな。

…あと、私が遭難したのは吹雪に遭ったからで、決して道を間違えたわけではないからな？」

張月「顔が近いです！わかりましたから、そう詰め寄らないで下さい！！！」

太史慈「うむ、話がわかる少年はお姉さん大好きだ」

張月「はいはい……で、太史慈さんはこの後どうなさるおつもりで？実家に帰られますか？」

太史慈「無論そのつもりだ。それと、お姉さんのことは”炎馬”と呼んでくれて構わないぞ？」

張月「…真名ですよ、ね、それ。そんな軽い感じで預けて大丈夫なんですか？」

太史慈「うむ！！全く問題無い！！」

そう言い切る炎馬さんの姿は、やけに堂々としていた。今でもハッキリと思い出せる。

張月「…わかりました。それと、俺の真名は”燕”です」

太史慈「うむ。少年の真名、確かに預かったぞ」

張月「いや、だから……真名預けるんで、その『少年』って呼ぶのは止めてもらえませんかねえ？」

太史慈「…？何故だ？少年は少年だろう？少年を少年と呼んで、何か悪いことでもあるのか？」

張月「いや、だから…」

…その後、1時間余りを費やして繰り広げた俺の呼び方での論戦の様子も…ね。

…結局、先の論戦は平行線を辿り、とうとう彼女に俺をちゃんとし

た名で呼ばせることは叶わなかった。

思えば、今の炎馬さんとの関係もこの時形作られたんだよね…こうして振り返ると、なかなか感慨深いものだ。

…彼女が俺を『少年』と呼ぶことを止めさせられていたら、もう言うことなかったんだけど。

炎馬さんはその日から10日余りを時々叶に稽古をつけたりするなどして過ごした後、実家に帰るために城を旅立っていった。

出発に際して、『今度は迷わないように』と言ったら、思いつ切り良い笑顔で睨まれたあと、渾身のヘッドロックをくらったのはこれまた良い思い出だ。それと同時に、今度は何時逢えるのかと考えたりもした。

…え？羨ましい？

…今羨ましいとか思った奴、女性とは言え三国志でもトップクラスの武力の持ち主のヘッドロックだぞ？良い思いする前に、痛くて頭が割れそうでシチュエーションを楽しむ余裕なんか無かったよ！

オマケに炎馬さんが旅立った後、天和・地和・人和が何故かふてくされて、ご機嫌を取るために財布がほぼすっからかんになったし…
…良いことなんか1つも無かった。口は災いの元だと実感したぜ。

…コホン、話を戻そう。時間は飛んで、炎馬さんが旅立ってから…
…だいたい1ヶ月後のこと。

別れの際に、『今度逢えるのは何時のことか…』と考えていた矢先

に、彼女がひょっこりと帰って来た。

そして、俺に会うや否や…

太史慈「しばらく少年のところで働かせてくれ！」

張月「……はい？」

…これである。

再び事情を聞いたところによると、あれから実家に帰ったのはよかったのだが、帰って間もなく母親が急死してしまったらしい。

突然の不幸に数日間悲嘆に暮れていたそうなのだが、ようやく立ち直った頃に問題となったのが、生活資金の収入源だった。

彼女はこれまで、基本的に武芸で食い扶持を稼ぐ根無し草で、安定した収入源が無かった。

対して、彼女の母親は農業で安定した日々の食い扶持を稼いでいたが、彼女自身は農業に携わったことがほとんどない。
加えて、かなり以前から武芸で身を立てることを決意していた彼女は、迷うことなく家と田畑を売り払った。

…で、家と田畑を売り払った後、どう生きていくべきかを考えたらしい。

彼女の第1の希望はどこかへの仕官だった。しかし、彼女はこれまでの旅で、数々の諸侯を見て来たそうだが、これだ！という人物には出会えなかった。

オマケに、他の諸侯の品定めに行こうにも路銀が無い。

…で、その結果、しばらくのその場凌ぎと路銀稼ぎのために俺の所で働くという案が浮上し、今回の運びとなったのだそう。

この炎馬さんの申し出は、その時の俺としては非常に嬉しかった。どうしてかと言えば、この時期の警備隊は白奈の好意を受けて行った募兵によって隊員が増加し、その訓練や人数分の物資の手配等の人手が足りない状況だったからね。

…で、炎馬さんには普段は訓練をメインに行ってもらい、舞台の時は指揮官の１人として采配を揮ってもらい今に至る。

何か数日前の炎馬さん曰わく、『雰囲気が入った。気が楽で良い。もうしばらく世話になる』とのことなので、しばらくは警備隊にいてくれるようだ。

…以上が、炎馬さんが今ここにいる経緯である。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

「
……ん……い
ん」

張梁「兄さん!!」

張月「うおあっ!?!…って、人和か。脅かさないでくれ…」

張梁「声を掛けても反応しない兄さんが悪い!」

そう言うと、人和は少し不機嫌になる。

どうやら、回想に没頭していたために人和が話掛けていたのに気付かなかったみたいだ。

張月「あゝ…すまん。ちょっと考え事しててわからなかったよ。街に着いたら夕食奢るから許してくれないか？」

張梁「……ふふ、なら遠慮無くご馳走になるわね、兄さん」

…なんか騙された気がしないでもないが、なんとか人和の機嫌をとることに成功したようだ。代わりに財布の中身が犠牲になったが、1人分の夕食ぐらいなら然したる出費でもないだろう。

そう考えていたところ…

張角「ぶうー！人和ちゃんばっかりズルいよ！」

張宝「兄さん？人和に奢るんだったら、勿論ちい達にも奢ってくれるんでしょうね？」

残りの2人…天和と地和は、俺が人和だけに奢るのが不服なようで、自分達にも奢れと迫られてしまう。

俺にはそんな2人の要求を断れるはずもなく、3人分の夕食代を支払わされるハメになった。

3人って体型に似合わずかなりの量を食べるから、おそらく金額も

桁外れになるだろう……おまけに高級料理。

張月（……ああ、俺の金が……新しい兵法書を買おうと貯めてたのに……）

近い未来に訪れるであろう（財布の）悲劇に心を痛めつつ、俺は次の街へと向かうのであった。

雪原の焰（後書き）

如何だったでしょうか？御意見・御感想お待ちしております。

大きな一歩（前書き）

1ヶ月近く空いてしまいましたが新作です。しかし駄文…

大きな一歩

目的地の街に着き、天和達が満腹になるまでたらふく夕食を奢らされてから数日後、舞台を無事に終わらせた俺達警備隊は、警備に当たった隊員達を1日数グループずつに分けての休暇をとっていた。

俺はと言うと、天和達3人と久しぶりに街に繰り出そうとしていた。

張月「3人とも、どこか行きたい場所ってある？」

清々しい陽気の中、ある宿屋の前で俺は後ろに続く3人の少女に声を掛ける。

その3人と言うまでもなく天和達だ。

張角「んゝ…私は洋服屋さん…かな。新しい衣装を作る生地が欲しいから」

張宝「ちいは小物扱ってるお店ね。可愛い装飾品を買いまくってるんだから！」

張梁「私は…天和姉さんと同じね。それとちい姉さん、資金は無限にあるわけじゃないんだから自重してちょうだい」

どうやら3人それぞれ、行きたい場所があるようだ。

張月「…じゃあ、午前中は今出た所を中心に回るか。その後昼食を取って、後は…美味しい物食べたり気になった店を覗いたりしながら過ごすか？」

張角「さんせうい」

張宝「うん、いいわよ兄さん」

張梁「私も異論はないわ」

…今日の予定は決まったな。

張月「じゃ、行くか」

3 姉妹「おー！！」

そして俺達は宿屋を飛び出し、活気ある人混みの中へと飛び込んでいった。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

ゝ2時間後ゝ

張角「みんな！次はあのお洋服屋さんに行こゝ」

張宝「おゝ」

張梁「…って、兄さん大丈夫!？」

張月「……………」

…正直に言おう。女性の…いや、天和達3人の買い物を舐めていた。と言うか、主に上2人が全く自重しない!俺のことなどお構いなしに買ってきては俺に預け、またどこからか買ってくる。しかも、かなりお高い物がほとんどきた。

確かに以前…有名になってしばらくしたあたりから金使いが激しくなっではいたが、今日は特に酷い。

…とは言え、その資金は俺の懐から出ているわけじゃないから3人の自己責任なんだが…これも有名になって金に余裕が出来たからだろう。『富は人を変える』『恐るべし金の力!』と言ったところか？

…まあ、そういうわけで上記の事が延々と繰り返され続けた結果、俺は昼飯を取らない内に、すでにグロッキーとなっていたりした。

張梁「兄さん、無理しない方が良いわよ？」

俺の様子を見てか、3姉妹の良心・人和が心配して声を掛けてくれる。俺はそれが素直に嬉しかった。

張月「ありがとう人和…その優しさが身に滲みるぜ……そんな人和が俺は大好きだ（泣）」

張梁「…何言ってるのよ兄さん」

今の思いの丈を人和に伝えたら、なんか思いつ切り引かれた。そう言えば、ほんのり顔が赤いような…

…冷静に思い返してみると、確かに言葉が少々アレだった。ほんのり顔が赤いのもそのせいだな、うん。

…恥ずかしい…

張月「……すまない、少し頭が逝ってたようだ」

張梁「…今後は気を付けてよ。ホント紛らわしいんだから…」

張月「何が紛らわしいんだ？」

張梁「……何でも無いわ。それよりそろそろ昼飯にしましょう。兄さんも限界のようだし」

張月「…ありがとう。ホント助かるよ……」

その後、天和と地和を何とか抑えて、俺達は一番近くの酒場に入
った。

く
酒場
く

酒場の中は、ちょうど昼時だけあってかなりの席が埋まり賑わってていた。

職人・商人・旅人・武芸者など、様々な職種の人が思い思いの席で酒を飲み、食べ物を貪っていた。

てゆーか、昼間から酒とかは自重すべきだと俺は思う。

張角「うゝん…結構混んでるね…」

張宝「他の所に行きましょうよ」

確かに店内は客でいっぱい。どの机にも人が座っていて、4人一緒に座れる所は無さそうだった。

…だがしかし…

張梁「無理ね。これ以上動けば兄さんが潰れるわ」

張月「……………」

俺はすでに極度のグロッキー。傍に山積みの購入品の数々。これ以上動けないのは火をみるより明らかだ。

張宝「兄さん、男のくせにだらしないわね」

張月「……誰のせいだと思っているんだ……」

張梁「…仕方ないわ。少し空くまで待ちましょ」

そういうわけで、俺達は机が空くまで待とうとした。すると…

???「おや…どなたかと思えば、そこにいるのは張月様ではありませんか？」

どこからか声をかけられた。

声のした方を見るとそこには…

弘北「こんな所でお会いするとは奇遇ですな」

張月「弘北さん……ですよね？」

かなり以前、蒼空を譲ってもらったなどお世話になった馬商人・弘北さんがいた。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

張月「弘北さん、ありがとうございます。相席させてもらえて助かりました」

弘北「なに、私もちょうど話し相手が欲しかった所なのでお互い様ですよ」

俺達は弘北さんに誘われて相席することになり、席が空くまで待機しなければなくなる事態を回避することに運良く成功していた。

そして、俺達が座る机の脇には本日の俺の苦勞がどっさりと置かれている。

そんな、若干トラウマ気味の苦勞の象徴を尻目に、俺達はなんとか

食事にありついていた。

俺達は昼食を取りつつ弘北さんの話を聞いていたのだが、彼は今、いつも通っている道が土砂崩れで塞がれてしまい、身動きがとれなくて困っているらしいかった。

弘北「用があるので急いで帰ってたのですが、いつも通っている道が崖崩れで通れなくなっていて足止めをくらっているのです」

張月「それは大変ですね……」

張角「他に道は無いんですか？」

弘北「あることにはあるのですが……」

のんびりとした声で投げかけられた天和の質問に、弘北さんはさらに困ったように顔をしかめる。何か問題でもあるのだろうか？

張梁「何か問題でも？」

弘北「はい…その道はどうも近くに根城があるらしく、山賊が頻繁に出没しているのです。」

…なるほど。そういうわけか。

張宝「つまり、山賊が恐くて通れないってこと？」

弘北「ええ、概ねその通りです。丸腰の商人など、彼らにとっては良い鴨でしかありませんからね…」

張月「大変ですね…早く復旧すれば良いのですが」

弘北「ええ、まったくです」

弘北さんの苦勞と苦惱を思い、同情していたところ…

張角「……そうだ！良いこと思い付いたよ！」

天和が突如声をあげ、視線が集まる。

張梁「…何を思い付いたのよ天和姉さん？」

張角「警備隊の人達で護衛してあげるなんてのはどうかな？お仕事
もしばらくないし」

張梁「……天和姉さん、それ本気？」

天和の提案に、人和が呆れ顔で聞き返す。

張角「ぶうゝ…私は本気だよ」

弘北「ははっ、ありがとうございます。ですが、お気持ちだけで結構ですよ。皆さんの手を煩わせるわけにはいきません」

張角「でも、急用じゃあなかったんですか？」

弘北「それはそうなのですが……やはり皆さんのお手を煩わせるわけには…」

張月「……………」

張角「え、燕ちゃんはどうかなく…？」

妹からの手厳しい反対を受け、今度は俺に話を振ってくる。

張月「…あんまり無理矢理なのはお薦め出来ないな。弘北さんの意見もあるし…」

張角「…そうだよな…」

張月「…でも、一つ良いことを思い付いた」

張角「？」

張宝「？」

張梁「？」

弘北「張月様、いったい何を…？」

俺の思惑が分からないらしく、全員が首を傾げる。

張月「弘北さん、吉報を期待して待つて下さい」

弘北「は、はあ……」

その後、俺達は弘北さんと別れて街中散策を再開した。

張宝「兄さん、やけに良い笑顔だったけど、いったい何するつもりよ?。」

酒屋を出て弘北さんと別れてすぐ、3人…特に地和は俺が何をやるうとしているのか気になるようで、やたらしつこく聞いてくる。

張月「…わかったわかった。ヒント…答えの一手手前までは教えてやるよ」

張宝「やった！で…何？」

張月「（あまりにしつこくされると疲れるし、それぐらいならくれてやるか…）そうだな…強いて言うなら、体が病に冒されているなら元を除いてしまえばいい。そう言うことだ」

張宝「むむむ…」

張角「うーん…どういつこと燕ちゃん？」

地和はまだ分らないみたいだ。答えを出そうと必死で唸っている。
で、天和は早々にギブアップ、と…

張月「これ以上は言わないよ。ここから先は自分で考えること」

張梁「…兄さん、まさか…」

張月「……ククッ（黒笑）」

…どうやら人和は普通に気付いたみたいだな。

その後、俺達は陽が沈むまで街中を散策し、天和達は心行くまでシヨッピングを楽しみ、俺は心と身体が限界を迎えるまで荷物持ちとして酷使された。

…そして翌日、荷物持ちで筋肉痛になるという異例の事態になったことは、俺の小さなプライドのためにも心の片隅に封印しておきたいと思う。

「時間は跳んで数日後」

張月「者共、今回の戦いの目標はこの近隣を荒らしている賊軍である！！」

我々にとって初めての攻城戦となるが、幸いなことに敵は我々の存在に気付いてないものと思われる。奇襲で賊軍を一気に粉碎・殲滅するぞ！！」

隊員「応っ！！！！！！」

…天和達の荷物持ちとしてこき使われた日から数日後の夜、俺は準備を万全に整えて武装した上で、闇夜に紛れて警備隊員達を率いて戦場に赴いていた。

その目的は上記の通り、賊軍の根城を強襲・殲滅するためである。

この間天和達に言った『体が病に冒されているなら元を除いてしまえばいい』とは、“体”を“人”、“病”を“賊軍”、“元を除く”を“殲滅する”に置き換えればおおそは理解出来たはず。…つて、言わずとも簡単に分かるよな。

…では、何故突然賊軍討伐などをするのかと言えば、それは以前受けた弘北さんへの恩返しでもあり、警備隊の新規隊員に実戦経験を積ませるため。そして、俺自信の実戦での部隊指揮能力向上のためでもあった。

まあ、上に挙げた3つが今回の討伐に至ったおおよその理由である。

今回の戦いの戦法は、敵に気取られる前に賊軍の根城へ突撃、魔耶さん印の爆弾（正式名称：鉄火弾）でもって城門を爆破。その後、時間を置かず迅速に内部を制圧するという単純な力攻めである。

先鋒は炎馬さんを大将に彌姫と魔耶さんが率い、兵数は先の賊軍討伐を戦い抜いた精鋭150を擁している。その後ろに本隊として俺と狗葉が控え、先鋒の突撃に続いて突っ込む形になる。兵数は新規隊員600ほど。そして、そのさらに後方には剛鬼率いる支援・工作隊100が後詰めとして従軍していた。

張月「狗葉、先鋒は配置に着いたな？」

官亥「おう、すでに炎馬から『火の用意は整った。何時でも進軍可能』との伝令が届いてるぜ！」

張月「よろしい。では、只今より作戦を開始する！」

…伝令兵！先鋒に攻撃を開始するように伝える」

隊員「はっ！！」

指示を受けた隊員がすぐさま飛び出していくのを見届けて、俺も心を引き締めた。

張月「狗葉！俺達も何時でもいけるようにしておくぞ！」

官亥「応っ！！」

）作者視点）

- 太史慈側 -

張月の決断から少し後のこと。賊軍の根城の城門からそう遠くない林の中に、本隊から少し離れて警備隊先行部隊は潜んでいた。

隊員「太史慈様！張月様より攻撃開始命令が届きました！」

田豊「あら、やっと来たのね」

周倉「やっとあたし達の出番か」

太史慈「うむ、少々待ちくたびれたぞ」

伝令からの報告を受けて、今作戦の主目標である賊軍の根城を睨む3人の女性。言うまでもなく、上から順に田豊・周倉・太史慈である。

大将が太史慈、副将に周倉で、田豊は自身たつての願いで参謀兼副将として従軍している。

本来なら、田豊は後詰め…つまり現在牛金が率いている支援・工作隊の大將として従軍し、順調にいけば戦闘に直接関わることはないはずだった。

しかし、事前に彼女が張月に直談判し、先鋒への参謀兼副将としての従軍の許可を得ていた。

彼女が何故そのようなことをしたのかとえば、それは彼女の発明の成果を自身の目で確認したいがためであった。

太史慈「諸君、先ほど隊長殿から作戦開始を伝える命令が届いた。

我らはこれより賊軍に対して奇襲攻撃を敢行する。各員、気を引き締めて事にあたれ。

…では魔耶殿、開戦の合図は盛大に頼む」

田豊「ふふっ、言われずとも…よ。工作隊、事前の手筈通りにやるわよ！」

隊員『はっ！！！！！！』

発明の成果…則ち爆弾、先日付けられたら正式名称・鉄火弾「テツカダン」の威力の程をその目で確かめること。これこそが、彼女が先鋒としての従軍を希望したたった1つの理由である。

また、この鉄火弾は現時点では工作隊の隊員にしか扱えなかった（張月は別）ため、張月は工作隊の一部を先鋒に組み込んでいた。

だが、彼らの扱い方には未だに危なっかしいところがあり、早期の鉄火弾の設置・起爆が求められる今回の戦で開発者たる彼女がその指揮を執るならばその心配もほぼ無い。張月としても願ったり叶ったりだったわけだ。

…そして今、彼女は己が目的を果たすため、先鋒のそのまた先鋒として戦地へと赴くのであった。

-
-
-
-

-
-
-

-
-
-

-
-

-

伝令「太史慈様、先行する工作隊より合図です！」

太史慈「そうか」

工作隊が行動を開始してからおよそ20分後、太史慈の下に工作隊からの伝令が届いた。その内容が『作戦開始』であったことは言うまでもない。

太史慈「諸君、攻撃用意だ。直に出番が来る」

隊員『はっ!!!!!!!!!!』

そしてそのまま待つこと数分、賊軍の根城の方から、以前の賊軍討伐戦の時よりも遥かに大きい爆音と共に、紅蓮の炎が吹き上がった。

…もつとも、その時彼女は居なかったなので、その時のことを知っているはずも無い。なので結果として…

太史慈「……………」

…そのあまりの威力に啞然とすることになる。

周倉「前とは比べ物にならない威力だな…流石は魔耶さんだ。それよりも炎馬殿、呆然としている時間はありませぬぞ？」

啞然とする太史慈を尻目に、以前に一度似たような光景を目撃していた周倉はさほど驚きはせず、逆に大将である太史慈に突撃を促す。

太史慈「…はっ！そ、そうだな彌姫嬢。あまりに奇天烈だったもの

で、つい啞然としてしまったよ」

周倉から催促を受けて我に戻った太史慈は、そう返すと即座に表情を引き締めて隊員達に向き直る。

太史慈「諸君、工作隊がつくってくれたこの千載一遇の機を逃してはならない！総員突撃！賊軍は一兵たりとも逃がすべからず！！」

隊員『おおおおおお！！！！！！！！』

太史慈の号令一下、警備隊先鋒の雄叫びは闇を切り裂き轟いた。

- 張月側 -

官亥「旦那!!」

張月「ああ、始まつたな」

先鋒が突撃を開始したのとはほぼ同時刻、田豊率いる工作隊が打ち上げた開戦の花火は、張月率いる本隊からも確認していた。

張月「すでに先鋒も突撃を始めてるだろうし、こちらも行くとするか。

…狗葉、部隊の方は問題無いな？」

官亥「おう！旦那の指示があれば、すぐにでも動けるぜ！」

張月「よし、ならば即座に出る！狗葉、行くぞ！」

官亥「おうっ！！」

…本隊が進軍を開始したのは、それからすぐのことであった。

結果を言ってしまうえば、今回の作戦は大成功であった。

『攻められることは無いだろう』と高をくくっていた賊軍の見張りはおざなりであり、事前に来る限りの下準備をしていた工作隊は妨害を受ける前に鉄火弾の設置を完了。賊軍の哨戒が気付いた時には、すでに導火線には火が着けられていた。この設置作業を見逃した時点で、すでに賊軍の敗北は決まっていたと言ってもいい。

程なくして、設置された数個の鉄火弾はその威力を惜しみなく発揮し、堅牢な城門を周囲ごと跡形も無く吹き飛ばした。そして、時間を置かずに太史慈率いる先鋒部隊が城内へと突入し、賊軍と交戦状態に入った。

…もつとも、交戦したとは言えども、実際のところは警備隊側の一方的な蹂躪であった。

〈1時間後〉

田豊「燕、城内はほぼ完全に制圧したわ。まだ一部で抵抗してるのがあるみたいだけど、降伏するのも時間の問題ね」

張月「ご苦労様です魔耶さん。実験の結果はどう…って、その様子だと言うまでもなかったみたいですね」

田豊「ふふ……ああ、それと極一部だけど、城外に逃がしてしまつた奴らがいるわ。一応彌姫を隊長に追撃隊を出しているけど、無駄足になりそうだから早々に切り上げるように言い含めておいたわ。よかったかしら？」

張月「…流石は魔耶さんですね。俺もそれで良いと思います」

戦いは始まりから一刻もしないうちに決着した。今は上記の会話からもわかるように、城内に残る敵の武装解除と、城外に逃げた者に対する落ち武者狩りを行っている。

太史慈「魔耶、残存部隊の制圧は終わったぞ」

田豊「…あら、噂をすればなんとやら…ね」

張月「炎馬さんお疲れ様です」

太史慈「うむ、少年もな。指揮している様子を遠目に見させてもらったが、なかなか板についていたぞ」

張月「そう言ってもらえると努力した甲斐がありますよ。あの日の対戦こそ、俺にとって全ての始まりですから」

太史慈「うむ！少年がここまで成長してくれて、お姉さんは嬉しいぞ！」

『ぎゅううつ！』

張月「！！！？ちよっ…炎馬さん！？」

田豊「あらあら…2人とも熱いわね。こっちまで火傷してしまいそうよ?」

そついうと、太史慈は張月へ抱き付いた。全力で。

端から見れば、美女に熱い抱擁を受ける男の図の出来上がりである。全くもって羨ましい限りだ。嗚呼、妬ましい…

…しかし、あえて言おう。”全力”である。”太史慈”の”全力”である。大事なことなので2回言った。

つまり、どついうことなのかと言つと…

『ぎゅううううっ!!』

張月「ちょ、炎馬さん待って!!? 力入れすぎ…痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!!!!!」

…張月重傷フラグである。

-
-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

張月「…え…突然ではあるが、臨時会議を開きたいと思う」

事後処理も一段落し、落ち武者狩りに出ていた周倉隊も帰還した
あとのこと。ギリギリのところでは重傷フラグを回避した張月は、賊
軍の根城の一角に参戦していた上層部を集めて会議を開いていた。
主題は『投降兵達の処遇について』である。

張月「今回の戦は皆の獅子奮迅の活躍もあり、見事に勝利：それも完全勝利に近い大勝を得ることが出来た。まずは皆の活躍を讃え、感謝したい。」

話は変わるが、先にも言った通り、今回の戦は我々の大勝に終わった。それにともない、我々は賊軍の多くを捕虜としたのは分かっているだろう？今回集まってもらったのは、彼らの扱いについて皆の意見が聞きたかったからに他ならない。率直な意見を聞かせて欲しい」

官亥「んむゝ…面倒くさいから、全員太守に突き出しちまえばいいんじゃないかねえか旦那？」

官亥が如何にも興味が無さそうな声で、真っ先に口を開いた。

張月「…狗葉らしくないまともな意見だな…まあ、一番妥当ではあるのだろうが…」

田豊「妥当だと言う割にはすつきりしない口調ね。おそろくだけど、すでに腹案があるのでしょう?。」

確かに官亥の意見は妥当なものであったのだろう。しかし、田豊には張月がそれとは別の考えを持っていることを見抜いていた。

張月「魔耶さんにはお見通しってわけですか…。」

田豊「燕は時々だけど、本音や考えてることが顔や仕種に露骨に出てるのよ。」

…まあ、今回は明らかに故意でしょうけど」

張月「……ふう、まだまだ魔耶さんには適いませんね。その通りです」

牛金「で、その腹案とやらはどういうものなんだ」

張月「平たく言えば、投降兵全てを警備隊に組み込む」

あまりにも直球な張月の考えに、田豊以外の面子は一瞬ざわつく。

そもそも、警備隊とは黄巾党の乱が起こった際、張月が『直属として動かせる部隊を創る』という思惑の下に設立した部隊なのである。

これまで、黄巾党の乱が起こるような気配は張月には微塵も感じられなかったが、何時何かの拍子に突然起きてしまうかもしれない。

そういうことを考えると、張月としてはこの投降兵達は是非とも警備隊に組み込んでおきたい存在であった。

…しかし…

田豊「…燕、私はさっきアナタは時々顔に本音が出ると言ったけど、

逆にアナタが何を考えているのか分からなくなる時もあるわ……そう、今みたいに。

この部隊はただでさえ天和達から資金の援助を受けて成り立っているのよ？ むやみやたらに隊員を増やせば、彼女達に余計な出費を強いることになるわ」

牛金「そうだ。それに、今の人員でも舞台警護と基地の設営は十分に機能している。そもそもの話、何故増員しねえといけないのかが解らん」

太史慈「少年、申し訳ないがお姉さんもその通りだと思う。少年には何か考えがあつてのことなのだろうが、無理に増員しなくてはならない状況とは思えない」

周倉「私達の諸経費が彼女達の収入を上回るようでは、無意味どころか悪害だと思うのだが…」

官亥「……？？旦那がそれが良いつつーならそれで良いと思うぜ……？」

…と、上層部はこの考えには全面的に反対であった。

官亥は話に着いていけてないのが分かりきっていたので、元より除外されている。

そして、これは無理もないことだった。そもそも、張月は”この世界に酷似した過去を持つ未来”を生きた人間であり、その未来において自分の国と海を隔てた所にある隣国で、過去に黄巾党の乱という反乱が起きたことを知識として知っている。

無論、この世界は張月が知る歴史とは異なっているため、張月自身が知識として学んだ出来事が必ず起こるという保証はどこにもない。

それでも、この世界が知識として学んだ時代に酷似している以上、張月はその歴史に基づいた予想を無視出来ない。

…では、張月以外は？

答えはもちろん『何かが起こることなど考えていない』といったところだろう。

彼女達は”今”を生きる人間であり、”この世界に酷似した過去を持つ未来”を生きて”今”に來た張月とは違って、この時代に何があったかを知っているはずがないのだ。

そして、そんな彼女達に張月が胸にしまい込んでいる”過去に基づいた思惑”を話したところで、何らかのある程度確実性のある証拠が提示出来ないかぎり、と心配されこそすれ理解してはもらえない。

田豊「…ま、この話はもう少しじっくり時間をかけて煮詰めましょう。燕にも何か思惑があるみたいだし」

…もつとも、田豊ほどの人物なら『近いうちに国が乱れるのでは？』という、張月の知識に近い予想を持っているのかもしれない。だが

からこそ、結論を先送りにしたのだろう。

ともかく、こうして臨時会議は結論を出さぬまま終了し、戦死者・負傷者の確認や捕虜の武装解除等を終えた後、一部の隊員を見張りに残して捕虜をしばらくの間根城に拘留することに決め、張月達は無事に帰還の途についた。

- 張月視点 -

陣地への帰還途中、俺は捕虜の扱いをめぐって幾度か上層部を集めて会議を重ねたものの、話は最後まで平行線を辿って結論が出ることはなかった。

…今考えてみれば、確かに無理もないことだった。なにせ、計算したらどう見積もっても、部隊の維持費等で天和達の収入の半分以上が消し飛んでしまうのだから。むしろ、魔耶さんがある程度俺の肩を持ってくれたのが不思議なぐらいだ。

何はともあれ、こんな有り様だったから俺の意見が通ることは難しいと思っていたんだ。

…しかし、この話は俺達が陣地に帰還してすぐ、一気に進展することとなった。それも、俺にとって良い方向に。

陣地へと帰還した俺は、即日ある人物の訪問を受けた。

まあ、訪ねて来たのが弘北さんであることは言わずとも分かることだろうと思う。

どうやら、すでに賊軍が何者かによって討伐されたことが伝わっていたらしい。弘北さんはその話を聞き、俺達が不在なのも合わせてそれは俺達の仕業だと即断。俺達の帰還を確認後、すぐに訪ねた次第らしい。

商人の情報網の凄さの片鱗を垣間見た瞬間だった。

…まあ情報網の話は置いて、その席で俺は色々と謝辞を述べら

れた後、正式な依頼として、弘北さん自身も加わっている商隊の護衛を頼まれたのである。

こうして依頼を受けた俺であつたが、俺達警備隊本来の仕事は舞台警護であり、何か特別な理由が無い限りはお断りするつもりだつた。今回の討伐だって、思惑があつてのことだつたし。

しかし、相手は弘北さんであり、色々とお世話になつた過去がある以上無碍に扱うことは出来ず、話だけは聞いてみる事になった。…で、その依頼の詳細を聞いてみたところ、目的地・進路・出発日時…の全てが俺達の予定と完全に一致。天和達にも相談したところ…

『受けてあげようよ！燕ちゃん達なら簡単だよね』

『兄さん達の恐ろしさを山賊どもに見せ付ける良い機会ね！』

『…受けて損は無いと思うわ』

…と、3人揃って肯定的（うち1人は善意、1人は短絡的突撃思考、1人は損得勘定。誰がどれかは推して図るべし）だったので、俺は翌日には承諾する旨を弘北さんに伝え、同時に警備隊全体にも同様の旨を傳達して来るその日を待った。

…そして約束の日、都市郊外で商隊と落ち合った俺達は、隊を天和達の護衛・運搬と商隊の護衛に分けると、一路北へと向かった。

道中、3回ほど山賊の襲撃を受けたものの、日頃からの調練や、先の根城強襲での経験などがプラスに働き危なげなく撃退。当初の予定通りに目的地までの護衛を成功させた。

…で、その結果…

張月「…と言うわけで、『定期的に商隊の護衛をしてくれないか？』
と頼まれたわけだが…皆どう思う？。」

田豊「何が『と言うわけ』なのかしら？。」

…なんてことになっちゃった次第である。

張月「魔耶さん、そこは気分的な問題…そう、様式美です。ツツコミを入れてはいけません。つーか、言わなくても分かってますよね？」

田豊「…それもそうね。まあ、私は実に有益なことだと思うわ」

張月「ですよ。これd「おい、待てやこらこの盆暗ども。様式美って何だよ！？そもそも、俺は説明を受けてないぞ！！」……剛鬼……」

田豊「…これだから空気の読めない剛鬼はまったく……殺るわよ？
発明品の実験台にして」

官亥「まったくだぜ……」

太史慈「ははっ、おっちゃんは空気が読めてないなあ」

牛金「いや、なんで俺は怒られてんだよ！！？大將はなんで憐れむような目で俺を見る！！」

それと狗葉！てめえさつき思い切り『え、ナニソレ？』な顔してた
くせに、あたかも知っていたかのようなこと言ってるじゃねえっ！
！！

炎馬もおっちゃん言うなっ！！人が一番気にしていることを……」

…なんて1コマがあったりしたのだが、ぶっちゃけどうでもいいこ
となので捨て置いておく。

張月「…話を戻すが、魔耶さんの言うとおり今回の依頼は俺達と商
人側（向こうさん）双方に非常に有益なことだ」

牛金「だから俺の話w『プスッ』……『ドサッ』」

田豊「まったくアナタって人は……燕、邪魔者は消えたわ。話を続けてちょうだい」

張月「ありがとうございます。手際が良いですね」

田豊「ふふ…慣れたことですもの」

張月「……………んんっ。では改めて、今回の依頼は隊員の実地訓練を兼ねて、天和達に頼らない独自の収入を得ることも出来るなど、俺達にとっても好都合な部分が多い。俺個人としては、これを受けない手は無いと考えている。皆の意見を聞かせて欲しい」

官亥「旦那が言うことだから間違いないだろう？アタイは大賛成だぜ」

俺からの問い掛けに即座に狗葉が反応する……が！

張月「狗葉…お前はもう少し自分で考えて……って、無理か。狗葉だし」

周倉「賢明だな主殿。狗葉だから仕方無い」

官亥「んだと彌姫い！？アタイの何が仕方無いってんだ！！」

周倉「お前の存在そのものに決まっている。
…それより何だ？あたしとやるってのか？」

官亥「じょーとーだぜ！！今日こそてめーを叩き潰して、白黒ハッキリ着けてやんよ！！」

周倉「面白い！！相手になってやろうじゃないか！！
…ただし、勝つのはあたしだっ！！！！」

そう叫ぶと、2人はあっという間に外へと消えて行ったのである。

張月「……………」

田豊「……………」

牛金「……………」（ピクピク）「

…そして、残された俺・魔耶さんは呆然とし、剛鬼は相変わらず沈んでいた。

-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

張月「…とりあえず、あの2人は後でしばらくとして……魔耶さん、今回の話は受けるってことで良いですか？」

田豊「…良いんじゃないかしら？ 私達に特にこれと言った不利益があるわけでは無いし、アナタ個人にとってもその方が良いみたいだし。」

…ああ、そうそう。ついでと言っては何なのだけれど、あの2人への仕置きは私に任せてもらえないかしら？」

張月「魔耶さんの賛成が貰えたなら何も問題は無いですね。それと仕置きは魔耶さんが殺してくれるなら安心です。そっちにつ

いては完全にお任せします。

…で、結局何をするつもりなんですか？」

田豊「ふふつ、ちょっと実験台に…ね。ちょうど新しい薬の実験台が欲しかったところなのよ。ふふふふ…」（黒笑）」

張月「…それはまた…まあ、楽しみにさせてもらいますよ。色々…」（黒笑）」

…この日の夜、陣中に狗葉と彌姫のものと思しき悲鳴が響き渡ったのは言うまでもないことだろう。
そしてその夜から数日の間、2人の姿が見えなかったことは決して無関係ではないはず。

ちなみに魔耶さん曰わく、『実験は大成功。満足のいく結果が得られたわ』とのこと。

彼女が開発した新薬が如何なるもので、どのような効果をもたらすものなのかは恐ろしくて聞けなかったことも、ここに追記しておく。

…まあ何はともあれ、警備隊は天和達に頼らない独自の財源を手に入れるとともに、図らずも商人から諸物資の無償・割安での提供を得ることに成功した。

これにより、警備隊は商隊護衛に人員を割く必要が出来、その結果として、多数の反対意見によって実行出来ずにいた賊軍捕虜の登用が、上層部全員の賛成を得てなんとか実現に漕ぎ着ける運びとなっ

たのは喜ばしい限りだ。

何せ、警備隊設立当初の目的が大きく前進することになるのだから…

鷹と竜（前書き）

新話が出来たので投稿します。

原作キャラが恋しくなっちゃった結果がこれだよ！…！というわけ、現状一番自由に動かせるであろうあの方登場の回です。

鷹と竜

商隊護衛が警備隊の正式な仕事となり、それに合わせて行われた処分保留のまま拘留していた元賊軍の警備隊編入が一段落し、魔耶さんに総指揮権を預けて始めた彼らの洗脳……調教……更正計画が目に見える成果を上げ始めたある日のこと。

俺は道行く多くの人々と四方八方から飛び交う喧騒には脇目も振らず、1人寂しく昼時に向かおうとしつつある大通りを歩いていた。

本来この時間帯は陣中で部隊の訓練か、魔耶さんが賊軍の警備隊編入に伴う更正計画に付きつきりとなつたために激増した事務処理に追われているのだが、一昨日にこの街での天和達の舞台公演は終わっており、それに付随した庶務は昨日の内に全て片付けていたので、最近では非常に少なくなつた貴重な休みを得ることが出来ていた。

また、休日は休日で天和・地和・人和の誰か、或いは全員。狗葉や叶・劉壁といった面子が一緒なことがほとんどなのだが、今日に限って狗葉は早朝から単独で出掛けて行つたし、ちびっ娘達は先日街に出掛けていたから出る気はなかった。天和達と言えば、一昨日の舞台が終わつた後に地和が熱を出して寝込んでしまい、命に別状はないが残りの2人はこの看病に付きつきりとなつていて外出どこ

るではなく、上記のような1人で寂しい休みとなっていた。

…もつとも、『1人寂しい』と銘打ちながら、ついさっきまで地和の見舞いに行っていて天和達と一緒にいたので『1人寂しい』というのは現時点では若干の語弊があるかもしれないが。

まあそんなわけで、やることも無くなった俺は今度こそ真正銘の1人寂しく、大通りの人混みの中を当て所もなくふらついているのである。

この街に初めて足を踏み入れたこと自体ほんの数日前のことであり、大雑把な道筋は把握しているものの、どこにどんな店があるのかなどはまったく頭に無い。

しばらく歩き、ふと頭上を見上げると、何時の間にか太陽は随分と高い位置まで昇っていた。

張月「…そう言えば腹が減ったな……陣地に戻る気もないし、今日はどこかで何か食っていくか…」

そう呟いて、俺はここまで流すように見ていた大通りの風景から、食事の出来そうな場所を探そうと目を凝らした。

そして少し進んだところで、俺は一軒の小さな店を発見した。入り口の真上にデカデカと飾られた看板を見る限り、どうやらラーメン屋のようだ。

張月「ラーメン…そう言えば、久しく口にしてないよな……よし、今日の昼飯はあそこにするか」

こうして懐かしさと期待を胸に、俺は店の中へと足を進めた。

店主「いらっしゃい！」

-
-
-
-
-
-
-

店の内部は思ったより広い…なんてことはなく店の外見相応…カウンターテーブルしか無く辛うじて10人前後が入れる広さだ。

そのカウンターテーブル席は、左端から三番目を除いてすでに先客で埋まっていた。

必然的に、俺はその空いている席に腰を下ろした。

店主「坊主、ここら辺の奴じゃねえな。どこから来たんだ？」

張月「青州だ。仕事の都合であちこちを回ってるんだ」

店主「ほう、若えのに対したもんだ。商人か何かか？」

張月「ん…用心棒みたいなもんかな？」

店主「…人は見かけによらねえもんだな…こう言っちゃ悪いが、と

ても腕っ節に自信がありそうには見えねえな」

張月「俺はどちらかと言えば頭を使っ役だからね。そう見られても仕方無いさ。

…もつとも、自分の身を守るぐらいの腕は持っているつもりだけど」

店主「…やっぱそうは見えねえな…まあいいか。で、注文は何する？」

張月「…担々麺を1つ」

店主「あいよ！ちよいと待ってな！」

店主と軽く身の上話をして、その間に板に書かれたメニューの中から真っ先に目についた担々麺を注文する。

客「親父っさん、餃子おかわり！」

客「聞いてくれよ。うちのかかあと来たら…愚痴愚痴…」

客「そりやどつからどつ見たっってお前の自業自得じゃねえか」

『ハハハハハ！！！！！』

店内は客たちの他愛も無い会話と笑いで満ちていた。店が狭いことも関係あるのかもしれないが、とてもやかましく、それでいて自然と笑顔になるような温かい場所だった。

俺はそんな店の空気を楽しみながら、注文品が届くのを待った。

そしてそのまま待つこと数分…

店主「へい、お待ちどうさん！味わって食ってけよ坊主」

威勢の良い店主の声とともに、上手そうな匂いを放つ待望の担々麺が俺の前に置かれた。

-
-
-
-
-

-
-
-
-

-
-
-

-
-

-

「失礼。御仁、隣に座らせていただいてもよろしいか？」

張月「ん？ああ、構いませんよ？」

「？」「忝ない」

…それは昼食の最中のこと。久しぶりのラーメンに夢中となり、思っていた以上の辛さに苦戦していた俺に左後ろから声が掛ける者がいた。

その凜とした声に釣られて見れば、そこに立っていたのは1人の女性だった。

地和と同じ水色の髪と全体的に白を基調とした服装が印象的で、見た目は文句無しで美人だ。

???「では失礼する。

…店主、この間のを頼む」

店主「この間の?…って、この間の嬢ちゃんかい。ってーとアレか
…少し待ってな」

そう言うと、店主は奥に引っ込んでいった。やり取りを見るに、この辺りの住人というわけではなさそうだが…

俺はこの女性のことが気になりつつも、そのままラーメンを啜ることに集中した。そして数分後、彼女の注文と思しきラーメンが出て来たのだが、店主がラーメンとは別に彼女の前に置いたそれを見て、俺は啞然とすることとなった。

店主「へい、お待ち！チャーシュー麺とメンマ特盛りだ！」

彼女の前にチャーシュー麺と共に置かれたそれは、ラーメンの丼よりも一回り小さい器に積み上げるように盛り付けられ、小さな山を形成しているという表現が正しいぐらいな大量のメンマであった。

???「おや？貴公もこのメンマがお好きかな？」

張月「え？いや、俺は別にそういうわけでは…」

明らかに尋常ならざるそのメンマの山に気を奪われていたら、注文した張本人に気付かれてしまった。何かやけに目が妖しい光を放っているような…

???「なんと！では貴公はメンマがお嫌いなのか！？」

張月「いや、嫌いってほどでも…」

???「メンマがお嫌いとは…なんと勿体無い。」

…どれ、ここで会ったのも何かの縁。このメンマの伝道師・趙子竜

が、メンマの素晴らしさをとくと教えてしんぜよう!」

…こうして、俺は延々と何時終わるとも知れないメンマ談議を受け続けるハメになったのである。

談議は客が次々と入れ替わっていても一向に止まる気配が無く、
1つ…2つ…と空席が出来るようになってもまだ続き…

店主「…嬢ちゃん、そろそろ夜に向けた仕込みがしてえから、一旦店を閉めてえんだが…出ていつてはくれないか？」

???「…ん?おや、もうこのような時間か。では、此度はこのぐ

らいにしておきましょう。

貴公のおかげで、なかなか有意義な時間が過ごせました」

張月「……そりゃあ…結構…」

…店主からの苦情でようやく談議が中断出来た時、店内に残る客はすでに俺とこの女性の2人のみ。時間も（おそらくだが）正午を大きく回ってしまっていた。

店主「さあ、2人ともつたと出てった出てった！」

こうして店主に白い目で見られつつ、俺とメンマの女性は半ば追い出されるような形で店を出た。大通りの人の賑わいがただか数時間ぶりのはずなのに、何故か懐かしく、同時に眩しく見たのは気のせいじゃないはずだ。

「……いやはや、追い出されてしまいましたな。どうかな？場所を変えてもう少しメンマについて……」

張月「……勘弁してくれ」

場所を変えてまで語ろうとする女性に、俺は肩を落として辟易しながらぼやいた。

店を追い出されるまでメンマについて熱く語られて気疲れしているのに、これ以上語られては堪ったもんじゃない。

「……ところで、貴公は武芸か何かを嗜んでおられるのかな？立ち居振る舞いを見るに、なかなかの武人とお見受けするが……」

張月「ん？……まあ、武芸を仕事にしているからそれなりには」

「……」「ふむ……とすると、どこかに仕官しておられるのか？」

張月「いや、私兵を率いて護衛のようなことをやっているんだ。俺は張月、字は慶鷹と言う。メンマの伝道師殿は？」

???「おお！そう言えば、名を名乗っておりませんでしたな。これは失念しておりました」

…あまりの熱さにすっかり忘れていたんだが、確かにお互いに名乗ってなかったんだよな。数時間に渡って（一方的に）話し合ったにもかかわらず。

…でもこの女性、確か名前言ってたような気がするんだが…確か…
趙…張…何だっけ？

「???」私は姓を趙、名は雲、字は子竜と申す。現在は見聞を広め、仕えるべき主を見つけるために各地旅をしている身でございます」

彼女の名を聞き、俺は啞然とせざるをえなかった。

趙雲、字は子竜。三国志に登場する数多の武将の中でも指折りの戦闘能力を持ち、義に厚く、俺が生きていた時代においては某無双ゲームの影響もあってか屈指の人気を誇る、かの人材マニア・曹操も欲しがった名将……この目の前のメンマ大好きな女性が、その趙子竜本人だというのだから無理も無いことだろう？

趙雲「…ん？張月殿、どうかなされたか？」

張月「!…いや、何でもない。気にしないでくれ」

突然のことに啞然としていた俺は、彼女に声を掛けられて我に戻った。

そしてすぐに『何でもない』と返したのだが…

趙雲「とてもそうは見えぬが…さては、私に一目惚れでもなさったかな？」

張月「いや、何でそうなる!？」

趙雲「張月殿：お気持ちは嬉しいが、私には将来を誓い合った殿方が…／／」

張月「だから何でそうなる!?!? だいたい俺はっ…」

何がどう飛躍したのか、なんか艶っぽい姿勢でそんなことを口にする彼女に、俺は咄嗟に反論しようとするが…

趙雲「なに、冗談だ」

張月「……とても冗談には聞こえないぞ……」

趙雲「はっはっは！連れにもよく言われますなあ」

：くつくつと笑う彼女を見て、俺の中での”趙雲”という人物像がガラガラと音を立てて崩れていった。

どうやらこの世界の趙雲は、なかなか素晴らしい性格の持ち主な変人のようだ。彼女の同行者が苦労しているであろうことが、なんとなくだが分かった気がした。

趙雲「いやはや、貴公はなかなか面白いお方だ」

張月「貶してるだろ？」

趙雲「はっはっは！そのようなことはございませんぞ？」

張月「…露骨にあからさまで、神経が逆撫でされるようだ」

趙雲「屈強な男子が弱い女子に手を挙げるのは感心出来ませぬぞ？」

張月「…言っとけ。貴女と話をしていると、いつか頭が爆発してしまいそうだ」

彼女の喰えない言動に、あまり関わらない方が得策だと判断した俺はすぐに別れて逃げ出そうと考えた。

趙雲「ところで、貴公はこの後何か御用事でもございますかな？よろしければ、しばしお付き合いいただきたいのですが…」

しかし 回り込まれてしまった。

張月「俺はこの後忙しいんだが…」

張月 は 再び 逃げ出した。

趙雲「ご冗談を。私の談議を焦る様子も見せずに聞いておいて、それはごぞいますまい？」

しかし 回り込まれてしまった。

張月「俺は嫌なんだが…」

趙雲「女子の誘いを断るとは…もしや、張月殿は男色…」

張月「んなわけあるかつ！！あつてたまるかああああ！！！！！！」

…ああ言えばこう言う。全くもって彼女のペースにさせられっぱなしだ。つか、男色って…orz

趙雲「はっはっは！まあ男色云々は冗談だ。

ちなみに、貴公が嫌がっても私は無理矢理連れて行きますぞ？」

張月「そうかそうか……って、拒否権無しかつ！？」

趙雲「うむ！連れは今日は2人ともどこかに行ってしまうておりましてな。申し訳ないが、夜までお付き合いいただきますぞ」

そう言つと、彼女はむんずと俺の服の胸ぐらを掴んだ。

張月「ちよっ、まっ…」

顔に息が掛かるぐらいに近くに……って…

張月「酒臭っ！？あんだ、酒飲んだのか！？」

趙雲「ん？…そう言えば、確かに昨夜かなり飲みましたが？
まあ、別に酔ってはおりませぬ故、今はどうでもよかるっ？」

…かくして、俺は彼女に物理的に驚掴みにされたまま、何処とも知れない場所へと……まあ、この街の中なのだが……抵抗することなく連行されてゆくのだった。

とりあえず一言、俺の中の趙雲像を返せ。

趙雲「ほう…では張月殿は、近頃噂に聞くようになった張3姉妹の舞台の警護を？」

-
-
-
-
-
-
-

張月「ああ。たかがその程度と思われるかもしれないが、喧嘩にスリに酔っ払いは日常茶飯事。酷い時だと、殺人や金目的で張角達を誘拐しようとした輩もいた。

戦場のように命の取り合いがそうあるわけじゃないが、これはこれで色々考えないといけないし、意外と大変なんだ」

趙雲に引きずられるようにして連れて行かれた場所は、そう遠くない点心の店だった。彼女曰わく

『喋り過ぎて小腹が空いた』

…とのこと。

そこで、最初は嫌々彼女の話聴いていた俺であったが、この彼女の話がまたなかなか興味深いものだった。

ほとんどは彼女の武勇伝や彼女の連れの笑い話とかだったのだが、その間に各地の情勢や中央の様子が窺えるのでつい聞き入ってしまった。

…で、その結果上記の通りほとんど打ち解けてしまったのであった。人間とは解らないもんだねえ…

趙雲「…奥が深いすな」

張月「だろ？それに命の取り合いがそうないとは言え、移動時に賊の襲撃を受けたことも少くない。少し前から商隊の護衛もするようになったから、賊との戦が増えるのは目に見えている。そう考えると頭が痛い」

趙雲「なる程…張月殿も苦勞しておられるのですなあ」

張月「…『張月殿”も”』とおっしゃるわりには、趙雲殿は悩みが無さそうに見えますが？」

趙雲「これは心外ですな。私も花も恥じらう1人の女子。それ故、常々何かしら悩みを抱えておるのですぞ…」

そう溜め息混じりに語る彼女の顔は、悩める乙女のそれ…なのだと思う。天和達も困ってる時とか、よくこんな感じの表情になるし。

と言うか、彼女にそんな悩みがあったとは意外だ。炎馬さんみたいに飄々としていて、悩みとは無縁そうな感じなのに…

趙雲「そうですね…例えば連れの鼻血とか、明日の昼食はこのメシマを食べようとか、路銀の問題とか、旅路の途中で食べるために買い込むメシマの量とか…」

張月「もういい。あんたがまともな悩みを抱えていると一瞬でも思った俺が馬鹿だった」

訂正。やはりコイツはコイツだった。何となく予想出来たとは言え、メシマ絡みの悩みはつかじやないか！
あと、連れの鼻血って何さ！？

趙雲「ところで張月殿。色々興味深い話を聞かせていただいたが、私としては張月殿がどれほどの武の持ち主なのか気になって仕方がないのだが…」

張月「…で？」

趙雲「…察しが悪いですな。いや、張月殿…すでにお気付きでしょう?」

張月「…『俺の実力が気になる』 『実力が知りたいから一戦しましょう』…ということでもいいのか?」

趙雲「分かっておられるならば話は早い。私とて一介の武の高みを目指す者。強き者との手合わせは心が躍るものです。そして、貴公はなかなかの武人とお見受けいたしました。
…一手、お付き合い願えますまいか?」

尋ねる彼女は真剣そのもの。今までの飄々としていた雰囲気は嘘のようだった。

しかし…まったく、突然話題を変えてくるからどんなことかと思えば…そんなことが。

張月「…貴女ほどの大それた理由はないが、俺も少しでも己を高めたいと思っていることに変わりはない。そうである以上、その申し出を受けない手はない！」

…五虎將軍の1人として、後世にも名高く伝わる趙子竜と闘えるまたとない機会だ。また、純粹な武人として自分がどのくらいのものなのかを知る相手としてこれ以上ない存在とも言える。断る理由など無いだろう？

-
-
-

-
-

-

趙雲「…さて張月殿、準備はよろしいか？」

張月「何時でもいけるぞ」

点心の店での会話からすぐに行動を始めた俺と趙雲の2人は、現在街の中央に近い場所に位置する広場で、衆目に晒されながら向かい合っていた。

本当はもっと人気の無い場所でやりたかったのだが、お互いにこの

街の地理に疎かったので、ここ以外に十分な広さを持っている場所を知らなかったのだから仕方ない。

『警備隊駐屯地^{じゅんち}でやる』という手も無かったわけではないのだが、今からだと往復だけで日が暮れかねないので没となっていた。彼女には連れもいるわけだし。

趙雲「では行きますぞ？決着の条件は”首等に一撃が入る”と”降参の意思表示”でよろしいですか？」

張月「了解だ。では…」

決着の条件を確認した俺達は距離を取って向かい合い、ここに来る途中で買った物干し棹を互いに構えた。

…え？武器はどうしたって？

…街中で得物を大っぴらにひけらかしているのはチンピラのやることです（それか兵士とか拠点（宿）を持たない旅人とか）。剣とか

脇差しぐらいならともかく、槍や薙刀なんかは基本的に持ち歩きませんよ（俺は）。

とりあえず、本来の得物はお互いに長柄の武器みたいだから（槍と薙刀）、物干し棹でも特に問題はないだろう。

張月「いざ…」

趙雲「尋常に…」

月・雲『…勝負っ！！！！！！』

掛け声を合図に、距離を詰めるべく俺は一直線に突進する。そして、それは彼女も同じだった。

…しかし、得物の違いからか俺が”斬り”だったのに対して彼女は

”突き”。振り上げるといふ予備動作が必要無い分彼女の攻撃の方が速く、なおかつお互い一直線に突進していたのでスピードにも乗っている。

張月（正面から受けるのはマズいか…！）

そう考えるよりも先に、俺の身体は進路を斜め前方へと変え、身を逸らしていた。

『ヒュン』

鼻先を彼女の突きが掠める。その突きの速さは、俺の目標たる炎馬さんと比べても何ら遜色ない。流石は趙子竜と言ったところか…

張月「っらあ！！」

『ブンッ！ガッ！』

少し崩れた体勢からで気休め程度ではあったが、俺は竿を横風ぎに払う。先手こそ許してしまったが、だからと言って何もしないで勢いに乗らせると防戦一方になるのは明らかだ。

結果として、スピードに乗っていた彼女はこの一撃を避けることが出来ずに真正面から受け止めた。

これにより彼女の勢いは止まったが、俺も体勢を崩しているので追撃は出来ない。

趙雲「ハアアアア!!」

『シュツ!』

張月「くっ…（速いっ!?）」

…苦し紛れの攻撃では本当に気休めにしかなかったようで、彼女はあっという間に体勢を整えると攻勢に出て来た。

俺はと言うと、体勢を立て直すことは出来ていたので、攻撃の対処は比較的楽に出来ていたが、当初危惧していた防戦一方となっていた。

…で、その結果。防戦に関する技術だけは、炎馬さんをして『むう…少年が守りに徹すると、お姉さん攻めきれないぞ』と言わしめる程の水準に、知らぬ間になっていたりしたのである。

彼女の攻撃は確かに速い。しかし、一撃一撃に狗葉みたいな桁外れの威力があるわけではないので、速さについて行けさえすれば捌くのは比較的簡単だった。

まあそう言うわけで、俺は防戦一方になりながらもかなり安定した闘いを繰り広げていたのである。

そして、優位に立ちながらも攻めきれないことに焦ったのか、はたまた攻め続けたせいで疲れが出たのか、時間が経つにつれて趙雲の攻撃には荒さが目立つようになって来た。

『ガン！ガッ！コンッ！』

趙雲（くっ…何という守りだ。私の攻撃がここまで尽く通らぬとは…如何にして崩すべきか…それとも、ここは一度仕切り直した方が

良いか？いや、しかし…)

『ガッ！ヒュン！ヒュッ』

張月（…突きの速さが落ちたか…？まあいい、何にせよチャンスであることには変わりないだろう！）

『ヒュン！ガンッ！！！！』

趙雲「むっ！？」

彼女の攻め手が緩んだと直感的に感じ取り、俺は守りから一気に攻めに転じる。

『ガッ！ゴッ！ガン！』

趙雲「くっ…」

ここまで耐え忍んできた鬱憤を全てぶつけるつもりはこの反撃で、彼女はペースを完全に崩し、攻めと守りが入れ替わった。

ここまで来たら、後は攻撃あるのみだ。何せ世界は違えど、あの名将・趙子竜に勝てるかもしれないのだ。1人の男、1人の武人として、ここまで燃える場面はそうないだろう。

この攻撃に、俺が今まで培ってきた全てをかける。俺にとってはそれだけの価値がこの闘いにはあった。

張月「おおおおお！！！」

『ガンッ！ガンッ！ガンッ！』

趙雲「……………」

斬り・突き・払い…
斬り・払い・突き…

ただただがむしゃらに勝利を目指して突き進む。食欲に、力の限りに…

…やがて、俺の猛攻に対する彼女の反応が鈍くなってくる。

『勝利は近い』

俺はそう確信し、さらに攻撃の手を強める。

…そして遂に、最大の勝機は訪れた。

『ガンッ！！！！』

趙雲「くっ！！」

それまでの攻撃とは一線を画した渾身の一撃を、彼女は防ぎこそしたものの、体勢を大きく崩してしまったのである。

張月（この勝負貰った！！）

俺は即座に物干し棹を思い切り振り上げた。

…これがいけなかった。

『最大の危機こそ最大の好機』…とはどこで聞いた言葉だっただろうか？まあ、それ自体は今はどうでもいいことか。

俺が言いたいのは、この言葉の裏を返せば『最大の好機こそ最大の危機』と言い変えることも出来るということだ。この時の俺は、まさに目前の好機に目が眩んで自身の危機に気付いていない状態だった。

勝ちを焦って振り上げるといふ予備動作を大きくしてしまった俺の

眼前には、彼女の渾身の突きが迫っていた。体勢を崩したのはおそらくわざとで、俺を誘い込む罠だったのだろう。

張月「うわっ!？」

俺は咄嗟に振り上げた物干し棹を、自身を守るべく反射的に防御にまわした。その結果…

『ガアンッ!!!…カランカラン…』

張月「しまっ!?!?!？」

彼女の一撃を受け流しきれずに、物干し棹は俺の手を離れて後方に転がっていつてしまった。

その意味するところは、つまり…

『ヒュッ！』

趙雲「……………」

張月「……………しくじったな……」

…俺の敗北という結果であった。

張月「…悔しいが勝負あり、だな…まだまだ精進が足りないか…」

この時の俺の心中は、悔しさとやり切った感がごちゃ混ぜの何と

も言えない状態になっていた。

得物こそ本来の物ではなかったが、全力を以てこれに当たり、持てる力を出し尽くした上で負けた。しかし、『まだ出せたのでは？』と思うこともある。

やり切ったはずなのに悔いがある。悔いが残っているのにやり切ったとも思える。何とも不思議な感情であった。

趙雲「…いや、引き分けでしょう」

張月「…は？」

敗北宣言をし、何とも言えない感情を味わっていた俺に、彼女が呟いたその言葉は衝撃的で、思わず聞き返さずにはいられなかった。もし同様の体験を10人がしたら、10人全員が俺と同じようにしただろう。

張月「…どういうことだ？」

趙雲「これを御覧になるがいい」

張月「うおっ!？」

俺の問いに、彼女は自身が使った物干し棹を投げて寄越した。

その物干し棹の上半分程には至る所にひびが入っており、中には皮一枚のところどころでなんとか棒の体裁を保っていると言える程のひびすらあった。おそらくあと1合でも打ち合えば、ひびの入った部分からボツキリ折れてしまうだろう。

これから察するに、この物干し竿ではもうトドメが刺せない。よって引き分け…といったところだろうか？

張月「趙雲殿の言いたいことはよく分かりました。ですが、この闘いは俺の中では俺の完敗です。この事実に変わりはありませんよ」

趙雲「いや、しかしそれでは私の納得がいかなのだ」

俺の敗北宣言に異議を唱える趙雲。彼女の中では、あくまでこの闘いは引き分けなのだろう。

張月「…この闘い、俺にとっては何がどうであろうと俺の完敗です」

趙雲「だか」「そして、趙雲殿にとっては何とか持ち込んだ引き分け…それでいいのではないだろうか？」…どういふことか、伺ってもよろしいかな？」

張月「勿論だ。

…で、結局のところ俺が言いたいののは、この闘いの結果を次に上手く繋げるかどうかは俺と趙雲殿の裁量次第なんだ。他者の意見が必要無いとは言わないが、自身が引き分けだと思ったなら、その闘いは引き分けなのさ。次では勝利を得られるように鍛錬・研究をすればいい。大事なのは自身がどう考えるか。

…ただそれだけのことだ」

趙雲「……なるほど。確かにそれもそうですな…」

どこか納得がいつてなさそうなところがあるように見えるが、俺の言いたいことはとりあえず理解してもらえたようだ。

張月「まあとにかく良い勝負だった。色々勉強させてもらったよ」

そう言つて、俺は右手を差し出した。これを見て、趙雲も右手を出して言った。

趙雲「…いや、それはこちらの台詞でもありませんな。己の未熟さを改めて知ることが出来た。感謝しますぞ、張月殿」

俺と趙雲は握手を交わした。狗葉なんかにしてもそうなのだが、彼女の手はその身に違わず、どこからあれだけの力が出せたのか疑問に思う程細かった。狗葉や彌姫と違ってしっかりと手入れが施してある分余計に。

趙雲「…さて、張月殿。名残惜しくはあるが、観衆がつるさくなってきた上、連れも何か言いたそうにしております故、ここらでお暇させていただこう」

張月「ん？…ああ、そういえば確かに騒がしいな」

彼女の言葉とざわついた空気で、俺はようやくここが街のほぼ中心部で、現在多数の衆目に晒されていることを理解した。

…とすると、この闘いは民衆に見られていたわけだ。そう考えると何か恥ずかしいな…

趙雲「張月殿、私は明日にはここを立つ予定だ。また機会があれば、是非手合わせいたしましょうぞ」

張月「ああ。次こそは勝たせてもらうぜ？」

趙雲「だからあれは引き分けだと……」

張月「ははははは！それは言わない約束ではなかったかな？」

趙雲「…ふふ、そうでしたな。ではまたいずれ」

張月「ああ。趙雲殿、お元気で」

趙雲「張月殿もな」

かくして、俺達は後腐れなく別れ、趙雲は彼女の連れがいると思しき場所へ、俺は陣地に戻るべく東側の門へと歩き出した。

そしてその途中、この手合わせを観戦していた民衆に囲まれて、その囲いをようやくと脱出した時、すぐ近くから話し掛けてくる、よく聞き慣れた声が聞こえた。

官亥「惜しかったな、旦那」

張月「狗葉……見られていたのか。これはまた恥ずかしいところを……」

よく聞き慣れた声の持ち主…狗葉は俺の隣に並び、普段はけっこう大股な歩調を俺に合わせた。

官亥「まったくだぜ。旦那はアタイ達の大將なんだから、本気を出せばあの程度簡単に倒せるだろ？アタイだったらあんな奴瞬殺してるぜ？」

張月「まさか。そんな簡単にいくわけ無いだろ。だいたい、俺は狗葉じゃないのだから狗葉ほどのことは出来ないさ」

官亥「…弱気だな、旦那は。…じゃ、もし戦場でそういう…旦那が勝てない奴つてのに遭ったらさ、アタイがぶっ飛ばしてやるからすぐ呼んでくれよ？」

強気発言をする狗葉に、慎重な意見を持つ俺は臆病者…あるいは守ってやるべき者にでも見えているのだろうか？

それでも、俺の手合わせの対狗葉戦の勝率は7割ほど。その他の手

合わせを総合した勝率も、狗葉を上回っている。

…つまり、数値上の話ではあるが、俺は狗葉よりも強いのである。

そもそも、突撃第一思考なお前の戦い方じゃ、趙雲に良いよう遊ばれるだけ……いや、これは今は余計なことか。

張月「…そうだな。もしその時が来たら、遠慮なく頼らせてもらおうか」

官亥「おう」

…もつとも、そうそうそんなことにならないように努力するがな。

その後は他愛も無い会話を交わしつつ、俺と狗葉は肩と頭（身体的な理由で）を並べて夕焼けの通りを陣地へと向けて歩いて行くのだった。

鷹と竜（後書き）

いかがだったでしょうか？

完全にうる覚えかつにわかですので、星さんの口調に意見がありましたら、銃弾をフルオートでバラまくぐらいの勢いで殺っちゃって下さいませm（――）m

そして、これが今年最後の投稿になると思います。

一足早いですが、皆さん良いお年を。そして、来年もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7784r/>

流騎将伝～序章・黄天の鷹～

2011年12月19日19時53分発行